The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	(浄瑠璃)古活字版系写本二種 : 関川本(浄瑠璃)の紹介を中心に
Author(s)	信多, 純一
Citation	大阪大学文学部紀要. 1980, 20, p. 1-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11022
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

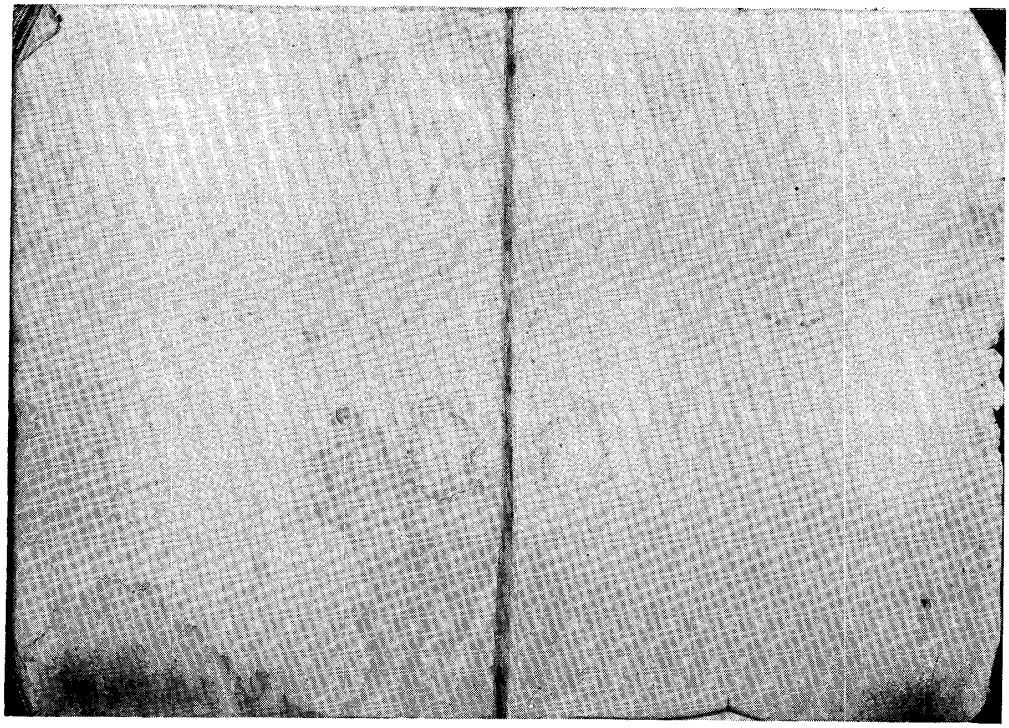
〔浄瑠璃〕古活字版系写本二種

――関川本〔浄瑠璃〕の紹介を中心に――

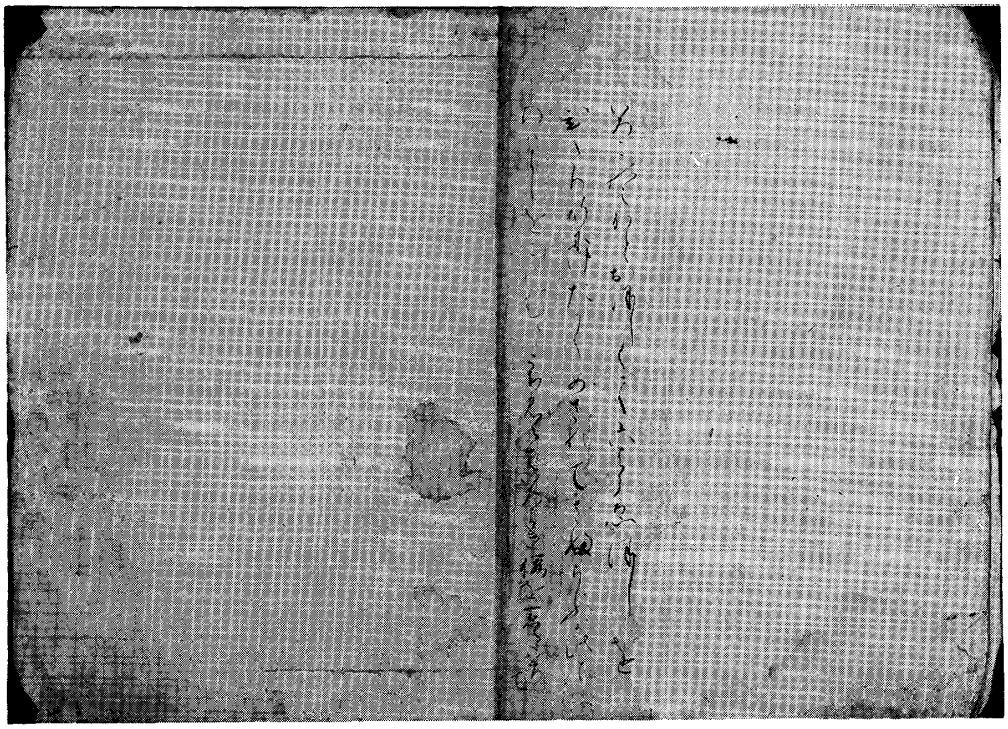
信多純一

裏表紙

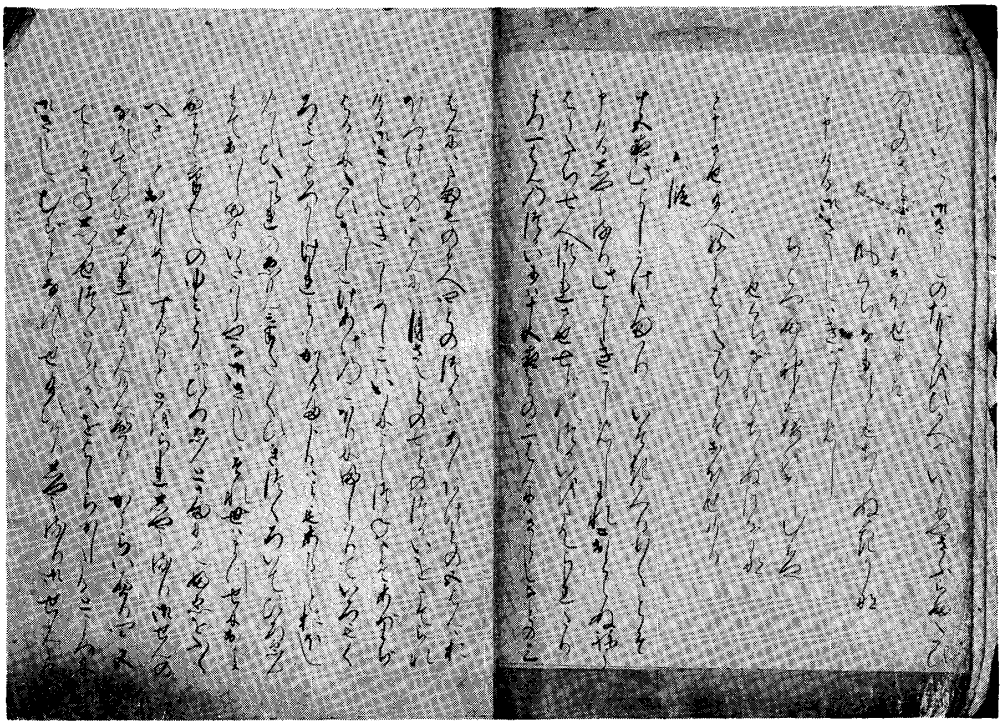
表紙



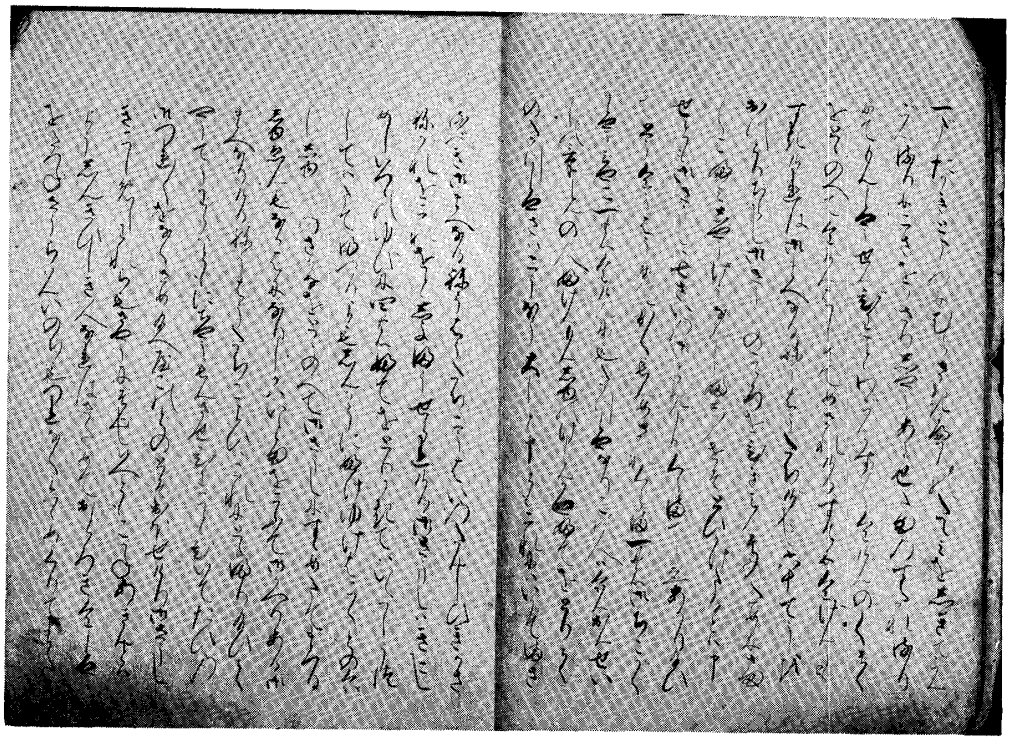
1オ　　見返



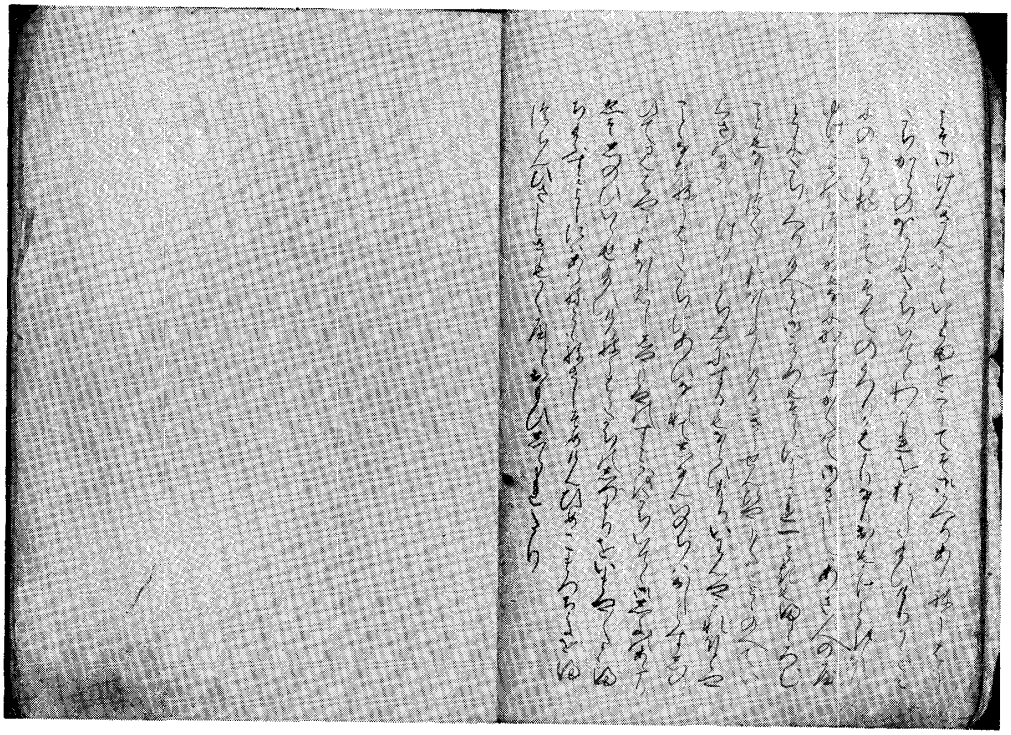
2オ　　1ウ



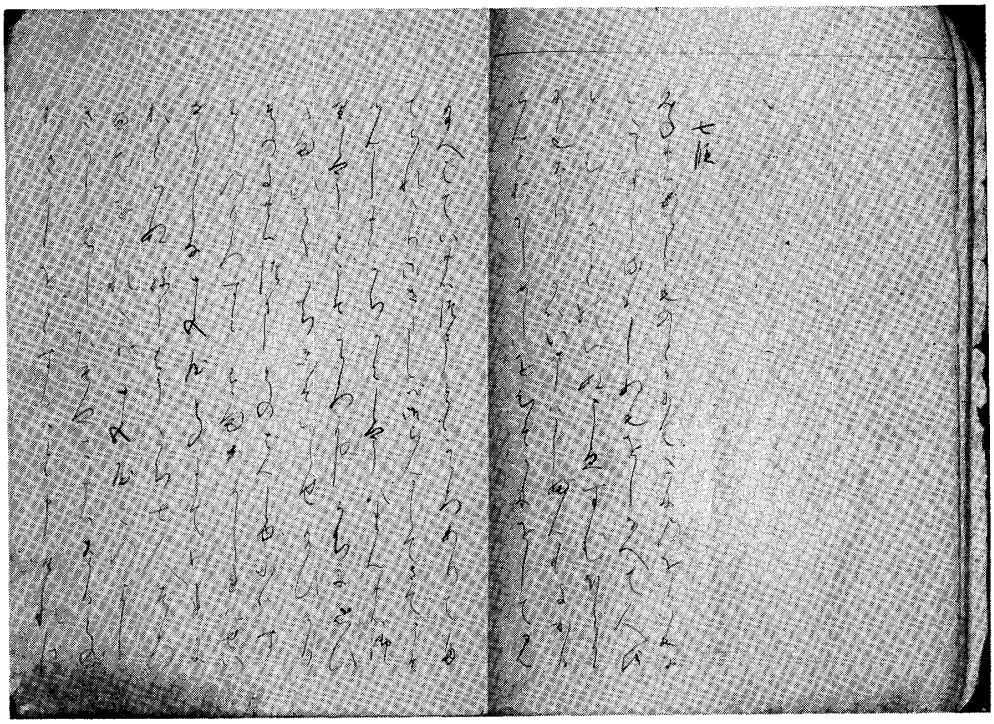
3オ　　2ウ



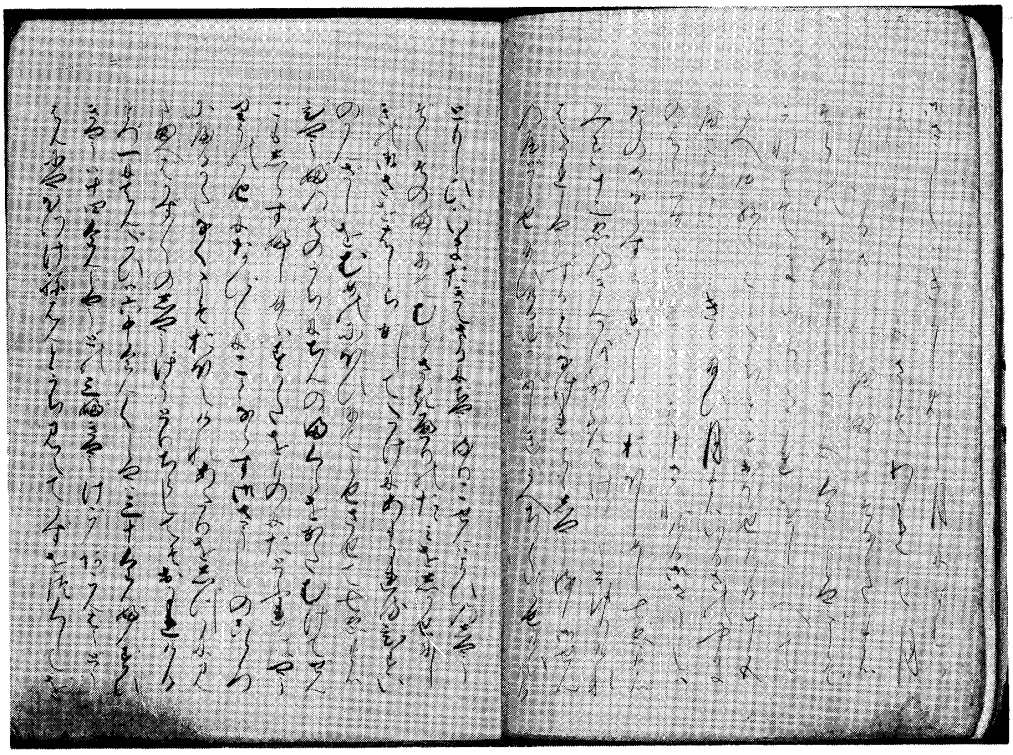
4オ　　3ウ



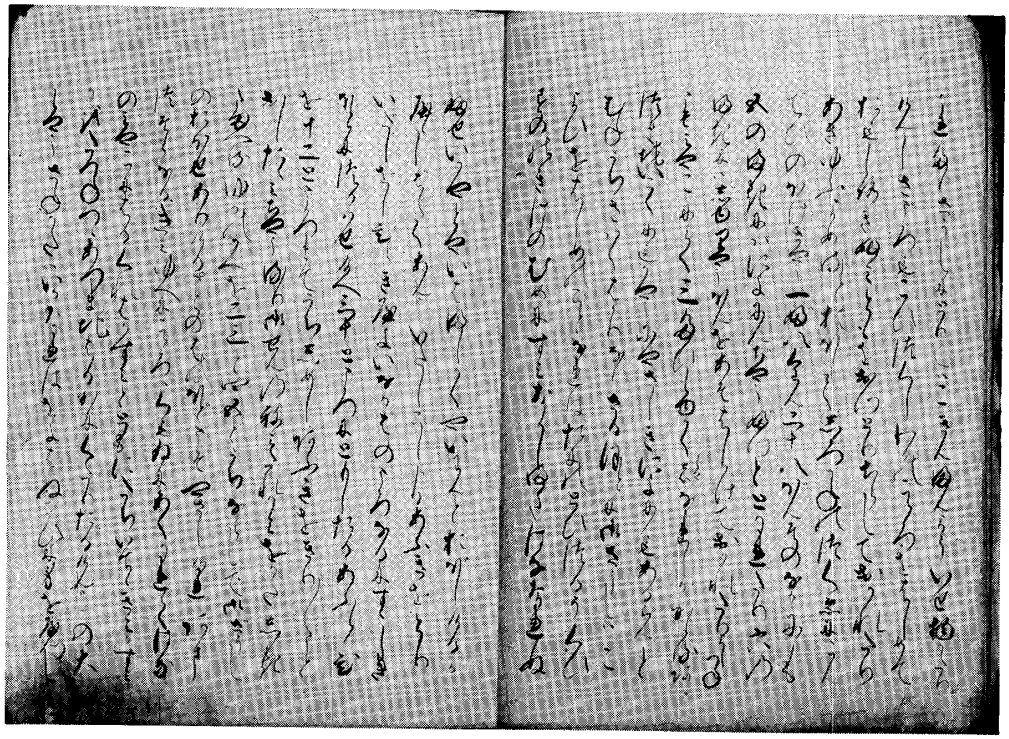
5オ　　4ウ



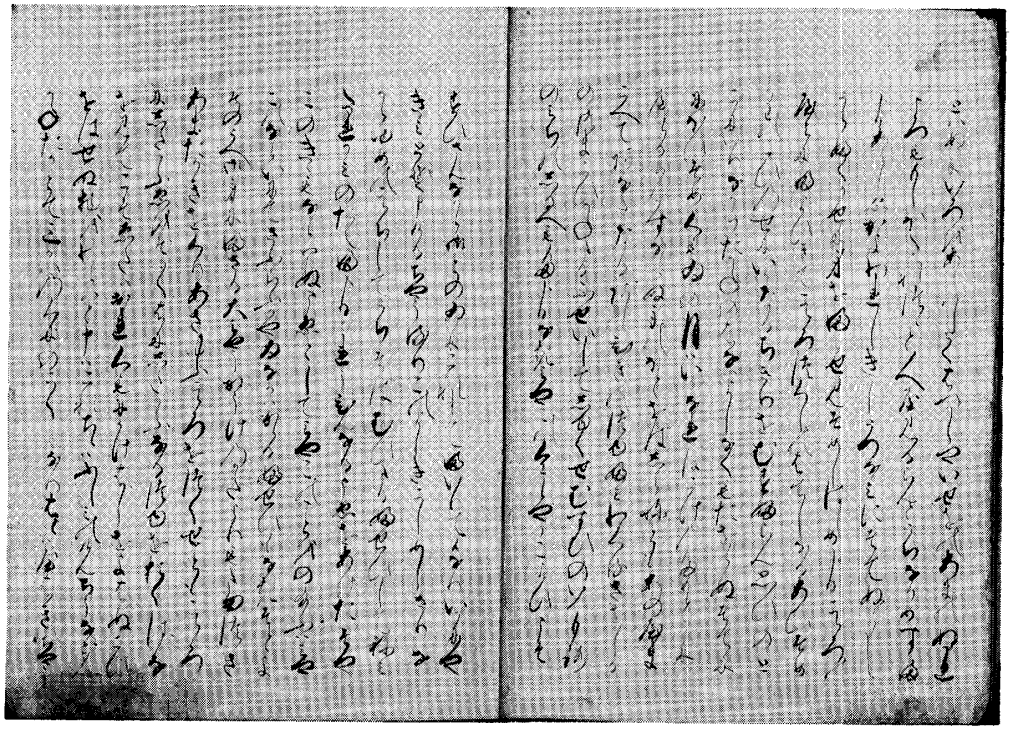
6オ　　5ウ



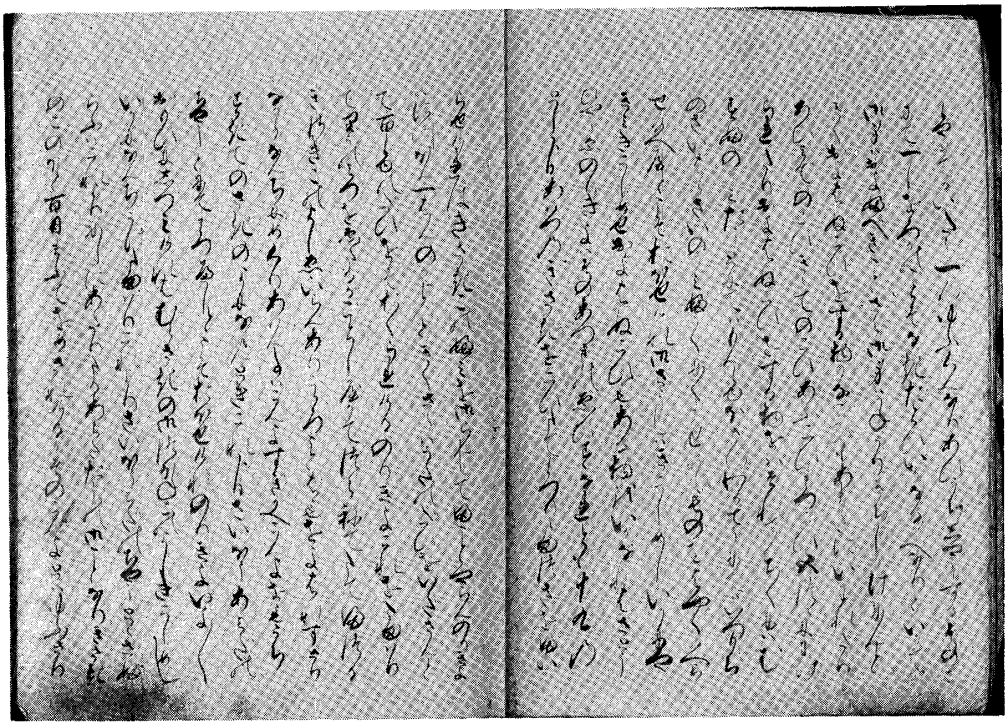
7オ　　6ウ



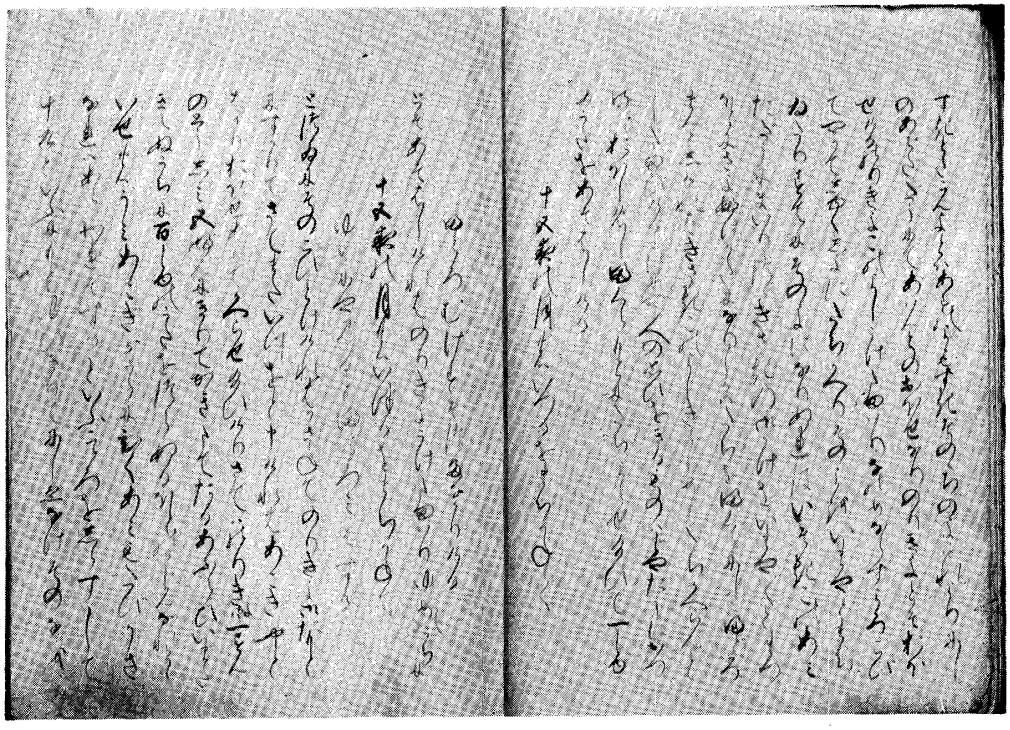
8オ　　7ウ



9オ　　8ウ

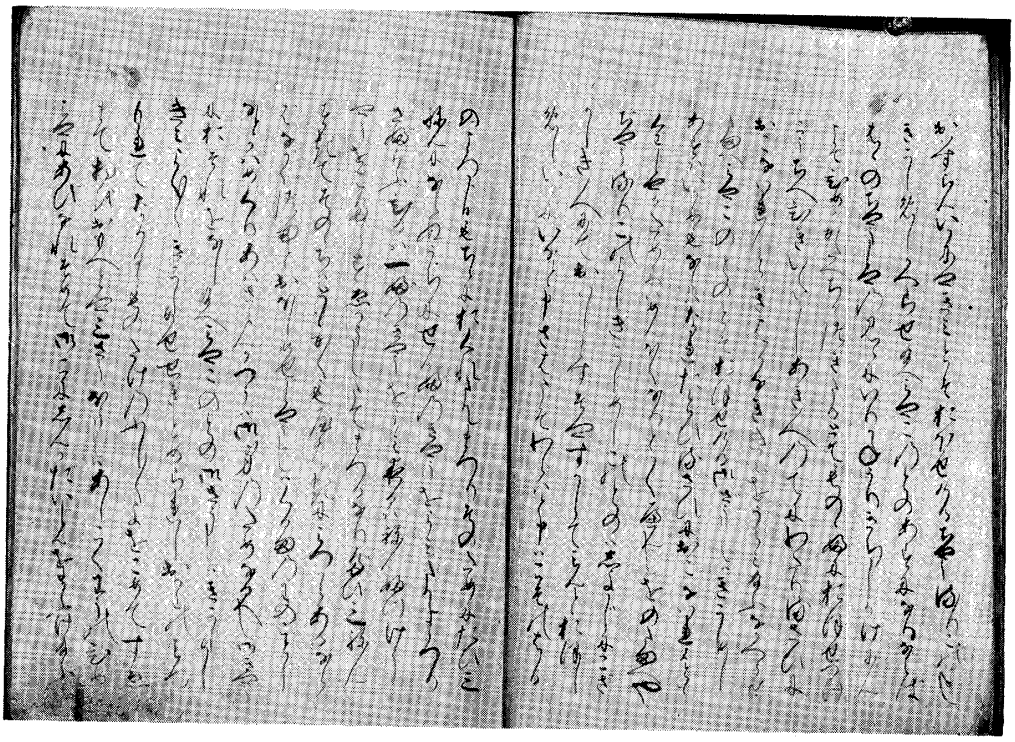


9ウ　10オ

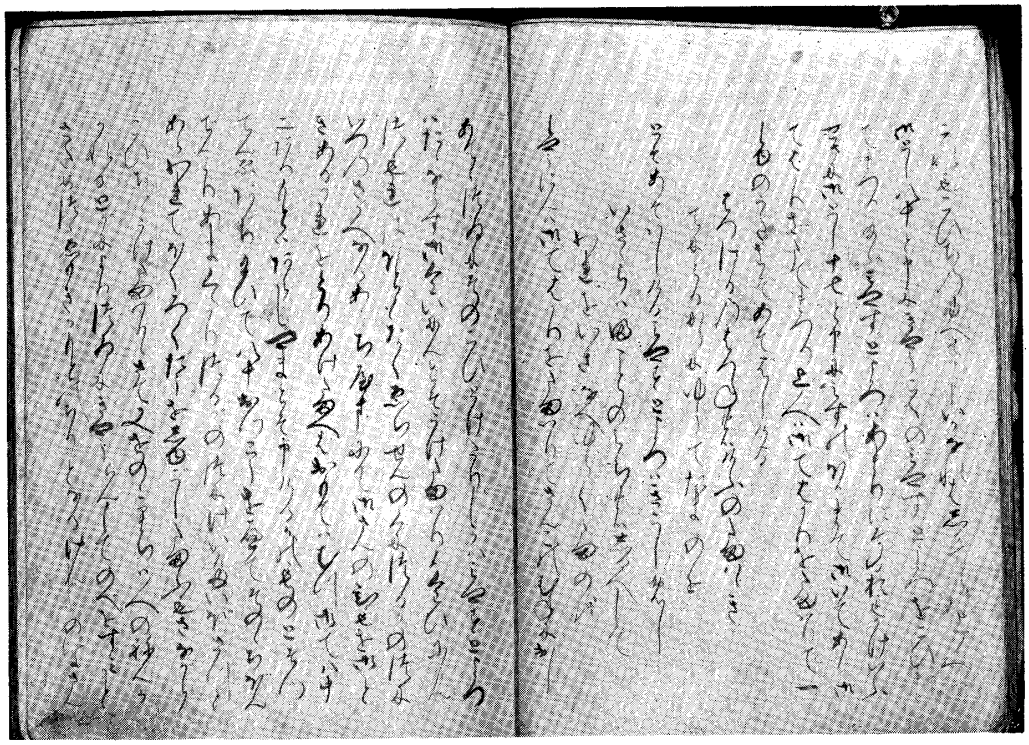


10ウ　11オ

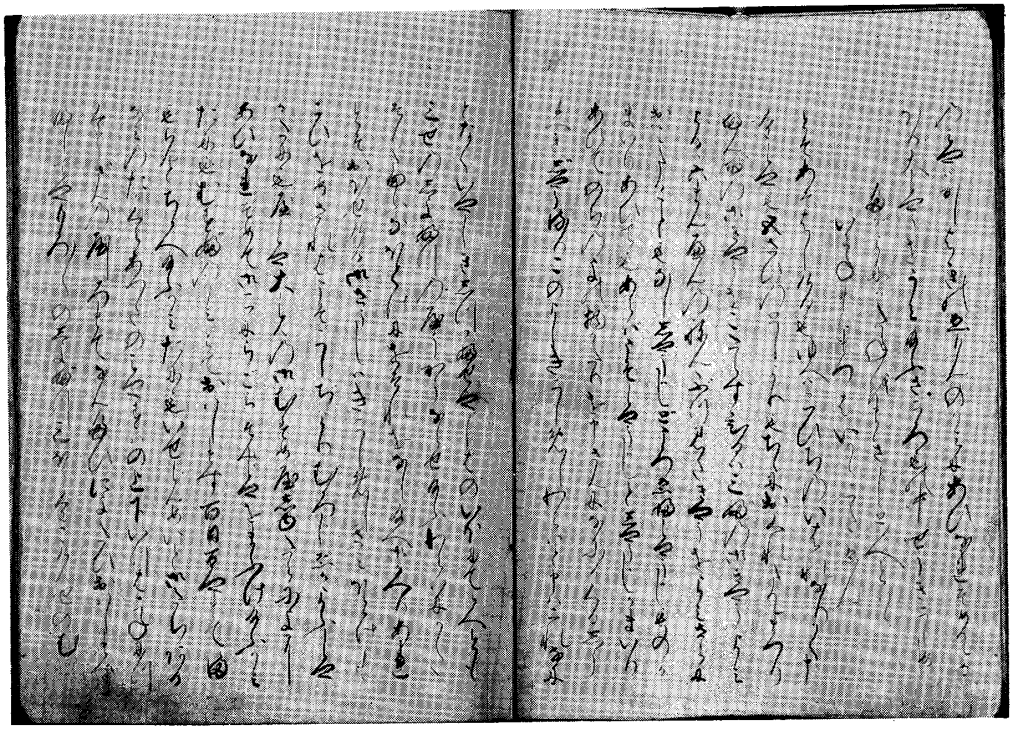
12オ　　11ウ



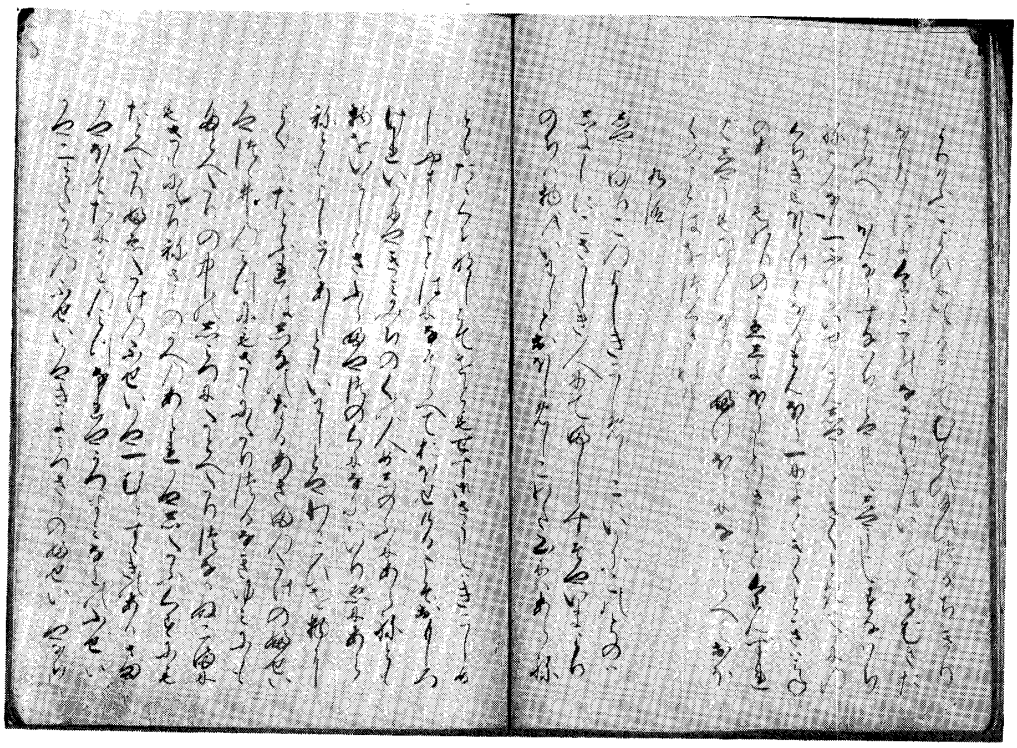
13オ　　12ウ



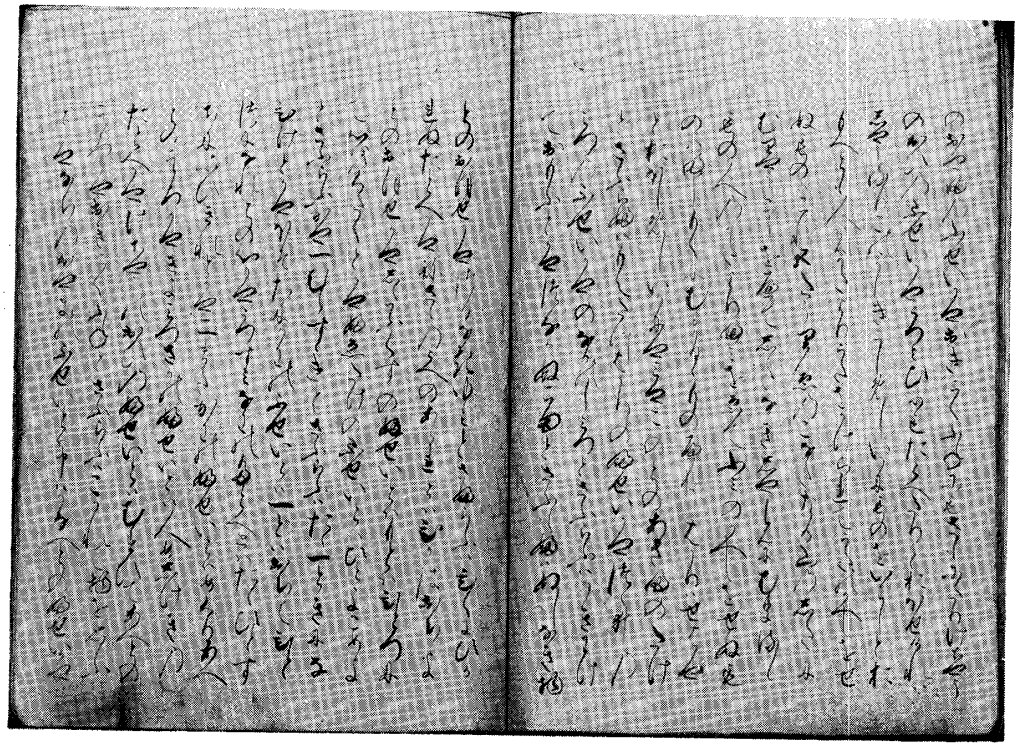
14オ　　13ウ



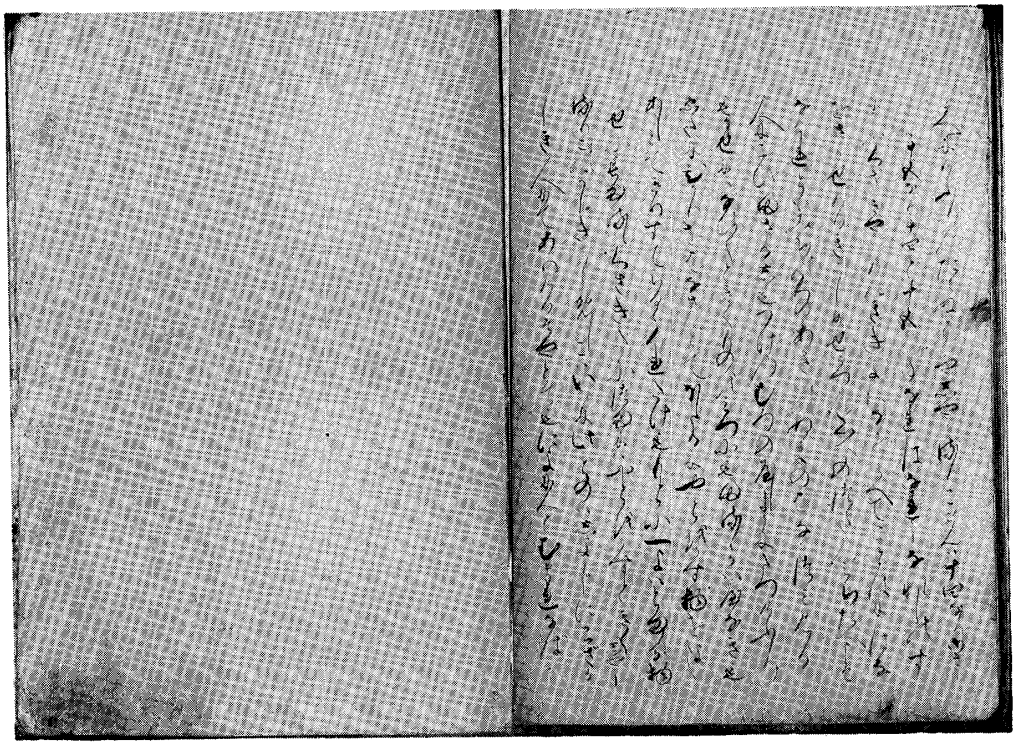
15オ　　14ウ



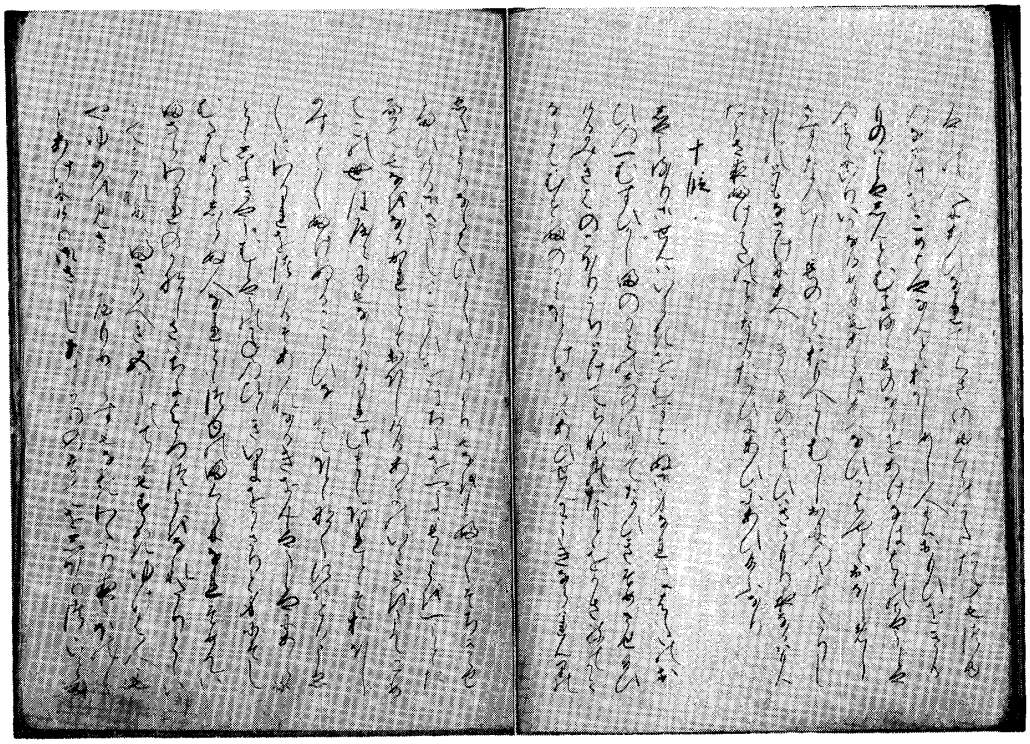
16オ　　15ウ



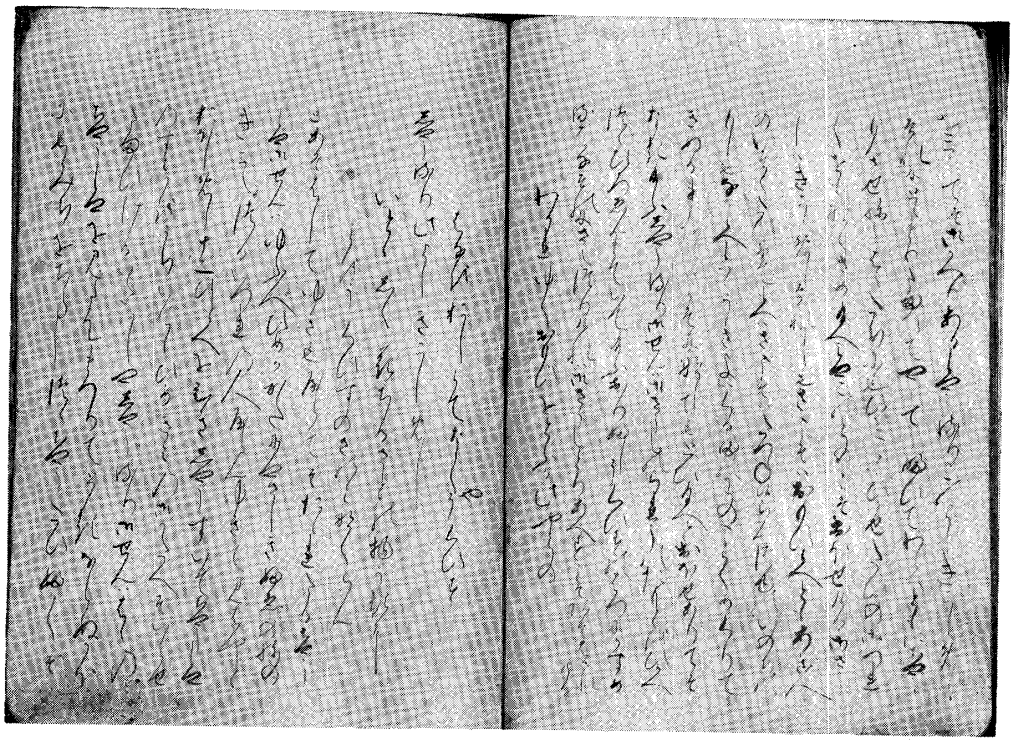
17オ　　16ウ



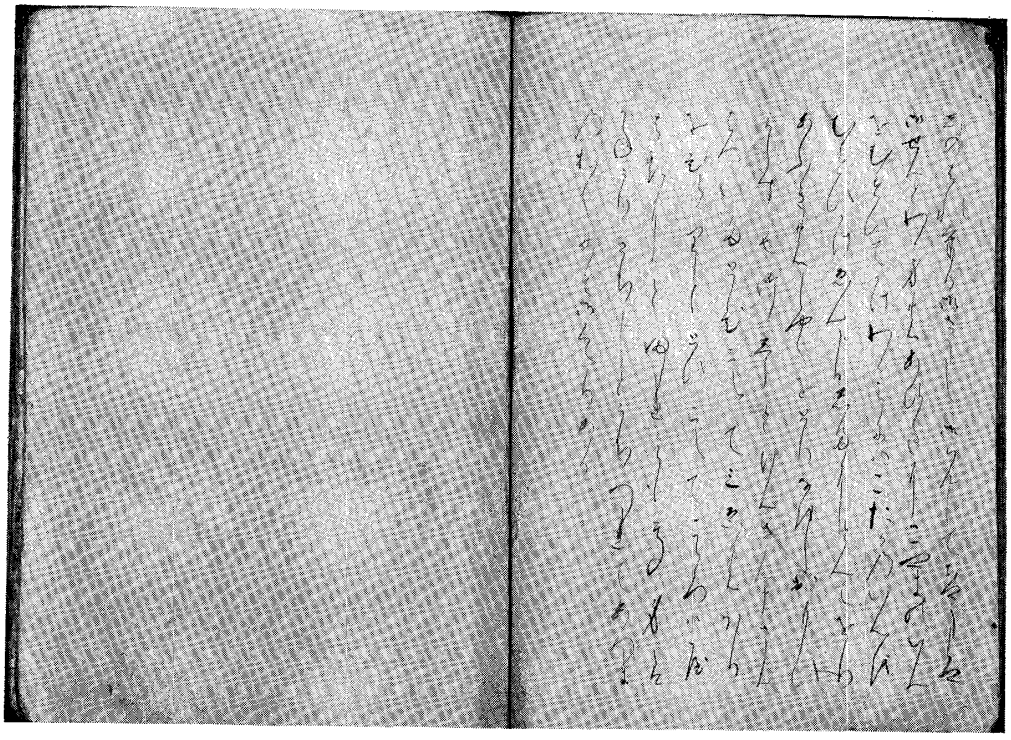
18オ　　17ウ



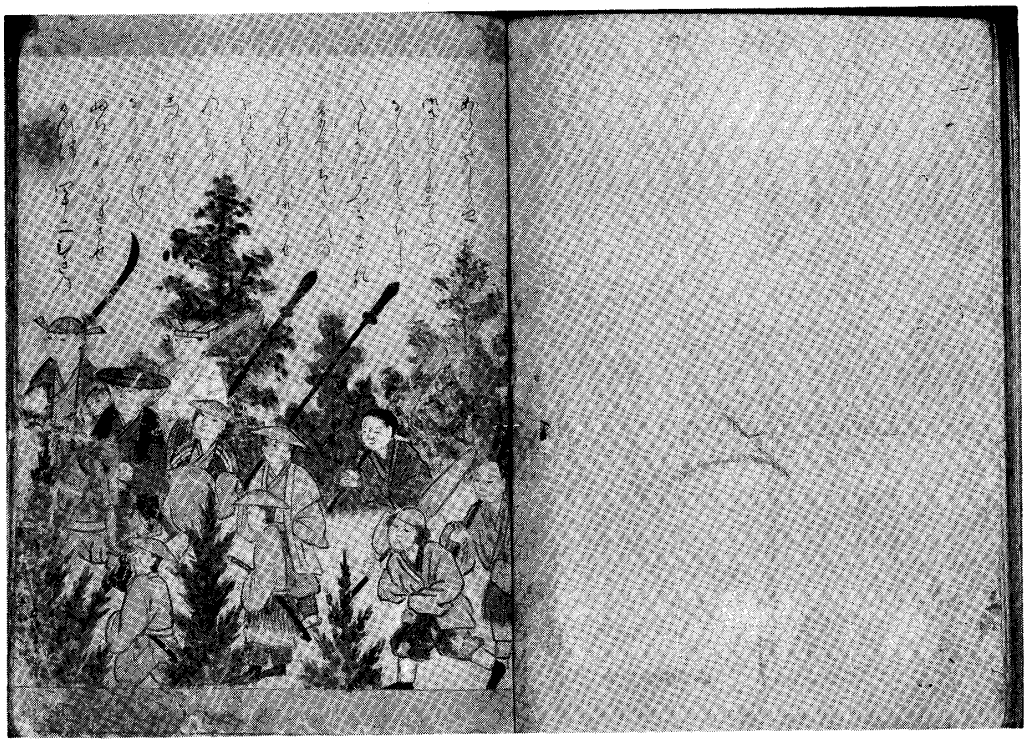
19オ　　18ウ



20オ　　19ウ

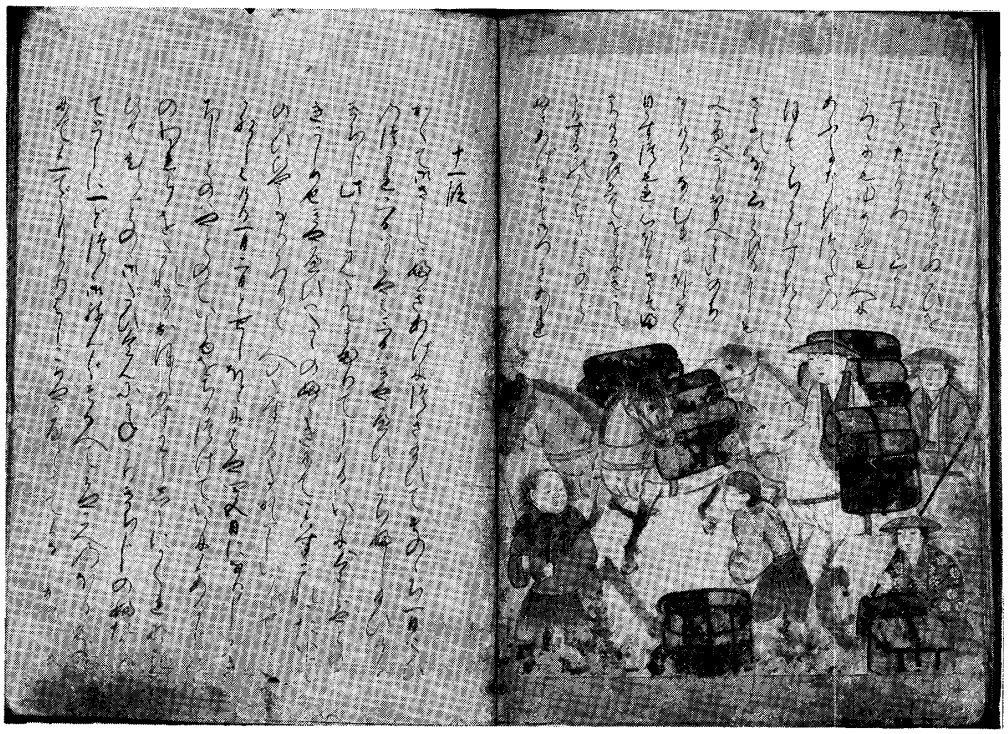


21オ　　20ウ

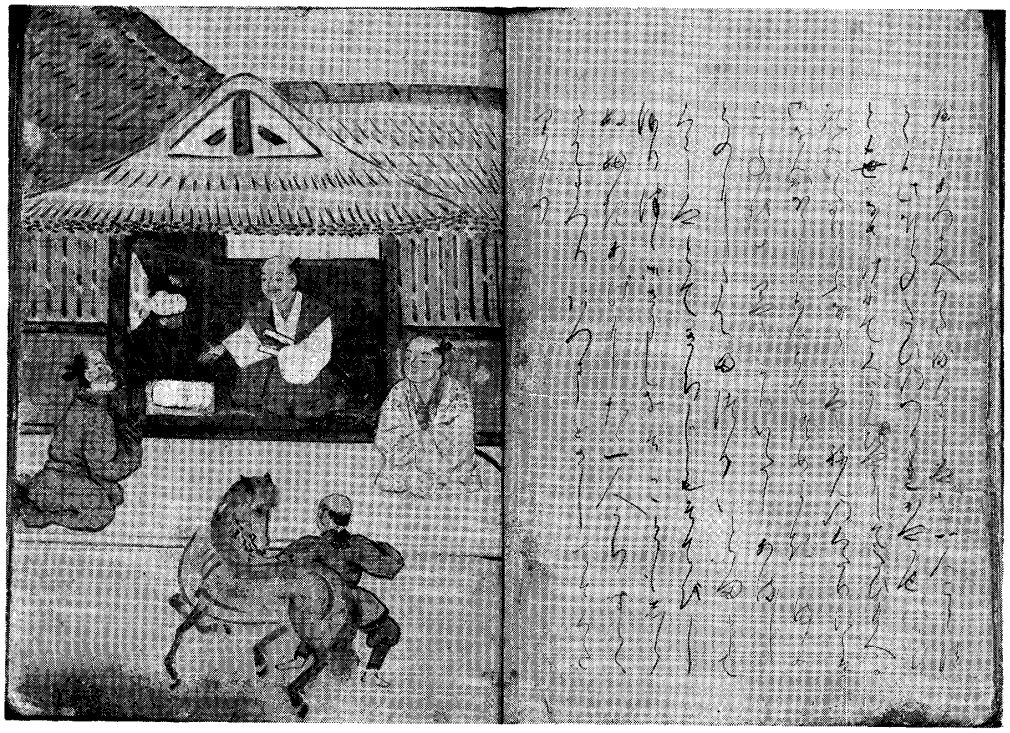


22オ　　21ウ

23オ　　22ウ

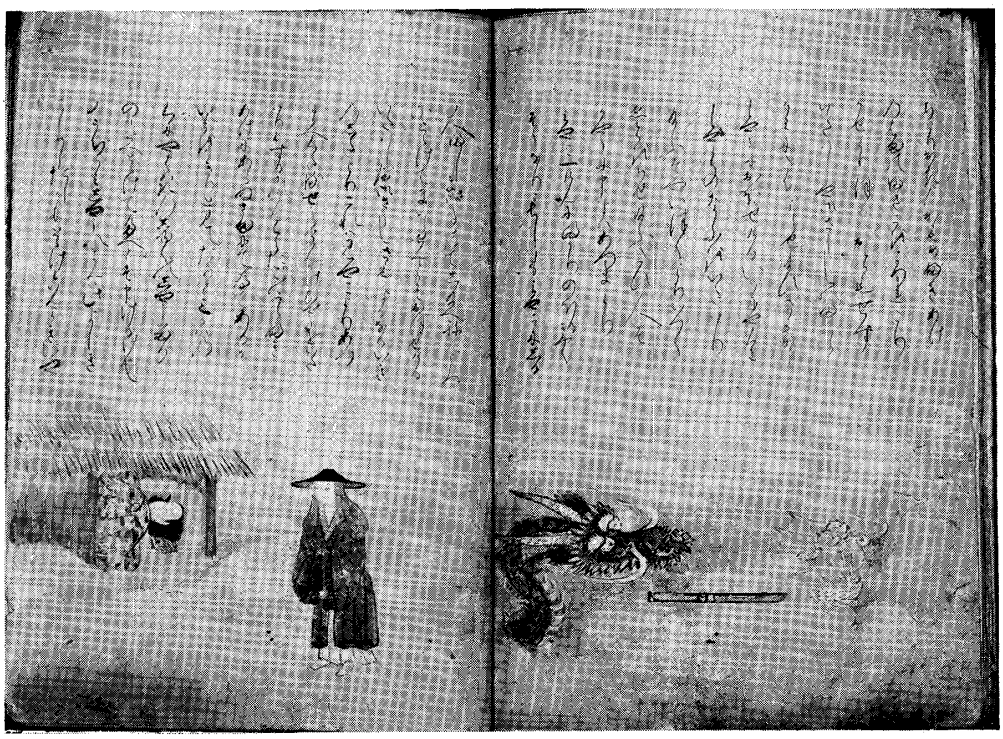


24オ　　23ウ

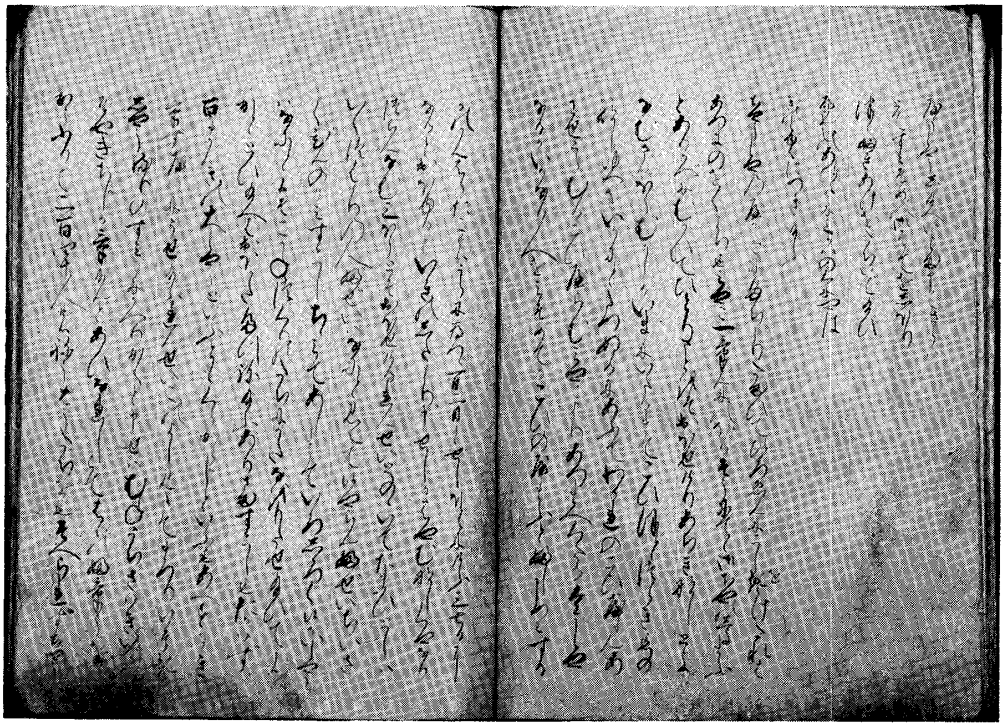


25オ　　24ウ

26オ　　25ウ

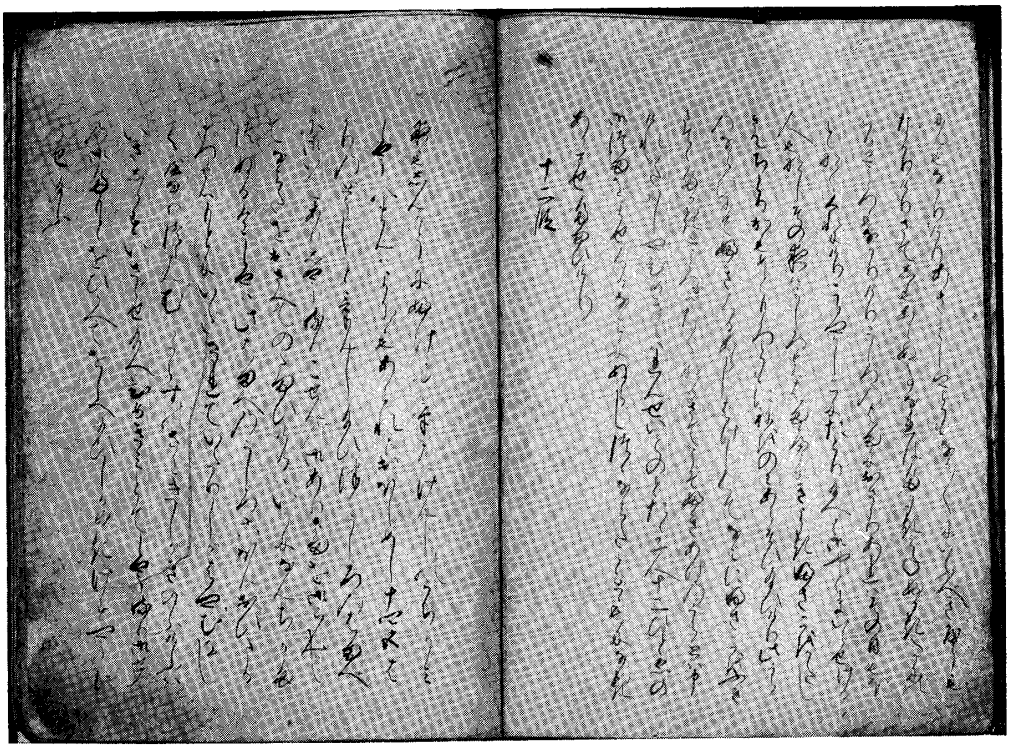


27オ　　26ウ

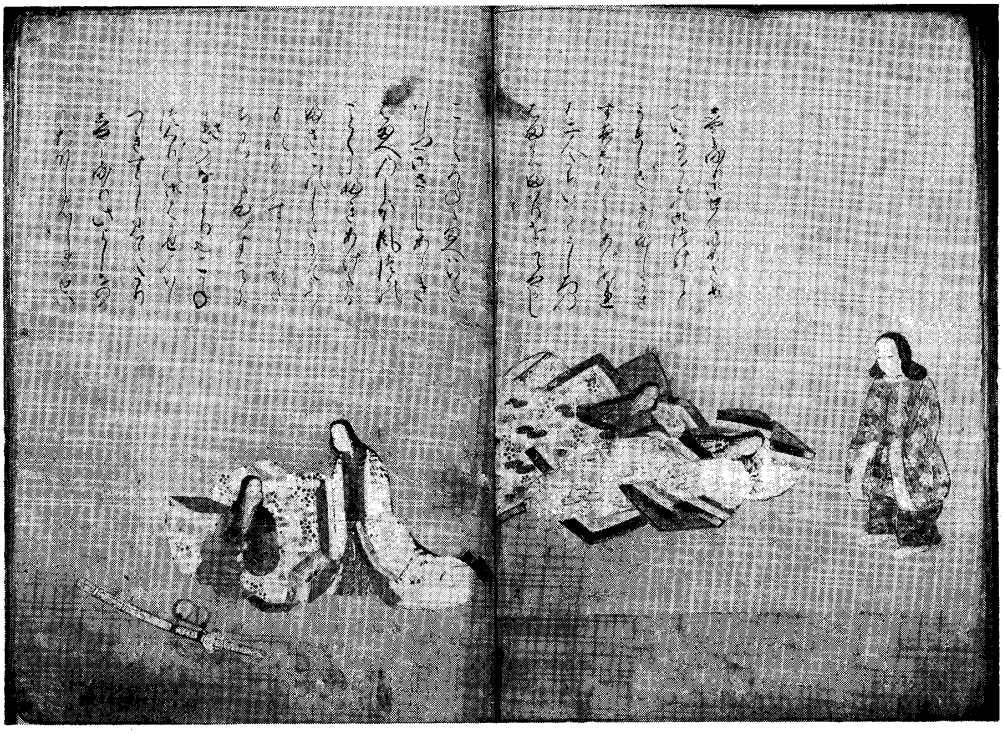


28オ　　27ウ

29オ　　28ウ

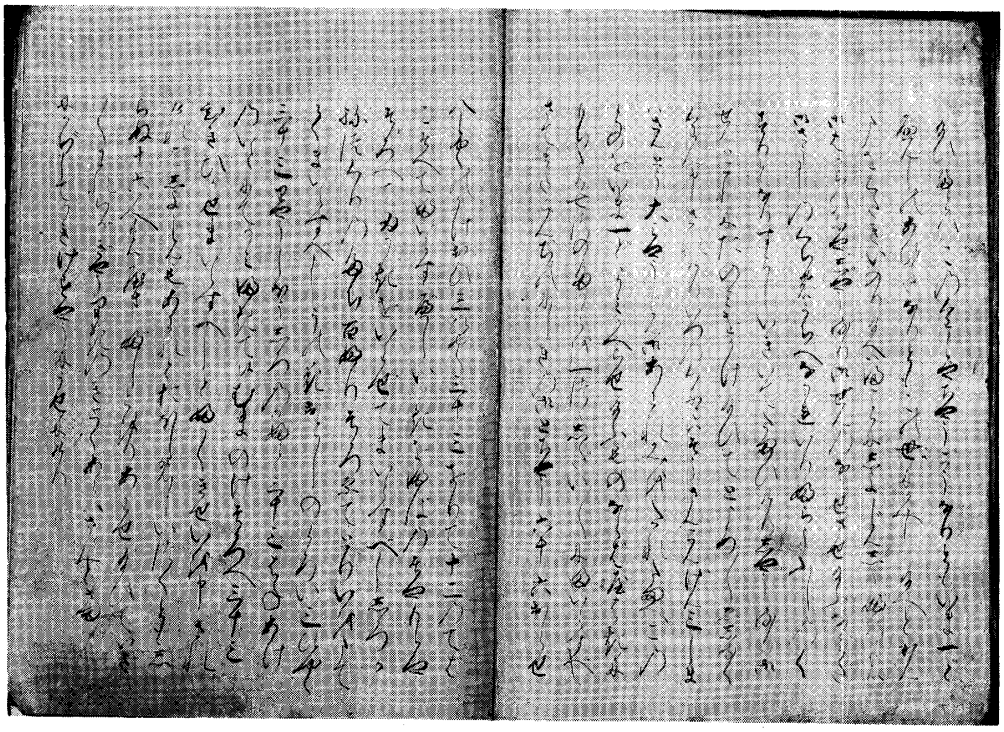


30オ　　29ウ



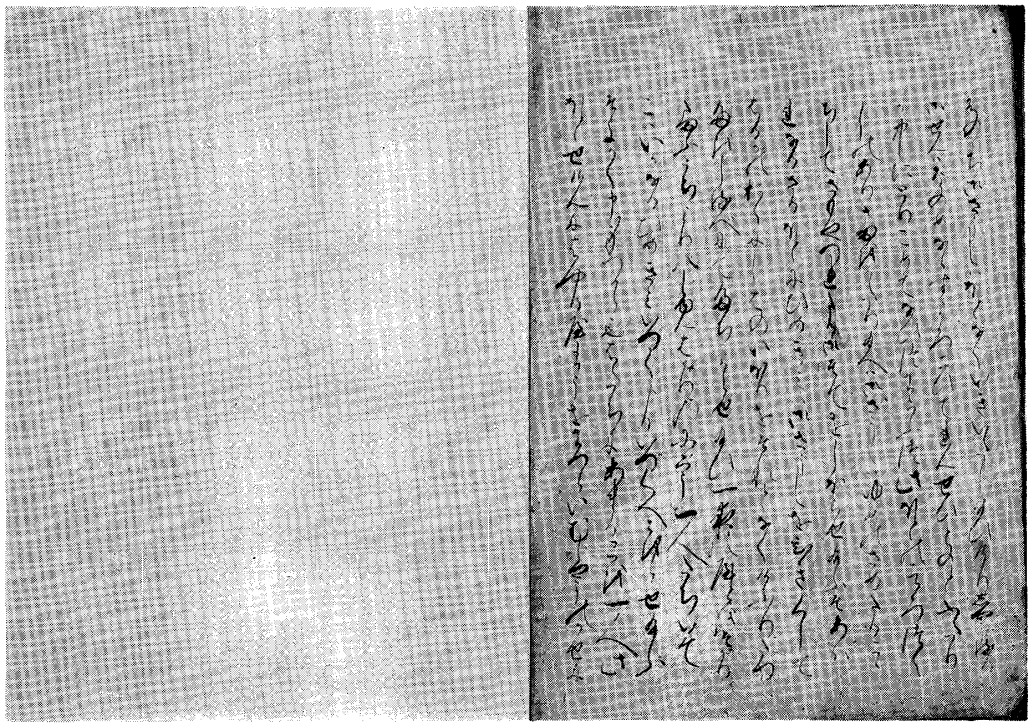
31オ　　30ウ

32オ　31ウ

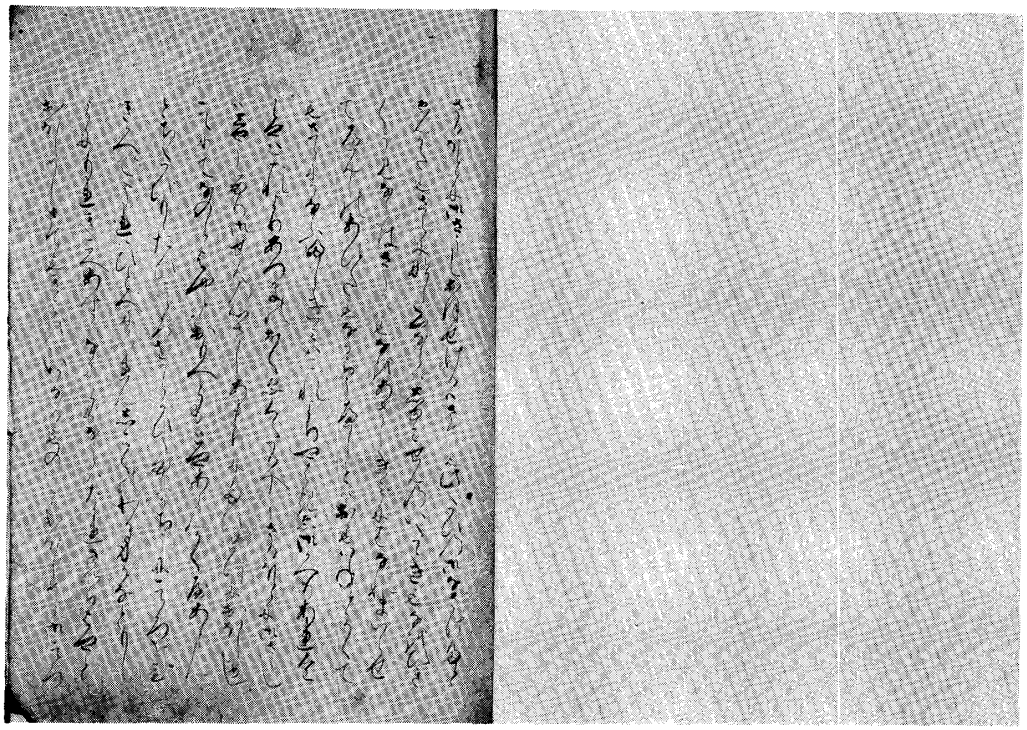


33オ　32ウ

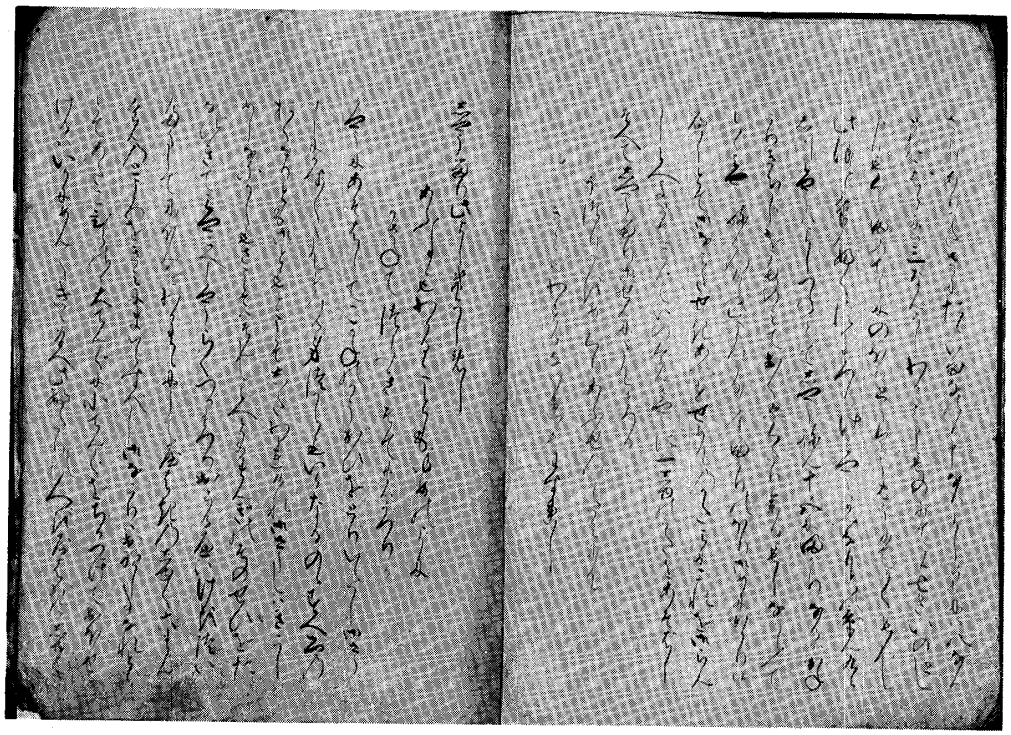
34オ　　33ウ



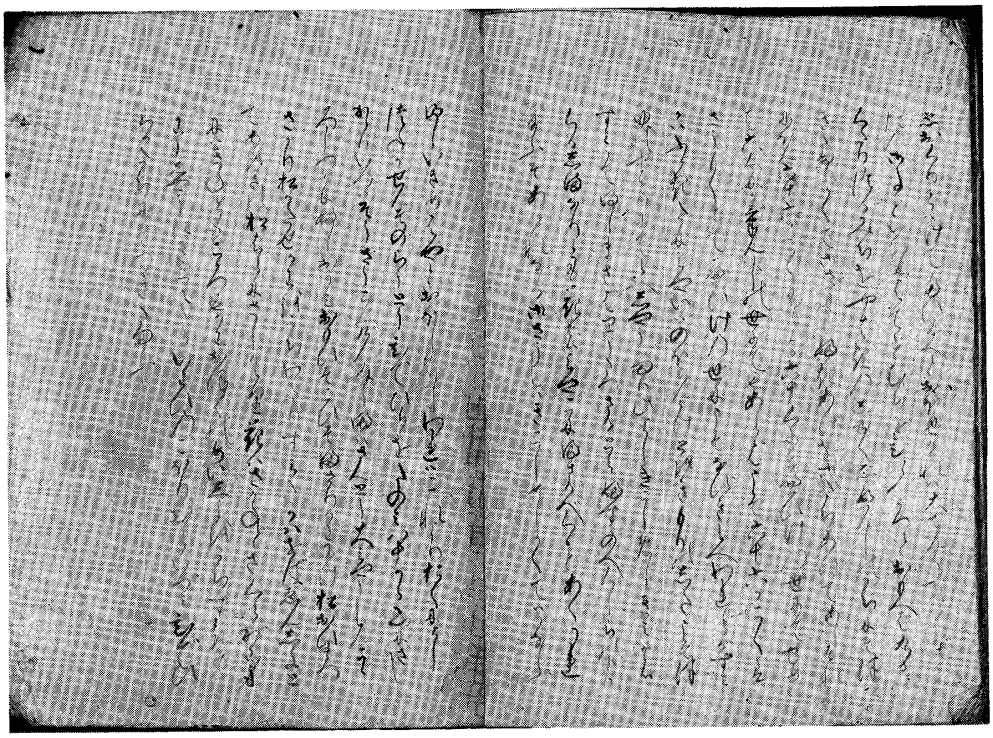
（補足部）　　34ウ



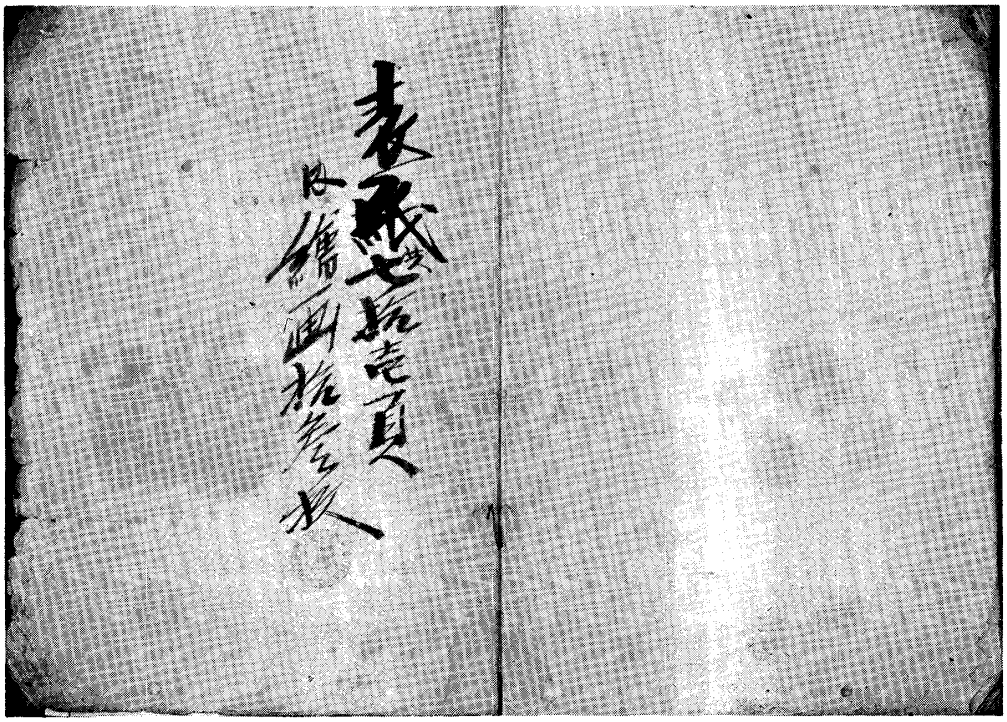
35オ　　（補足部）



36オ　　35ウ



37オ　　36ウ



裏表紙見返　　37ウ

北大本　ちやうるり

関川本〔しやうるり〕

さるほとに、御さうしは、いかなる人のすみかやらんと、心をとゝめて見給へは、あるしはしやうるりこせんとて、けいのうなさけ、みめかたち、たうこく、たこくにならひなし。なきもたうりなり。ちゝは、ふしみのけんちうしやう、かねたかとて、三川の国の、こくしなり。はゝは、やはきのちやうしやとて、かいたう一の、ゆうくんなり。かのちやうしや、よろつにつけて、わくたから、七まてこそ、もたれたり。なかにも、しろかねは、みつのあわと、もたれたり。

されとも、かのちやうしや、いまた子を一人も、もち|(1オ)給はねは、ところ〳〵へ、しゆくくわん申されけり。されとも、しけん、しるしはさらになし。そのころ、三川のくにゝはやらせ給ふ、ほうらいしのやくしへ参りつゝ、さま〳〵のしゆくくわんをこそ、申されたり。

なむやくし十二しん、ねかはくは、身つからに、なんしにても、をなこにても、こたねを一人さつけ給へ。そのくわん、しやうしゆするならは、やはきのしゆくに、七つ候たから物を、一つゝ、したい〳〵に参らせ候へし。

まつ一はんに、こんちのにしきのまほりを、六|(1ウ)十六しやくの、かけをひ、五しやくのかつら、八花かたの、からのかゝみ、六十六おもて、

十二のてはこにそへて、参らすへし。こかねつくりのかたな、三十六こしそへて、らんかんわたして、参らすへし。是をふそくとおほしめさは、まはのそやを百やそろへて、いかきにそえて、参らすへし。しろかねつくりのたち、刀、百ふりそろへて、とりゐをたてゝ、参らすへし。こんちのにしきの御とちやう、月に三十三、八年かけて、参らすへし。あけのいと」(2オ)にて、かみまきたてゝ、くろのこまを、月に三十三ひきつゝ、五ねんひかせて、参らすへし。かのみたうのまつに、ほうらいさんをかさりたてゝ、しろかねにて日をつくり、こかねにて月をつくりて、参らすへし。すゝめのせうてう、かものまかりば、つるのもとしろ、こうのしもふりをもつて、七けん四めんのたうをふきたてゝ、参らすへし。しろかねのさゝいた、こかねのはしらをもつて、しやたんを、たてかへ〳〵、としに一つづゝ、五年かあひた」(2ウ)参らすへし。

なんしにても、によしにても、ちやうしやをあはれと、おほしめさは、こたねを一人さつけたまへ。これを御もちいさふらはすは、かのみたうのないちんにて、はらを十もんじに、かききり、はらわたつかんて、やくしになげかけ、あら人かみとなりて、参らん人に、しやうけをなさんとき、ちやうしやを、うらみ給ふなと、ふかくきせい申つゝ、二七日こもれとも、しけんなし。三七日のふんこもれとも、しけん、しるしもさらになし。百七日こもられ」(3オ)たり。

かくて、百日七夜にまんする、あかつきかたに、ほとけは、八十はかりなる、らうそうにけんし給ひつゝ、みなすいしやうの、ねんしゆのしゆすを、つまくり、ちやうしやこせんの、まくらかみにたちそひて、いかにやなんぢ、うけたまはれ。さなきたに、さとりすくなく、まよひおほし。なんぢかなけくところ、あまりふひんさに、八しやくのかねのはうが、八すんになり、八すんのかねのあしだか、四すんになるまて、たつねまはれとも、さらに」(3ウ)なんちにさつくへき、こたねは一人もなし。こたねのなきいはれを、かたりてきかすへし。

たかのぬまと申ところに、いけあり。かのいけのふかさ、八万ゆしゆんなり。なんちかたけを申せは、はたいろなり。この大しや、おほくの人をとり、いき物、てうるいを、ほろほしたるにより、なんち、こたねは、なきそとよ。又、やはきのちやうしやにむまるゝ事は、かのいけのほとりにて、くわんをんたう有。此みたうにて、たつとき御そう一人ましま」(4オ)す。かのいけぬし、しやうふつせよと、よるひる、ほけきやうめうてん、おこたらす、なんちに、ゑかうし給ふ。かの御きやうを、ちやうもんしたりし、くりきにより、ほとなく、やはきのちやうしやにむまれたり。なんちかつまの、けんちうしやうは、くもたかきみねにすむ、わしといふ、たかなり。おほくのとりのかすを、ほろほしたり。しかれとも、くらまをたちまはり〳〵、あさ夕、れいふつ、れいしやのかねのこゑ、御きやうを、ちやうもんしたるにより、

くけ大みやう」(4ウ)と、むまれて有といへとも、いんくわによりて、こたねなし。さりなから、あまりになけくも、ふひんさに、こたねを一人さつくるそとて、たまのてはこを、をしひらき、たまつさを、とりいたし、ちやうしや御せんの、ひたりのたもとへ、うつさせ給ひけるそと、おほしめし、ゆめさめ、くわんきの心かきりなく、らいはい参らせ、ゑかう申、くるま五百りやうそろへつゝ、ちやうしやのもちたる七つのたからを、みねのやくしへ、一つつゝ、したい〳〵に」(5オ)参らせたり。

そののち、ちやうしや、ほとなく、くわいにんして、日かすつもれは、御さんのひほをそ、とき給ふ。かれをとりあけ、見たまへは、まことに、たまをのへたることくなる、ひめきみをそ、まうけ給ひたり。やくしの申子なれはとて、すなはち、やくしの御なをかたとりて、とうはうしやうるりとは、なつけたり。ちゝの御ためには四十三の御こなり。はゝのためには三十七の御子也。

二たん」(5ウ)

かくてありつるところに、ころはやよいのことなるに、やうはいたうりのはるの花、木々のこすゑにさきみたれ、たいゆふれいのむめのはな、しけみかえたの花さかりも、かくやと、おもひしられける。

御さうしは、このもとことに、たちしのひ、ちりゆく花も、さうのたもとにうけ、うくひすのこゑに、ゆういんせられて、すいへんにおくり、やうさう、ほうひたり、かうさんのち、ゆふし、りようらんたる、へきちのてん、ともなか」(6オ)めて、たゝれたり。もえいつる、くさのけふりに、すゑみたれたり。おほろにかすむ、はるのよの月、となかめてたゝれたり。

おりふし、ちやうしやのすみかより、みなみのつまとに、あたりつゝ、つまをやさしき、ことのねの、まつふくかせに、ひゝきそひ、りん〳〵とこそは、おとつれけれ。御さうしはきこしめし、いかなる人のひくやらん、心をとめて、あやしめおほしめし、ことのねに心をひかれけり。たつねよりて、見たまへは、こゝに一つ」(6ウ)のふしきあり。有しは、たれともしらねとも、七けん四めんの、かうの御しよ、八むねつくりに、けつこうし、とうさい、りやうもん、かさらせて、つほのうちには、しゆもく、せんさい、かすしらす。のきは、こうはい、心もことはも、をよはれす。ひとへさくらに、八え桜、したれやなきに、いと柳、ふくはるかせも、いとゝ心もうちみたれ、花ももみちも、ひとひとさかり。

みなみのおもての、花そのに、まかき、すいかき、まはらにて、月見んため」(7オ)の、いたひさし、花みんとての、やへひかき、すはまに、いけをほらせて、いけのなかには、たていし、ふせ石、なかれいし、ほ

とけをまなふ、らんかんいし、しやう、わう、しやく、ひやく、いひつへし、いしのかすを、たゝませけり。をしとり、かもめ、かいつふり、かも、すいてう、かす〳〵のみつとりともは、きよきいさこに、すみなれて、おほろ月よのかけまても、身にしむはかり、おもしろく、百しゆの花を、うへられたり。こうはい、はくはい、やゑ桜」(7ウ)しら玉つはき、いわつゝじ、ほたん、しやくやく、かきつはた、ききやう、かるかや、をみなへし、しほん、りんたう、われもかう、しらきく、こうきく、さま〳〵に、いくとせつもる、まねんかう、なにをたよりに、うきくもの、月のかけをは、やつすらん。

ひんかしおもての、せんさいには、かしまつ、ふし松、五よふのまつ、ひくてになひく、ねのひのまつ、六十六ほん、ひきうへたり。まつのこのまに、ひわ、こから、ししうから、はなになれたるうくひすの、さ」(8オ)ゑつるふせいを、こかねにて、さま〳〵につくらせて、うこくはかりに、すへさせたり。

きたのかたの、せんすひに、すみや〳〵おきなか、としをへて、かしらのゆきを、はらひかね、をのかころもは、うすけれと、ふゆをまちたる、やさしさよ。ちやうせひてんにはあらねとも、四せつ四きをそまねはれたり。

百しゆの花の、事なれは、つほみてにほふころもあり、ちりゆく花のこすゑも有。あらしに花のさそはれて、みきわのなみ」(8ウ)に、うかひし

を、物によく〳〵たとふれは、八くとくすいのいけのおもて、百千万しゆの、ほうれんけも、いかてか、是にはまさるへき。
しまよりこうちのかよひちには、そりはしをかけさせ、いけには、いろ〳〵の、はちすはをはなしたまふ、れいちのなみも、ゆら〳〵として、みきはのまつも、ふく風も、しん〳〵と月すみ、くしやく、ほうわう、きりたけに、まひあそひけり。

三たん」(9オ)

御さうし、御らんして、こはいかに、よしつねこそ、みやこにて、おほくのせんすい、見しかとも、かほとのせんすい、いまたみす。かゝるあつまの、おんこくにも、かやうのところ有けるよと、いとゝ心をとゝめつゝ、御らんしけるおりふし、こゝに一のふしきあり。
あるしはしやうるりこせんにて、けいのうなさけ、みめかたち、たうこくたこくにならひなし。ならひなきこそ、たうりなれ。みな人は、三十二さうのかたちなり、上八十人、中八十」(9ウ)人、下十人とて、二百四十人のねうはうたちを、つかはれけり。ちゝは、ふしみのけんちうしやう、かねたかのちやうしやとて、くにの、こくしなり。はゝは、やはきのちやうしやとて、かいたう一の、ゆうくんなり。ふたりのあひたより、しやうするそのこなれは、一しほをろかのことそなき。ひ

わのしやうす、ことのしやうす、まつなかにいたりても、をろかなる事そなき。あそはすさしは、なに〳〵そ、こきん、まんよう、いせもの[10オ]かたり、けんし、さころも、こいつくし、わかの心を、はしめとして、なさけのみちをしることは、とうこく一とそ、きこえける。心有まの女はうたち、花そのに、たちめくり、きゝの木すゑや、たけうら、かたふく月の、おもかけを、かたによみ、しにつくり、れんかにしてこそ、たゝれたり。

御さうしは、まはきのかけに、しのひたち、花その山をなかめたまへは、しやうるりこせんの、そのよのしやうそく、いつにすくれてはな[10ウ]やかなり。うけなり物に、からおり物、さくら、山ふき、こきつゝし、むめちこうはい、やなき色、うすこうはいにこきこうはい、しやうふかさねに、きくかさね、十二ひとへをひきしやうすひて、こきくれなゐの、ちしほのはかま、ふみくゝみ、たけにあまれる、ひすいのかんさし、こうはいのたんしを、やまかたやうに、たゝませ、うらふくかせに、そよとなひかせて、たゝれたりける、そのふせひ、心ことはも、をよはれす。ゆうにやさしきおほ[11オ]ゑたり。物によく〳〵たとふれは、やうきひ、りふじん、そとおりひめ、女三のみやのたちすかた、おほろ月よのないしのかみ、こうきてんのほそとのも、これにはいかて、まさるへき。

よしつね、みやこに有しとき、きんちうにおはします女はうたち、や

ことなき上らうたちの、五せつのあそひの有しとき、たひ〳〵みたてまつれとも、かほとのひしん、いまたみす。おなし、にんけんとむまれなは、かやうの人に、あひなれ、ちかつ|(11ウ)きたてまつり、かひらうとうけつのかたらひ、ひよくれんりのちきりを、こめてこそ、おもふ心を、えんこうのはやしにあそふ、こてうの花になれたる、ふせいしてこそ、たゝれける。

しやうるりこせんは、なをも、月のひかりや、花のなこりや、をしうやおもはれける心あり。

四たん

いまの女はう十二人、めしくせられて、くわんけんはしめてあそはれける。しやうるりこ|(12オ)せんは、ことのやくはしめ、月さへとのは、ひはのやく、れいせんとのは、ひちりきのやく、十五夜とのは、しやうのやく、ありあけ殿は、わこんのやく、ほうけうあはする物もあり。ときのてうしは、ひやうてうなり。あそはすがくは、なに〳〵そ。大しやうかんしゆ、さうふれん、しゆんれうりうに、やはんらく、したひに、ひきよくを、つくされける。月せいさんに、かたふけは、ひかりもかけも、かすかにて、はなそこのまと、ちりしき|(12ウ)て、色もにほひも、みち〳〵て、ひわのね、ことのね、すみわたり、あくこう、ほん

なうわすれはて、こくらくしやうとも、かくやらん、てんにんも、あまくたり、ほさつも、をしなへて、すいきのなみたを、なかしつゝ、みな〳〵そてを、しほりける。

御さうしは、きこしめし、こはいかに、ゐ中は、物うき所とかや、かほとのくわんけんに、やうてう一くわんなきことよ。ふゑはあれとも、人なくてふかさるや。さあらは、これにて、よしつね、ふゑをふかはやと、おほしめし、もしも[13オ]とかむる人あらは、たうしこのころもてあそふ、くさかりふへとも、申へし。なをも、とかむるものあらは、けんしちうたいの、こかねつくり、こらへぬほとそと、おほしつゝ、そともつゝまれす、しのへともしのはれす、しんたいきはまる、わかみかな、とおほしめし、あまりに心すみけれは、こしより、やうてうとりいたし、にしきのゆたん、をしはつし、かんこ、しやうさく、ちうろく、けくとて、いのうたくちに、はなのつゆ、ふきし[13ウ]めし、がくは、さま〳〵おほけれとも、女人かおつとを、こふるかく、なんしをこふるは、さうふれんといふ、かくを、よそめもはゝからす、やはきの、のにも、ならはなれ。たとへ、やみにも、ならはなれと、あたりもひゝけと、ふかれたり。ひわ、こと、ひき給へは、かとにて、ふゑをそ、あそはしける。うちには、ひにこそおしとゝめ、かとのふえをそ、ちやうもんし給ひける。

五たん」(14オ)

しやうるりこせんは、このよしきこしめし、やはきは、さるへきめいしよにて、のほりくたりの、大みやうたち、ちこせうしんなと、とゝまりて、たひ〳〵くわんけんせらるれとも、かやうのやうてう、いまたきかす。御せい、き、ひやうし、かゝるふせいの、おもしろさよ。よそにてきくたに、ゆかしきに、ぬしをみたらんゆかしさよ。いかにや女はうたち、とそおほせける。

御まへなりける、にうはうたち、もんくわいさまに、たちいてゝ、い」そきかへりて、申さるゝやうは、心にくうもさふらはす。ひるのこ(14ウ)ろ、大かたさまにて、あそひつる、しねつ、らつふのしやうす、ふえのしやうすと、ほめられつる、かねうりきちしの、ふたひのむまおひくわしやにて、さふらふなり、とそ申ける。

しやうるり、このよしきこしめし、それは、さない物そとよ、たゝし、ころ、みやこには、へいけあくきやう、よにすくれて、くわんはくてんか、おしこめて、大しん、くきやうをも、うしなふ事ときく。」そ(15オ)のかたさまにてましますかや、いやしきしづのまねをして、あつまのかたへや、くたり給ふらん。この人これへ、しやうしいれ、やうてうふかせて、ちやうもんせん。ひわ、こと、ひきて、此とのの、たひの

つれ〳〵をも、なくさめはや、女はうたち、とそおほせける。もんしゆ殿は、すゝみいてゝ申されけるは、たうし、此ころ、みやこの人は、めはつかし。ゐなかの人は、くちはつかしや。かへにみゝ、いわの物いふよの中に、いかてか、こかねあき|人に、てうせき、しこうのけにんをは、御せんまかく、めしよせて、きみの御ふせい、わらはともか有さまをも、みえんことも、さすかなり。かなはぬよしをそ、申されける。

しやうるり、このよしきこしめし、それは、さためなきそとよ。たうし、此ころ、やすきためしの、あるそとよ。大かい、ちりをゑらます、花は所を、さためぬもの、ていの中にも、はちすあり。くさの中にも、こかねあり。いやしき人にて、よもあらし。かゝる人の中にも、くわけんのたつしやは、ある物|を、ふせいはいかなるものそ、見てまいれと、有しかは、たまものまへは、うけたまはり、いそきたちいて給ひける。

此女はうと申は、としを申せは十六なり。心まさりのくちきゝなり。人にすくれる、さいかんなり。十二ひとへを、ひきしやうすいて、こうはいの、ひきかつき、たけにあまれる、ひすひのかんさしを、むめのにほひて、よせさせて、もんくわいさまへ、たちいてゝ、御さうしのうしろすがたを、たゝ一めみたてまつり、いそきかへりて|しやうるり御せんに此よし、かくとそ申ける。

いかにやきみ、きこしめせ。よしある人のすかたをは、くもまの月のはしはかり、みたてまつりしことのはを、あら〳〵かたり申さは、きみはそれにて、心しつかに、きこしめせ。

この人は、たゝよのつねの人にてはなし。みなもとけんしの、上らうかとおほしくて、ぬいものは、心もことはも、およはれす。

はたには、りんたうの、おりえたつけたるかたひら、もろわき、しゆんに、とかせつゝ、ひ|(17オ)きちかへとそ、めされける。かうまきそめにすゝしのこう、かうあやおりて、二かさね、はなたちはなに、みなしろおりて、一かさね、せいかうの大くちに、けんもんしやのひたゝれの、したのはかまの、わりなさは、おほろけほんふか、きへからす。きくとぢには、しらへのきくとち、むすはれたり。にほん一のめいしんの、はなむすひの、むすひたるとおほしくて、さうのきくとぢには、ひとへさくらを、むすはせたり。

うしろのぬい物には、たうとのさると、にほん|(17ウ)のさるとを、ぬはせたり。たうとのさるは、大こくとて、せいも大に、おもても、しろ〳〵と見えてあり。にほんのさる、せうこくにて、せいもちいさく、おもても、あかく、見えにけり。たうとのさるは、にほんへこえんとす。にほんとたうとの、さかひなる、ちくらかおきにて、ゆきあひて、こさう、こさしの、さかひをは、物のしやうすか、きよくをつくして、ぬいてあり。

ゆんてのそてをくたりに、すきのむらたちを、千ほんはかり、ぬいあらはし、すきの(18オ)このまより、いつる月をは、ぬはせたり。そてのくたりには、松を千ほん、あざやかにぬい、まつのはこしに、あさ日のいつる所を、ほの〳〵とぬいたり。

ゆんてかたより、くたりには、正八まんの御しやたんとおほしく、大ほさつと、いかきとりゐを、さもあざやかに、ぬはせたり。

さうの、ひほには、あまのたくほくもつて、あさまのたけの夕けふりと、ふしのたかねの夕けふりの、たちまふ所をは、きやしやにむすんて、さけられたり。

おくひ(18ウ)さまを、見てあれは、けんしの、しらはた七なかれ、へいけの、あかはた七なかれ、さうに十四なかれの、はたさほ、あまたにうちおられ、はた、くる〳〵とひきまきて、おつる有さまをは、あり〳〵とぬはせたり。

又、はかまの、けつこうには、うしろうらには、はるのゝを、もえたつほとにぬはせたり。花のもとには、おゝくの大みやうあつまりて、しゆえんなかはと、みえてあり。まへこしをくたりには、あきのゝをぬはせたり。玉つはき、きやう、かる(19オ)かや、おみなへし、きりうすゝき、いとすゝき、つゆうちなひくあきのたの、ほのうへてらす、いなつまを、ほの〳〵と、ぬはせける。

ゆんての、けまはしには、にほん一の、ゑ上すか、ふちしろたうけに、

七日まていて、くら八七かうを、なかむれは、さら〳〵ふても、およはれすして、みやこかへりのところを、あり〳〵とそ、ぬはせたり。めてのけまはしに、うきもつらきも、とうたうみ、はまなのはしの、ゆふしほに、ひかれてのほるあまをふね」(19ウ)こかれて物を、おもふらんと、さもありさうに、ぬはせたり。

ちたひ又、こののめされたる、ひたゝれは、にほんのきぬには、よもあらし。からきぬかと、うちみえて、心もことはも、およはれ、御こしのものの、けつこう、さうには、とうかね、いれさせて、おもてのめぬきには、しやう八まん、うらのめぬきは、きたのの天神、つかくちには、こゝのつ〳〵のひこほし、たなはたを、こかねをもつて、いさせたり。あまのかすみを、むすんて、さけをに」(20オ)さけられたり。つるかしら、こしりには、日くわう、くわつくわう、二のひかりを、あざやかに、あらはしたてまつり、たをやかにこそ、さされたり。

ゆんてのわきに、しのはせたる、御はかせの、けつこうには、おうせつは、こせつはと、三めんふくりんにかさね、はゝきかね、ふち、むすひ、せめ、いしつき、しはひき、もとよせ、七つかさね、まことのめぬき、うらめぬき、おもてのめぬきに、ほらせたり。うらのめぬきの、けつこうには、九月十三」(20ウ)夜の、月のひかりの、くまなきに、くらまの、ひしやもんてんわうを、ほらせたり。

ゆんてのわきに、かいこうて、しやうのこまふへ、やうてう、四くわ

んの、ふき物を、したんのやたてに、とりそへて、めてのわきに、しのはせたり。

いろこのみかとおほしくて、六はらゑほしを、ひたりおりに、めされてさふらふか、此殿は、ろしをこのむとうち見えて、いろよき、さくらを一えたおりて、ゑほしのきくちに、さくれてさふらふ、とそ申ける。

しやうるり」(21オ)此よしきこしめし、されはこそ、この人は、よしある人にてましますそ。うたをかけよや女はうたち、とてとそおほせける。

十五夜との、此よしうけたまはり、かとのほとけに、

うちいてゝ、御さうしのたもとをひかへて、いかにさふらふ、たひのとの、きみからのおほせには、

かさくちなれとちらぬ花かな

と申せとてこそさふらへ、みやこのとのとそ申ける。

御さうしは、きこしめし、

ちはやふるかみもさくらをおしむには

と申させ給へ」(21ウ)女はうたち、とそおほせける。

十五夜、このよしうけたまはりて、いそきかへり、

六たん

（白　紙）」(1オ)

いろこのみかとおほしくて、六はらゑほしを、ひたり折に、けたかくめされてさふらふか、此とのは、よしをこのむとうち見えて、いろよき、桜を一ゑたをりて」(1ウ)

（白　紙）」(2オ)

たちいてゝ、御さうしのたもとをひかへて、いかにやさふらふ、たびのとの、きみよりのおほせには、

風くちなれともちらぬ花かな

と申ける。

御さうしは、きこしめし、

ちはやふる神も桜をおしむにや

かせくちなれとちらぬはなかな

と申させ給へ、ねうはうたち、とそおほせける。

六　段

かくと申ける。

しやうるり、此よしきこしめし、われにおとらぬ女はうたち、七人を、七とのつかひに、たてられたり。まつ一はんの、つかひに、十五夜殿、二とのつかひに、さらしなとの、三とのつかひに、たまものまへ、四とのつかひに、ありあけとの、五とのつかひに、おほろけとの、六とのつかひに、月さへとの、七と」(22オ)のつかひに、こさくらとのを、はしめとして、御さうしを、よはれたり。

御さうしは、きこしめし、こはいかに、よしつねこそ、あつまはるかにの、たひをして、おいけのこうりにましはりて、いろもくろみて、はつかしけれとも、かゝるたよりは、よもあらし、とおほしめし、ひたたれのゑもん、たかくひきつくろいて、ひろゑんまてこそ、おわします。いたはしや、御さうしは、それ、よはまつせにおよへ共、あたら、けんしのゆみとりも、ひろゑん」(22ウ)さまにて、ふゑをふくへきか、とおほしめすなり。とをり給ひ、しやうるり御せんの、中のていに、しかせたる、らんけんへりと、かうらいへりと、二てうかさね、しかせ給ひつゝ、とらのかわを、はしらたかきところに、御さうしは、むすと、なをりたまひける。

しやうるり御せんは、一たんたかき所に、むらさきへりの、たゝみをしゐて、こん〳〵るりに、御さをかさらせ、しやうしあはせ、たますたれはかりにて、もんしゆにせんは、ひわのやく、しやうるり」(23オ)こせ

十五夜、此よしうけたまはりて、いそきかへり、かくとそ申ける。

しやうるり、此よしきこしめし、われにおとらぬねうはうたち、七人つれさせ、七どのつかいを、たてられたり。まつ一ばんの、つかいには、十五夜との、二ばんには、さらしなとの、三」(2ウ)はんには、たまものまへ、四とのつかいは、ありあけとの、五はんは、おほろけとの、六はんには、月さえとの、七とのつかいを、たてられける。

御さうしは、きこしめし、こはいかに、よしつねこそ、あづまぢはるかに、たひをして、けあげのこほりにましはりて、いろもくろみて、はづかしけれとも、かゝるたよりは、よもあらし、とおほしめし、ひたゝれのゑもん、けたかくひきつくろいて、ひろゑんまて、おはします。いたはしやな、御さうしは、それ、世はまつせにおよへとも、げんじのゆみとりが、ひろゑんとさまにて、ふゑをふくべきか、とおほしめし、するりと、とをられ、しやうるり御せんの、なかのでいに、しかれたる、うんげんべりと、かうらいへり、四五でうかさね、しかせつゝ、とらのかはを、はしらかしたるところに、御さうしは、むずと、なをらせ給ひけり。

しやうるり御せんは」(3オ)一だんたかきところに、むらさきへりの、たゝみをしきて、こんごんるりに、こさをかさり、しやうあわせ、たまのすたれるりにて、もんしやうせん、びわ、こと、わごん、かす〳〵く

んは、ことのやく、さらしなとのは、わこんのやく、かす〳〵のくわんけんの、くそくをとゝのへて、くわんけんはしめて、めされけり。

さて〳〵、くわんけん、すきけれは、御まへなりける、女はうたち、けんし六十てうを、とりちらし、御さうしの心ひきみん、そのために、さま〳〵の、こふみ、しやうけうよみ、なんし、ふしんをそ、とひかけたり。さりとは申せとも、御さうしは、七さいの御としより、くらまのてらに、あからせたまひて、とう」(23ウ)くわうはうにて、かくもんめされ、くらま一の、ちこかくしやうとも、くらからす。ふくとも、ひきらくとも、たつしやなる。人〳〵しやくして、たてまつる。あら有かたや、このとのは、くわんおんせいしの、しげんかや、もんしゆのさいらい、しやかやかの、しけんかや、おほつかな、ふてをとりて、たやすきは、こうほう大しと申とも、是にはいかて、まさるへき。御まへなりける女はうたち、こうはいのたんし、ひきかさね、かれを、これをと」(24オ)しよまふせられけり。御さうしは、きこしめし、五つのゆひに、四くわんの筆を、とりもちて、かいてはいたし、うつしてはたてまつる。よもしんかうにふけぬれは、こくとのくわしに、しゆ〳〵のさかなを、とゝのへて、御さうしに、すゝめたてまつり、しゆえんもなかはに、なりしかは、いとまこいてそ、御かへり有。

御まへなりける女はうたち、こんやはこれに、とゝまり給ひて、やうてうあそはし、わらはもともに、ちやう」(24ウ)もんし、ひわ、こと、ひいわげんの、くそくをとゝのへて、くわげんはしめて、めされける。

すてに、くわげんも、すぎけれは、御まへなる、ねうはうたち、げんじ六十てうを、おつとりちらし、御さうしのこゝろをひきみん、そのために、さま〳〵、こふみ、しやうけう、なんし、ふしんをそ、とひかけたる。とは申せとも、御さうしは、七さいの御ときより、くらまてらゑ、あかり給ひて、とうくわうはうにて、かくもんめされ、くらま一の、御ちこがくしやう、みやこ一の、くわけんにも、たつしやなり。この人は、くはんおんせいしの、けしんの人、ふげん、もんしゆのけしんかや。ふてをとりての、たつしやさは、こうほう大しと申とも、これにはいかて、まさ」(3ウ)るべき。御まへなるねうはうたち、こうはいのたんし、ひきかさね、かれを、これをと、しよまうせられける。

御さうしは、きこしめし、いつゝのゆびに、四のふてを、とり、かきてはいたし、うつしてはたてまつり、よもしんかうにふけゆけは、こくとのくはし、しゆ〳〵のさかなを、とゝのへて、御さうしに、すゝめたてまつる。しゆゑんもなかはに、なりしかは、いとまをこふて、御かへりある。

御まへなりけるねうはうたち、こよひはこれに、とゝまり給ひて、やうてう、わらはともに、ちやうもんさせ、ひわ、こと、ひいて、たひ

て、たひのつれ〳〵をも、なくさめ給ひ候へ、みやこの殿とそ、おほせける。御さうし、きこしめし、われも、さそんし候へとも、こかねあき人は、ようしんきひしき人なれは、さためておとろき、くわしやを、たつねさふらふらん。いのちつれなく、もしさふらはは、めくり〳〵て、又こそ、けんさんにいらんとて、いとまをこうてそ、御かへり有。女はうたち、かとのほとけにたちいてゝ、わかれを、かなしみたまひけり。」(25オ)かたみにのこる物とては、そてのうつりか、はかりなり。おもかけ、とをくなりゆくは、うつりかも、なにならす。

さても、かの御さうしは、あき人のやとに、たちかへり給へとも、御心は、そらにうかれ、まとろみ給ふほともなし。つく〳〵と、おほしめしけるは、きうせん、ひやうく、とゝのへたる、いくさのにわに、かけ入、うちしにするも、ならひなり。いはんや、これほと、やことなき女はうたちに、あひなれて、しなんいのちは、をしからす。」(25ウ)し のひてみはやと、おほしめし、ちやうしやのすみかを、たちいてゝ、御しよのあたりへ、しのひいらせ給ひける。女はうたち、しつまるを、いまや〳〵とまち給ふか、心すみよしにあらねとも、ねさしそめけん、ひめまつ、ちよをまつらん、ひさしさも、かくやと思ひしられたり。

の御つれ〳〵を、なくさめ給へや、このとの、とそおほせけり。御さうし、きこしめし、われらも、さやうにそんじ候へとも、こかねあきんとは、ようしんきひしき人なれは、さためておとろき、くわしやをたつねさうらはん。いのちもつれなく候はゝ、めくりて、また」(4オ)こそ、御げんさんにと、いとまをこうてそ、御かへりあり。ねうはうたち、かとのほかにたちいてゝ、わかれを、おしみ給ひけり。かたみにのこる物とては、そてのうつりか、はかりなり。おもかけ、とをくなりゆけは、そのうつりかも、なにならす。

かくて、御さうしは、あき人のやとに、たちかへり給へとも、御こゝろも、そらにうかれ、一ときも、まとろむこともなし。つく〳〵、おほしめしけるは、きうせん、ひやうくを、とゝのへて、いくさのにはに、かけいり、うちしにするも、ならひなり。いわんや、これほと、やことなきねうはうたちに、あひなれて、しなんいのちは、おしからす。しのびてみはやと、おほしめし、しやうしやのすみかを、たちいてゝ、御しよのあたりゑそ、しのひいらせ給ひける。ねうはうたちの、しづまりを、いまや〳〵とまち給ふ、すみよしにはあらねとも、ねさしそめけん、ひめこまつ、ちよをまつらん、ひさしさも、かくやとおもひしられたり。」(4ウ)

(白紙)」(5オ)

七たん

みねのあらしも、のとかにて、たにのをかはも、なみたゝす。しるもしらぬも、おしなへ|(26オ)て、人をとゝむる、さとの、とおほしめし、とひらを、ひそかにきり〳〵と、なして見給へは、いまた、もんをは、さゝさりけるに、にわに入て、見たまへは、でいのつまとのこゝちしてこそ、たてられけり。かたとはたちて、かたとはほそめにあけられたり。御さうしは、御らんして、されは、いまにはしめぬ事なれとも、けんしのうちかみ、正八まんの、御りしやうにこそと、うちよろこひたまひて、うちへそ、いれは、そのよのつまと|(26ウ)の、はんしゆには、すわうのむろかみ、すま、あかし、れいせん、さらしな、十五夜とのとて、われにおとらぬ女はうたち、七人そろへて、おかれたり。十五夜此よしきこしめし、たそや〳〵、なるとのおきに、おとするは、と申されけれは、御さうしきこしめし、月にすむ、かつらおとことに、さそはれて、月の入さの山のはの、そなたのそらのなつかしさは、くわしやか、これまて参りたり。をしへ|(27オ)たへや、女はうたちや、とそおほせける。十五やとの、此よしきこしめし、月のいるさの山のはは、こなたのそら、とそ申されける。

御さうし、なのめならすによろこひ給ひ、七ゑのひやうふ、八えのきちやう、九ゑのみす、十二えのきん、かきわけとをりつゝ、たれ、し

七段

みねのあらしも、のとかにて、たにのをかはも、なみたゝす。しるもしぬも、をしなへて、人をとかむる、さとのいぬ、こゑすむほどにも、なりしかは、いまはじぶんもよかるらん、とおほしめし、をひそかに、をして見|(5ウ)給へば、でいのつまともこゝろありて、たてられたり。御さうしは、御らんして、さてこそ、げんじのうちかみ、しやう八まんの、御りしやうとこそ、こゝろにうちに思ひたまひて、うちゑそ、いらせ給ひけり。そのよのつまとの、ばんしゆには、すわうのもろずみ、すま、あかし、れんせい、さらしな、十五やとのまて、われにおとらぬねうはうたち、七人そろへて、をかれたり。十五やこのよしきこしめし、たそや、このなるとのおきに、をとするは、と申ければ|(6ウ)御さうしはきこしめし、月にすむ、かつらおとこに、さそわれて、月のいるさのやまの、そなたのそらのなつかしさに、くわしやこそ、これまてまいりたれ。をしへてたべや、ねうはうたち、とそおほせける。十五や、このよしきゝ給ひ、月のいるさのやまのはゝ、こなたのそら、とそ申されける。

御さうしは、なのめならす、うれしくおほしめし、七ゑのみす、十二ゑのきんかを、かきわけ〳〵とをりけれは、たれ、しやうずるとは、

やうするとは、なけれとも、しやうるりこせんのやとらせ給ふ、ゆめのにしきのうへちかく、いらせ給ひける。ともしひ、いまたきえさるに、しやうるりこせんは└よゐのしやうそくまゝにて、むらさきへりの、たゝみをしかせ、にしきの御さを、はしらせて、たけにあまれる、ひすいのかんさしをは、むめのにほひに、よせさせて、七ゑのひやうふの、そのうちに、ちんのまくらを、かたふけて、とうさいせんこもわきまへす、まとろみ給ふ御すかた、御らんして、御さうしの心のうち、やるかたなくこそ、おほえたり。あたりを、しつかに見給へは、かす〳〵のしやうきよう、とりちらしてそ、おかれける。└(27ウ)(28オ)

まつ、いにしへは、てんたい六十くわん、くしやは三十くわん、ふんすいきやうは十四くわん、しやうとの三ふきやう、けこん、あこん、はうとう、はんにや、ほつけ、ねはん、とうちと見へて、かすをつくして、おかれたり。さうしにとりては、こきん、まんよう、いせ物かたり、けんし、さころも、恋つくし、わかの心をはしめとして、おかれたり。あさ夕よめると、おほしくて、しろかねのつくゑに、こんていのほけきやうは、一ふ八くわん、廿八ほん└(28ウ)なかにも、五のまきは、女人しやうふつと、とかれたり。ことに、たひはほんとて、ようもん、六のまきには、しゆりやうほん、七のまきには、やくわうほん、八のまきには、たらにほん、あそはしかけて、をかれたる。御さうし、つなけれとも、しやうるり御せんのやどらせ給ひける、ゆかのにしきのうへちかく、いらせ給ひける。└(6ウ)ともしひは、いまたきえさるに、ちやうるりこせんは、よひのしやうぞくそのまゝにて、むらさきべりの、たゝみをしかせ、にしきの御さを、はしらかして、たけにあまれる、ひすいのかんざしを、むめのにほひにて、よせさせて、七ゑのびやうぶの、そのうちに、ちんのまくらを、かたむけて、ぜんごもしらす、ふし給ふすかたを、ものにたとふれは、やうりうのかせになびくに、ことならす。御さうしのこゝろに、やるかたなくこそ、おほえけれ。あたりを、しづかに見たまへば、かず〳〵のしやうげう、とりちらしてそ、おかれける。

まづ、一に、てんだひは六十くわん、くしやは三十くわん、ぶんずひきやうは十四くわん、じやうどの三ぶきやう、けごん、あごん、はうどう、はんにや、ほつけ、ねはんとうち見えて、かずをつくして、を└(7オ)かれたり。さうしにとりては、こきん、まんよう、いせ物かたり、げんし、さころも、こひつくし、わかのこゝろをはしめて、おもしろきふみともを、おつとりちらして、おかれたり。あさゆふよめると、おほして、しろかねのつくゑに、こんでひのほけきやう、一ぶ八くわん、二十八ぼん、そのなかにも、五のまきには、によにんぢやうぶつと、とかれたり。六のまきには、じゆりやうほんを、あそはしかけて、おかれたり。よしつねこそ、みやこにて、三たひしゆかく者なれしが、

かゝるあつま地、いこくにも、かやうに、やさしきによにんもあるらんと、むねうちさはく、はかりなり。

さるほとに、御さうしは、こよひをはしめのことなれは、たにのとひつる、うくひすの、のきはのむめに、すみなかし、またはなれぬ」(7ウ)ふせいかや、とやいはまし、かくやいわんと、おぼしけるか、やゝしばらく、あんじいたし、こしより、あふきをとりいだし、をしひらき、やよいなかばのころなるに、すゝしきほとに、つかはせ給へ、三十ところに、ともしたる、あふらひを、十二ところまて、うちしめし、あふきを、きり〳〵とおしたゝみ、ちやうるり御せんのねみたれかみを、かたしきたまへる、ゆかのうへを、二三ど、四五ど、うちならして、御ざうしの、おほせありける。ことのはの。ほどこそ、やさしけれ。

あまつそらなるきみゆへに、こゝろは、くもゐにあくかれて、はなのみやこに、はるくれは、かすみとともに、たちいてゝ、きみかすみかを、たつねつゝ、あつま地はるかに、くたりたる、けんじの大しやうさねかたは、いかなれは、をよはぬこひに身をやつし」(8オ)とはぬに、いろをあらはして、はつかしや、いせをのあまの、ぬれころも、もしほたれつゝと、人や見るらん、とうちなかめ、すまよりあかしゑ、かよわれし。きしうつなみに、そてぬらし、うらふくかせに、身をまかせ、

く〳〵御らんして、よしつねこそ、都にて、三たひしゆかくしやうるり成しか、かゝるあつまの、ゑんこくにも、かやうに、やさしき女人もあるらんに、むねうちさはく、はかりなり。

さるほとに、御さうしは、こよひはしめの事なれは、たにのといつる、うくひすの、のきは」(29オ)の梅に、すみなから、またはなれぬふせいかや、とやいはまし、かくやいはまし、とおほしめしける。やゝしはらく、あんしいたしつゝ、こしより、あふきとりいたし、三たんはかり、をしひらき、やよひなかはのころなるに、涼しきほとに、つかはせたまひ、三十ところに、とほさせたる、あふらひを、十二ところまて、うちしめし、せうめい、ほのかにかきたてゝ、あふきを、きりりとをしたゝみ、しやうるり御せんのねみたれかみの、かたしきたまひける、ゆかのうへを、二三と、四五と、うちならして」(29ウ)御さうし、ほふせありけるは、ことはの程こそ、やさしけれ。

あまのそらなるきみゆへに、こゝろは、くもゐにあくかれて、花の都に、はるくれは、かすみとともに、たちいてゝ、きみかすみかを、たつねつゝ、あつまはるかに、くたりたる、源氏の大しやうは、いかなれは、をよはぬ恋に身をやつし、とはぬ、いろをあらはして、はつかしや、いせ物あまの、ぬれ衣、しほたれぬると、人やみるらん、うちなかめ、すまよりあかしへ、うらつたひ、きしうつ波に、袖ぬらし、うらふく風に、みをまかせ、君を見そめしはし」(30オ)めより、こゝろのや

みにまよひにき。心つくしのはてしなる、あひそめ川のこいのせに、いかなるちきりを、むすふらん。おもひのとこにいりなから、たかねの花は、よしなくも、たをらぬ袖に、にほひそめ、雲ゐの月は、いかなれは、こけの袂に、やとるらん。かすならぬ身のほとをしらねとも、あの山こえてあなたなる、あしひきの露ふみわくる、さをしかの、つまこいかねたる、ふせいして、しゆせんすいの、いつもちの、しゆへも、たよりもなき、都のくわしやか、こよひしも、すいさんなから」(30ウ)御とのへに、是まてまいりて候なり。いかにや君、とそおほせける。

しやうるり、此よしきこしめし、さなから、ゆめのこゝちして、うちそはみたる、ふせいして、ねみたれかみの、きゝもならはぬ、声として、都の事をのたまふは、都のならひにて、みにまさる、大みやうかうけのかたよりも、たまつさあまた、かきをくる。あさ夕心をつくせとも、いまたなひかす。かへりよせす。ところにしたかふ、ゑをそかく。はにしたかふて、つゆそをく。花をみてこそ、ゑにはしれ。くも」(31オ)にかけはし、をよはぬこいをは、せぬものを。

わらはと申は、是、ちゝは、ふしみのけんちうしやう、かねたかとて、みちのくにの、こくしなり。はゝは、やはきのちやうしやなり。かひ

見そめしはしめより、こゝろのやみにまよひきて、こゝろつくしのはてしなる、あひそめかわのこひのせに、いかなるちきりを、むすぶらん、思ひのとこにいりなから、たかねのはなは、よしなくも、たをらぬそてに、にほひそめ、くもゐの月は、いかなれは、こけのたもとに、やとるらん。かすならぬ身のほとをばしらねとも、あのやまこへてあなたなる、あしひきのつゆふみわくる、さをしかの、つまこひかねたる、ふせいして、しゆくせむすひの、いつも路の、みちのしるへも、たよりなき、みやこのくわしやか、こよひこそ」(8ウ)すひさんなから、御とのゐに、これまてまいりて候なり。いかにやきみ、とそ申ける。

ちやうるり、このよしきこしめし、さりなから、ゆめのこゝちして、うちそはむひたる、ふせひして、ねみたれかみの、たえまより、かれうびんなる、こゑをあけ、たそや、このきゝもならはぬ、こゑとして、みやこのことをの給ふは、みやこのならいにて、さふらふかや。ゐなかは、かゝるふせひも、なきそとよ。そのうへ、御身にまさる、大みやうかうけのかたよりも、たまつさあまた、かきをくり、あさゆふこゝろをつくせとも、こゝろにしたかふ、ゑをぞかく。はにしたかふなる、つゆをおく。はなを見てこそ、ゑたはおれ。くもにかけはし、をよはぬこひをはせぬ物を。

わらはと申は、これ、ちゝは、ふしみのけんちうなごん、かねたかとて、三かはのくにのこくしなり。はゝは、やはきのちやう」(9オ)しやとて、

たう一のゆふくんにて、ふたりのなかより、しやうするそのこにて、ひとしう、をろかのこともなき。たとへは、いかなる人なりとも、いかてか御身は、およふへき。ことさら御みは、かねうり吉次かけにんときく。およはぬこひをする物かな。こひもあまたに、わけられ」(31ウ)たり。あひみてのこひ、きゝてのこひ、あふこい、まつこひ、しのふこひとて、五つに、わけられたり。をよはぬこひをする物は、それ、てんちくには、むすふのかみ、たうとにては、あひせんわう、わかてうにては、いつもの、さいはう、さいのかみ、ふかく、にくませ給ふ物を、はや〳〵かへらせ給へや、とおほせける。

御さうし、きこしめし、いかにやきみ、きこしめせ。およはぬこひもある物を、いかなれは、のりきよは、そのみは、あつまのゑひす」(32オ)なれとも、十九のとしより、みやすところを、こいたてまつり、たまつさを、参らせたりけれは、ささき、

このよしゑいらんあつて、心もことはも、をよはれす。さりなから、なんちにめくりあはんこと、こんよすきて、そのゝちのよに、ならんとき、これよりさいはう、あみたのしやうとまてまつへし、とそおほせける。

かいたう一のゆふくんなり。あひうちしやうするそのこにて、一しをろかのことそなき。たとひ、いかなる人なりと、いかでか御身は、をよふべき。ことさら御身は、かねうりきちしかけにんときく。およはぬこひをする物かな。こひもあまたにいわれたり。あひみてのこひ、きゝてのこひ、あふこひ、まつこひ、五つゝに、わけられたり。およはぬこひをする物をば、それてんちくには、むすふのかみ、たうとにては、もんしゆぼさつ、わかてうにては、いつもちの、さいはら、さいのかみ、ふかく、にくませ給ふものを、はやくかへらせ給へや、とこそおほせけれ。

御さうしは、きこしめし、いかにやきみ、きこしめせ。およはぬこひもある物を、いかなれは、さとうひやうゑのりきよは、その、あつまのゑひすなれとも、十九のとしより、あはつのきさきを、こひたてまつり、たまつさを、まい」(9ウ)らせけれは、ささき、このふみを御らんして、まことやらん、のりきよは、につほん一はんのかじんときく。さらは、うたのだひをいださんとて、百しゆのだひをそ、おくられける。のりきよ、これをたまはりて、りうのみづをゑたるがごとし。やかて、つらねてたてまつる。ささき、このよしゑいらんあり。こゝろことはも、をよはれす。さりなから、なんぢにめくりあはん事は、こんよすぎ、又こんよをも、うちすきての、さきのよにならんとき、これよりさいほう、あみだのちやうとにてまつへし、とこそおほせけれ。

のりきよ、いよ〳〵おもひにしつみけれは、きさきのみや、此よしきこしめし、いかにのりきよ、うけ給はれ。これ|(32ウ)よりさいはう、みたのしやうとゝ申は、これより、にしにあたり、あみたたうの事なり。きさき、此ほと百日まうてを、めされけるか、そもこんよとは、ゆふさりすき、又こんよとは、あすのよすき、そのゝちのよに、是よりにしの、あみたたうにて、あはせたまはんとの、おほせなり、のりきよ、とそおほせける。のりきよ、此よしうけ給り、なのめならすに、よろこひて、やかて、しゆくしよに、たちかへり、そのよを、いまや〳〵と、まちゐたり。

すて|(33オ)にそのよになりぬれは、いそき、かのみたうに参りつゝ、きさきのこかうを、いまや〳〵と、まつところに、さよふけかたのことなりしかは、たちをまくらにして、うちまとろまんとしけれは、きさき、御かうならせ給ひける。このよしを御らんして、たちかへらんと、し給ひけるか、けにや人のおもひをきる物は、しやたうにおつるとおほしめし、まくらもとに、たちよらせ給ひて、一しゆ、うたをそ、あそはしけり。

十五夜の月のいるさ|(33ウ)をまちかねて
まとろむけしきつたなかりける

とあそはしけれは、のりきよ、うけたまはり、ゆめのうちに申けるは、

十五やの月のいつるをまちかねて

のりきよ、いよ〳〵おもひにしづみけれは、むらさきの御つほね、このよしきこしめし、いかになんち、うけたまはり、これよりさいほう、みだのちやうとゝさふらふは、これより、にしにあたりたる、あみだだうの御ことなり。きさきの、このほと百日まふてを、めされけるか、そのこんよとは、ゆふさり|(10オ)すき、またこんよとは、あすのよもすき、そのゝちのよ、これよりにしの、あみだだうにて、あはんとの、おほせなり、のりきよ、とそおほせける。のりきよ、このよしうけたまはり、なのめならす、よろこびて、やかて、しゆくしよに、たちかへり、そのよをいまやと、まちゐたり。

すてにそのよになりぬれは、いそき、このあみだだうにまいりつゝ、きさきの御かけを、いまや〳〵と、まつほとに、さよふけかたになりしかは、たちをまくらにして、まどろまんとしけれは、きさき、このよしきこしめし、たちかへらんと、したまひけるか、けにや人の思ひをきるものは、じやだうにおつるとおほしめし、まくらもとに、たちよらせ給ひて、一しゆのうたを、あそはしける。

十五夜の月のいつるをまちかねて|(10ウ)
まとろむけすそつたなかりける

とそあそはしけれは、のりきよ、うけたまはり、ゆめのうちに、

十五夜の月のいつるをまちかねて

ゆめにや見るとまとろみそする

と、つゐに、そのこひとけければは、かさねて、のりきよ御たもとにすかりて、さてまた、いつをと申けれは、あこきやとはかりおほせありて、かへらせ給ひけり。さては、のりきよは、一すんのとうしみ、五ぶんにきりて、かきたてたる、あふらひいまた、きえぬうちに、百しゆのうたを、つらぬるほとの、かじんなれとも、いせのうみ、あこぎがうらにひくあみも、たびかさなれは、あらはれそする、といふこゝろをしらすして、十九といふに、もとゆひきりて、にしゑなけ、そのなを」さいきやうほうしと、よはれけるも、さなから、こひゆへとそ、うけたまはる。(11オ)

いかなれは、かきのもとのそうちやうは、御としつもつて、六十八と申には、そめとのゝきさきのみやを、こひたてまつり、つゐに、そのこひとけすして、せきのしみつに、かげ見れは、そうしやう、あをきおにと、けんしたまふ。そのまうねんのかゝるゆへ、みやすところは、あかきおにと、けんじつゝ、八まんさいを、へたまひしも、ひとへに、およはぬこひゆへなり。

それ、てんちくの、しゆつはきやうは、いかなれは、ほしのみやを、ゆめにみて、それをこひちにめされつゝ、つゐに、そのこひとけすして、ごうがかわに、身をなけ給ふも、さなから、およはぬこひゆへなり。

ゆめにや見んとまとろみにけり

申つゝ、つゐに、そのこいとけにけり。かさねて、つりきよ御そてにすかりて、又、いつと申けれは、あこきや、とはかりおほせありて、かへらせ給ひ、さても、のりきよは、一すんのとうしみ、五すんにきりて、かきたてゝる、あふらひいまた、きえ」ぬうちに、百しゆのうたを、つらねぬるほとの、か人なれとも、いせのうみ、あこきかうらにひくあみも、たひかさなれは、あらはれそする、といふうたをしらすして、十九と申とし、もとゆひきりて、にしへなけ、そのなを、さいきやうほつしと、よはれけるも、さなから、をよはぬこひとこそ、うけたまはれ。(34オ)

いかなる、かきのもとの、きそうしやうは、御としつもりて、六十八と申には、そめとのゝきさきのみやを、こひたてまつり、つ」ゐに、そのこひとけすして、せきのしみつに、かけ見れは、そうしやう、あをきをにと、けんしつゝ、八まんさいを、へたまひしも、ひとへに、およはぬこひゆへなり。(34ウ)

それ、てんちくの、しゆつこきやうは、いかなれは、ほしのみやを、ゆめに見て、それをこいちにめされて、つゐに、そのこひとけすして、こうか川へ、身をなけたまふも、さなから、およはぬこひゆへなり。

およはぬこひとさふらふは、ぼんふの身として、神や仏をこい|(35オ)たてまつりてこそ、けにも、およはぬこひそとは、さふらふへけれ。ほんふか、ほんふをこひたらんは、なにか、くるしう候へき、いかにやきみ、とそおほせける。

八たん

けにや、九ちうのたう、くりん、たかしと申せとも、つはめかとへは、したにありときく。つるきのやいはの、きるとても、いわのかとをは、けつらぬそ。そのふのたけは、たかきとて、たうりてんへは、のほらぬ物。三か|(35ウ)わはかつる八はしの、くもてに物やおもふらん。一しゆのかけ、一かのなかれをくむも、これみな、たしやうのえんそかし。ふゑによる秋のしか、いのちをすつるもこひゆへなり。なつのむしの、ひに入も、たまむしとかやにすかされて、みをいたつらになすとかや。かゝる心のなき物までも、こひのみちに、まよふとかやきく。きみは、ゐなかの人なれは、くわしやは、みやこの物として、のへのくもゐをいて、のえのしほちを、へたてさふらひしかとも、き|(36オ)みと、くわしやとのなか川の、あふせを、たかひにまかせてこそ、いまゝて、ひとりはおはすらん。いかにやきみ、とそおほせける。しやうるり、此よしきこしめし、かへらせ給へや、みやこのとの、あ

およはぬこひとは、ぼんふの身として、かみやほとけをこひたてまつりてこそ、けにも、およはぬこひにて、さふらふなり。ほんふをこひたらんには、なにか、くるしかるべき、いかにやきみ、とそおほせける。|(11ウ)

八段

けにや、九ちうのたうの、くりん、たかしと申せとも、つばめとべは、したにあり。つるぎのやきばは、はやきとて、いわのかどをば、けづらぬ物ぞ。みねのたけは、たかきとて、とうりてんゑは、とをらぬもの。三かはにかくる八はしの、くもてに物や思ふらん。一じゆのかげ、一がのなかれをくむ事も、これみな、たしやうのゑんそかし。ふへにあきのしかの、いのちをすつるもこいゆへなり。なつのむしの、ひにいるも、たまむしとかやにすかされて、身をいたつらになすとかや。かゝるこゝろなきものまても、こひのみちには、まよふときく。きみは、ゐなかの人なれとも、くわしやは、みやこのものとして、こゝのへのくもゐをいて、八へのしほちを、へたてさふらへとも、きみと、くわしやとのなかかわの、あふせを、まちてこそ、いままて、ひとりは|(12オ)おはすらん。いかにやきみ、とそおほせける。ちやうるり、このよしきこしめし、かへらせ給へ、みやこのとの、あ

すになるならば、はゝのちやうしやの、みゝにいり、かねうりきちじがけにんこそ、ひめかかたへ、ちかつきたるとて、ものゝふにおほせつけ、こうちへひきいたし、あき人のてにわたり、るさひに、おこなはれんとき、はかなききみを、うらみ給ふな。かへらせたまへ、みやこのとの、とそおほせける。御ざうしは、きこしめし、あすは、いかにもならはなれ、たとひ、るさひに、おこなはれ候とも、くわしやかためには、めんほくなり。とかくへんじをのたまへや。ぢやうるり、このよしきこしめし、このとのは、しよじにこざかしき人にて、おはしますそや。すかしてみん、とおほしめし、いかに、いなと申さはこそ、わらはと申は、こそのはる(12ウ)のころよりも、ちゝにおくれたてまつり、そのために、たひ三ねんに、ならぬうちに、せんぶのきやうを、よみたてまつりさぶらふ。ひるは、一ぶのきやうをよみ、夜るは、ねんふつ、けうやう、をこたらす、ゑかうしたてまつるなり。だひ三ねんすきてそのゝちは、ともかくも、やはきに、みつからあるならば、ながくつまとおほしめせ。しやうじは、くるまのわのことし。なとかは、めくりあはさらん。かつうは御身のためなるへし。御きやうにおそれをなし給へ、みやこのとの。

御ざうしは、きこしめし、きみ、よく〳〵きこしめせ。せきとめられし、おかわのみつ、もれて、なかるゝもの。たけのふし〳〵、よをこめて、すゑまて物をおもへとや。三さうほうしは、あしこくわうの、

すになるなら、はゝのちやうしやの、みゝに入、かねうりきちしかけにんこそ、あるかたへ、ちかつきたりとて、ものゝふともにおほせつけ、こうちへいたし、あき人のてにわたり、しざい、るざいに、おこなはれんとき、はかなき身つからを(36ウ)うらみ給ふな。かへらせたまへや、みやこの殿、とそおほせける。御さうし、きこしめし、あすは、いかにもならはなれ。たとひ、るさい、しさいに、おこなけるとも、くわしやかためには、めんほくなりと、とかくさま〳〵の給へは、しやうるり、此よしきこしめし、此とのは、せうしにさかしき人に、おはしますそや。すかしてみん、とおほしめし、つゐに、いなとも申さはこそ、わらはと申は、こそのはるのころよりも、ちゝにおくれたてまつり(37オ)、そのために、大さんねんのうちに、せんふの御きやうを、よみたてまつるみにて、ひるは、一ふの御きやうをよみたてまつる。よるは、一万へんのねんふつ、おこたらす、ゑかふしたてまつるなり。身つからはゝ、なからへつるとおほしめせ。しやうしは、くるまのわのことし。なとか、めくりあわさらん。かつうは御身のためなるへし。御きやうにおそれをなしたまへや、このとの、とそおほせける。

御さうし、きこしめし(37ウ)いかにやきみ、きこしめせ。せきとめらせし、川のみつも、つゐにはもれて、なかるゝ物。たけのふし〳〵、よをこめて、すへまておもへとさふらふかや。それ、てんちく三さうほつし

は、いかなれは、あしこくわうの、ひめみやに、あひなれそめし、御こには、しんか大しんを、まうけたまふ。これも、こいちのゆへそかし。

いかなれは、しかてらの上人は、御とし八十三と申に、きやうこくのみやすところ、あまりに、そのおもかけの、いふせさ」(38オ)に、御とし十七と申に、みすのほかまて御いてありて、御てはかりをたてまつる。上人は、御てはかりをたまはりて、一しゆの哥をそ、あそはしける。

はつはるのはつねのけふのたまはゝき
てにとるからにゆらくたまのを

とあそはしけれは、みやすところは、きこしめし

いさゝらはまことのみちにしるへして
我をいさなへゆらくたまのを

と上人、御てはかりをたまはりて、三とこのむねに」(38ウ)をしあてゝ、つゐに、こひとけたりしかは、みやすところは、たゝならす、御くわいにんありて、ほとなく、ゑちせんの、つるかの津と、いつのさかいなる、あらち山にて、御さんのひほを、とき給ふ。かれをとりあけて見給へは、おもては六、御ては十二あり。もとは、あらち山と申せとも、それよりはしめて、あらちの山とそ申ける。かの物、やかて、とそつてんに、あかりたまひて、八十おつこうをへて、そののち、ほんてんひめみやに、あひなれそめて、御こに、しんかだいじんを、まふけ給ふ。」(13オ)これも、こひちのゆへそかし。

いかなれは、しかてらの上人は、御とし八十と申に、きやうこくのみやすところを、こひたてまつり給ふ。みやすところは、あまりに、そのおもかけ、いふせさに、御とし十七と申に、みすのほかまて御いてあり。御てはかりをたてまつり、上人は、御てはかりをたまはりて、一しゆのうたをぞ、あそばしける。

はつはるのはつねのけふのたまはゝき
てにとるからにゆらてたまのを

とそあそはしける。みやすところは、きこしめし、

いさゝらはまことのみちのしるへして
われをいさなへゆらくたまのを

しやうにんは、御てはかりをたまはりて、さんこのむねにおし」(13ウ)あてゝ、つゐに、そのこひとけたりしかは、みやすところは、たゝならす。御くわいにんとそ、うけたまはり候。くわひにん、つもれは、ほともなく、ゑちせんのくに、つるかのつに、いつのさかへなる、あらちやまにて、御さんのひもを、御ときある。かれをとりあけたまへは、おもてはむつ、御ては十二あり。もとは、あらしやまとそ申ける。かのもの、とそつてんゑ、あがり給ひて、八十おつこうをへて、そのゝ

よりあまくた(39オ)り給ひて、つるかの津に、けいたいほさつとあらはれて、ほくろくたうを、しゆこし給ふも、さなから、こひちとうけたまはる。

扨、おのゝこまちは、人のおんねんかゝれる、とかにより、つゐに、きやうらんして、のへをすみかと、さため、よもきかもとの、ちりとなり、けんしの、女三のみやは、かしは木のゑもんのかみに、あひなれそめて、かほる大しやうをうみ給ふ。ひかるけんしの大しやう、きこしめし、かくなん(39ウ)

たかよにかたかねをききしと人とはゝ
いかゝいはねのまつはこたへん

とあそはしけるも、ゆらひは、こひのいはれなり。

かやうに申、くわしやも、三さいより、ちゝにをくれたてまつり、万ふの御きやう、おこたらす。ひるは、三ふのらやこたおうき御す。よるは、六万へんのねんふつを、さらにおこたる事なし。しやうしのところへ、ふしやうしの、くわしやか、よりあひて、二世の物かたりを申さんは、なにか、くるしかるへきそ。

しやうるり(40オ)此よしきこしめし、わらはと申は、これ、なにとなくいやしき、しはのいほりにてさふらへとも、三世のしよふつは、つねに、やうかうなり給ふ。わらはに、かたそり給ふなよ。ほとけに、おそれち、ぼんでんよりあまくたり、つるがのつに、けいたいぼさつとあらわれて、ほくろくだうを、しゆごしたまふも、さながら、こひちとうけたまはり候。

さて又、をのゝこまちは、人のねんかかれる、とがにより、つゐに、きやうらんして、のべをすみかと、さためつゝ、ゑもきかもとの、ちりとなる。けんじの、によさん(14オ)のみやは、かしはきのゑもんのかみに、あひなれそめて、かほる大しやうをうみ給ふ。さころもの中せう、きこしめし、

たがよにかたねをまきしと人とはゝ
いわねのまつはいかゝこたゑん

とそあそはしけるも、ゆへは、こひちのいはれなり。

かく申、くわしやも、五さひのとしよりも、ちゝにおくれたてまつり、まんぶの御きやう、をこたらず。ひるは、三ぶの御きやうよみ、よるは、六まんへんのねんぶつ、みたきやうをよみ、さらにおこたることもなし。しやうじどころゑ、ふしやうじものか、まいりあひてもあらばこそ、しやうじとしやうじか、まいりあひて、のちのよの物かたりを申さんに、なにか、くるしう候べき。

じやうるり、このよしきこしめし、わらはと申は、これ、なに(14ウ)となくいやしき、しつかふせや、しばのいほにて候へとも、三世のしよぶつの、やうがうならせ給ふ。わらはに、かたそりたまふな。ほとけに、

をなし、御返りあれ、とそおほせける。
御さうしは、きこしめし、いかにやきみ、きこしめし、いかにや君、仏もこひをめさるれはこそ、うろちよりむろちにかよふ、しやかたにも、やしゆ大しんの御むすめ、やしゆたらによに、あ」いなれそめて、(40ウ)御こには、らこらそんしやを、まうけ給ひ候なり。かみたにも、むすふの神とて、をはします。百王百たいまて、まもらんとちかひ候、神たにも、いせのしんめいと、御たちある。そのほか、あつたのみや、すわのみやうしん、いつ、はこね、みわのみやしろまて、なんたい、によたたいは、おはします。ましてや、もろ〳〵の三ほう、くわこ、せんせのむかしより、こんにち、こよひにいたるまて、むすひたまへるちきり也。」なんによに、わかうの、なさけをは、いかて、そむき(41オ)給ふへき。ほんなう、すなはち、ほたひなり。しゆしやう、すなはち、ほとけなり。一ふつかいせんこんしや、ととくときは、たにのくち木も、ほとけなり。まんほう一如と、とくときは、みねのあらしも、のりのこゑ。しよほう、しつさうとくわんすれは、ほとけもしゆしやうも、ひとつなりと、ふつほう、せせほうになそらへて、おほくのことはを、つくされけり。」(41ウ)

九たん

しやうるり、此よしきこしめし、こはいかに、此とのは、しやうしにをそれをなし給へ。御かへりあれ、とそおほせける。
御ざうしは、きこしめし、きみ、ほとけも、こひをめさればこそ、こしぢよりむろじゑかよふ、しやかたにも、やしや大しんの御むすめ、やしゆたらによに、あひなれそめて、御こに、らごらそんじやを、まふけ給ふ。かみたにも、むすぶのかみとて、おはします。百日百やまて、まもらんとちかへ給ふ、かみたにも、いせしんめいと、御たちある。なみのたかくら、あつたのみや、すはの上下、いつ、はこね、につくわうざんのやしろまて、なんたひ、によたひ、おはします。ましてや、もろ〳〵のしよぶつ三ほう、くわこ、けんせのむかし」より、(15オ)けふ、こよひにいたるまて、むすひ給ひつるちきりなり。なんによ、くわうこうの、なさけをは、いかてか、そむきたまふべし。ほんなう、すなはち、しやうじ。しやうじ、すなはち、ねはんなり。一ふつかいせんこんしやう、ときくときは、たにのくちきも、ほとけとなる。まんほう一によと、きくときは、みねのあらしも、のりのこゑ。しよほう、じつさうとくわんずれば、しやうもひとつなりと、ぶつほうになそらへて、おほくのことばを、つくされける。

九段

しやうるり、このよしきこしめし、こはいかに、このとのは、しよし

にこさかしき人にて、ましますそや。いまよりのちは、物をいわしとおほしめし、こわた山にはあらねとも（15ウ）、たゝくちなしとて、をともせす。

御さうしは、きこしめし、やまとことはになそらへて、おほせけるこそおもしろけれ。いかにやきみ、みちのくの、人めしのふにあらねとも、物をいわしとさふらふや。つのくに、なにはいりゑにあらねとも、よしともあしとも、いわしとや。わかこひを、物によく〳〵たとふれは、しなのなる、あさまのたけのふせいかや。つゝ井のみつにもさもにたり。つるなきゆみにもたとへたり。の中のしみつにたとへたり。つなかぬこまにもさもにたり。ねさゝのうへのあられかや。したふくすにもたとへたり。ふゑたけのふせいかや。一むらすゝきのありさまかや。ほそたにかわのみつなれや。うつすみなわのふせいかや。二またかわのふせいかや。きよみつさかのふせいかや。なち（16オ）のおやまのふせいかや。おきこくふねにもさもにたり。けちやうのおひのふせいかや。うつみひにもたとへたり、とおほせけれは、

しやうるり、このよしきこしめし、いかにものをいわしとおもへとも、人のかたより、うたをかけられて、うたのかへしをせぬものは、これ五たうりんゑのこなたなる、山のしたに、むりやうこうをへて、したなきじやしんにむまるゝもの。人のかたよりふみをゑて、ふみのかへしをせぬものは、まうもくに、むまるゝもの。へんじはかりはせはや、

さかしき人にて、ましますや。今よりのちは、物をいはしとおほしめし、こわた山にはあらねとも、たゝくちなしにとて、をともせす。

御さうし、きこしめし、やまとことはになそらへて、おほせけるこそ、おもしろけれ。いかにやきみ、みちのへの、人めしのふにあらねとも、物をいわしとさふらふかや。つの国（42オ）の、なにはいり江にあらねとも、あしともよしとも、いはしとや。我こひは、物によく〳〵たとふれは、しなのなる、あさまのたけのふせいかや。つゝゐのみつにもさもにたり。つるなきゆみにもにたり。つなかぬこまにもたとへたり。ねさゝのうへのあられとかや。したはくさにもたとへたり。ふゑ竹のふせひかや。一むらすゝきのありさまかや。ふたまた川ともいひつへし。きよみつさかともいひつへし。（42ウ）なちのを山のふせひかや。おきこくふねにもたとへたり。うつせみにもたとへたり。こきくれなゐのふせひかや。うつみひのありさまかや。のなかのしみつにさもにたり、とおほせけれは、

しやうるり、此よしきこしめし、いかにや物をいわしと思ひへとも、人のかたより、うたをかけられて、哥の返事をせぬものは、こたうりんゑのこなたなる、山のしたに、むりやうこかうをへて、したなきしやしんとむまるゝ物。（43オ）人のかたより文をえて、ふみの返事をせぬものは、まうもくに、むまるゝものなり。かへり事斗はせはや、とおほし

めし、いかにや、みやこのとの、あさまのたけとのたまふは、もえたつはかりの心かや。のなかのし水とのたまふは、かきわけまいるとさふらふかや。つるなきゆみとさふらふは、ひくにひかれぬたとへかや。ねさゝのうへのあられとは、おちよのはかりのたとへかや。したはくさとのたとへは、たゝ一よこめよとさ」ふらふかや。一むらすゝきとさふらふは、おちてひとつになれ、との心かや。

うつせみ又はなはのたとへは、たゝひとすちにと、おもひきれとさふらふかや。ふたまた川のふせひとは、めくりあえとの心かや。きよ水さかのふせいとは、人めしけきのたとへかや。おきこくふねとさふらふは、こかれて物をおもふとかや。なちのお山のふせひとは、そこのみこかれて、うへにけふりのたゝぬとや。こきくれなひとさふらふは、いろに」いつるとさふらふかや。

しやうるりこせんは十四なり。御さうしは十五なり。十四十五との事なれは、なれうなれしの、すまふくさ、きやうけん、きよになそらへて、ことはにはなを、さかせける。

御さうし、きこしめし、いかにや君、うつの山への、つたのみち、たえこそなかれ、ほそ　みちのくのあさかの、ぬまの花かつみ、かつみとおほしめし、いかにや、みやこのとの、あさまのたけとさふらふは、もえたつはかりのふせいかや。つゝ井のみつのふせいかや。のなかのしみつとさふらふは、かきわけておもふとかや。つなかぬこまとさふらふは、ぬしなき物」とのおほせかや。つるなきゆみとさふらふは、ひくにひかれぬたとへかや。ねさゝのうへのあられとは、ひかはおちよとのおほせかや。したふくすのふせいとは、もとはひとつにて、心をくたくとかや。ふゑたけのふせいとは、ひとよこめよとさふらふかや。一むらすゝきとさふらふは、たゝ一ときになひけとかや。ほそたにかわのふせいとは、一どはおちてひとつになれ、との心かや。

うつすみなわのたとへとは、たゝひとすぢに思ひきれとかや。二またかわのふせいとは、めくりあへとのこゝろかや。きよみつさかのふせいとは、人めしけきのたとへかや。けちやうのおひのふせいとは、むすひてあへとのこゝろかや。おきこくふねとさふらふは、こかれて物を思ふとかや。なちのおやまのふせいとは、申はかなへとのふせいかや。」うへにけふりのたゝぬとかや。

しやうるりこせんは十四なり。御ざうしは十五なり。十四と十五の事なれは、なれうなれしの、すまふくさ、きやうけんきよになそらへて、ことはにはなを、さかせける。

きこしめせ。うつの山への、つたのみち、たへこそなけれとも、みちのくの、あさかのぬまのはなかつみ、見る人にこひまさる。しもつけ

の、むろのやしまに、たつけふりも、かせにはなひくときくものを。みつにもまるゝかはやなきも、ゑたにひかりをはなさんとて、ほたるに、やとをかす物を。よしあしとて、きりすてらるゝ、くれたけも、もとに一よは、とまる物。かせにもまるゝくさきだに、つまにはやとを、かすときく。

じやうるり、このよしきこしめし、こはいかに、此とのは、しよじにこざかしき人にてありけるそや、とても、によにんとむまれなば」(17ウ)

（白　紙）」(18オ)

かやうの人に、あひなれて、くさのまくらのうたたねも、つゆのなさけをこめはやなん、とおほしめし、人のおもひをきるものは、じやしんとむまるゝものなるを、あけなば、はゝのちやうじやの、みゝにいり、いかなるめにも、あわはあへ、なひかはや、とおほしめし、さすか、なひかしものとはおもへとも、むかし、おにのたてたりし、いしのとも、なさけにあへと、きくものを、よひは、さかもり、夜なかは、もんたう、さ夜ふけかたのことなる、たかひにあひにあひ給ふなり。

十　段

る人にたゝいまさり、しもつけの、むろのやしまに、たつけふりも、風になひくときく物を。みつに」(44ウ)もまるゝ河やなきも、ゑたにひかりをはなさんとて、ほたるに、やとをかす物を。よしやあしとて、きりすてゝ、けふりもくれなゐも、もとはひとよに、とまる物。かせにもまるゝくさきたに、つはさにやとを、かすときく。

しやうるり、このよしきこしめし、こはいかに、このとのは、しよしにさかしき人にてありけるや、とても、女人にむまれなは、かやうの人に、あひなれて、くさのまくらのかたゝねと、つゆの」(45オ)なさけをこめはや、なとゝおほしめし、人のおもひをきる物は、しやしんとむまるゝ物。あけなは、はゝのちやうしやの、みゝにいり、いかなるめいにも、あはゝあへ、なひかはや、とおもへとも、いくらの大みやうせうみやうの、ことはを、つくさせ給ひたる物を、つゐにもちゐす、返事せて、かねうりきちし、てうせきしこうの、みやこのくわしや、此くわしや、こよひしも、なひかん事、とおもへとも、むかし、おにのたてた」(45ウ)りし、いしのとも、なさけにあくと、きく物を、とおほしめし、よひは、さかもり、よもなかはには、もんたう、ふけかたの事なるに、たかひのさんけ、めされけり。

十たん

しやうるり御せんは、いわきをむすはぬ御身なれは、はなたのをひの一むすひ、とけぬほとこそ、久しけれ。かしまの三のちかひにて、なひきそめさせ給ひける。みきはのこほり、うちとけて、られうのた|(46オ)もと、ひきかさね、かみならは、むすふのかみ、ほとけならは、あひせんわう、きとならは、れんりのえた、とりならは、ひよくのとり、なをもふかくそ、ちきられける。

御さうしは、ちよを一よにも、もゝよを一よにもなしたく、よをなかゝれ、とおほしける。あまのいわとを、たてこめて、此よはやみにならはなれ、此まゝあれかし、おほしめす。とかくふけぬる、こよひなれは、ほとなく、にはとり、こゑ〳〵に、わかれをつくるそ|(46ウ)あはれなる。きをんしやうしやにあらねとも、しよきやうむしやうの、かねのこゑ、ひゝきつゝ、今をかきりと身にはしむ。たれともしらぬ人なれと、つゆのまくらになれそめて、今さらわかれのかなしさよ。よろつよを、なれたりとも、いかてかこれに、まさるへき。こかうのてんも、すきゆけは、人もや、ゆめをさますらん。やもめからすも、なきわたる。よは、ほの〳〵とあけにけり。

しやうるりは、なこり|(47オ)のそてをしほりつゝ、いとまこいをは、めさるれと、なこりをしうそ、おほしめす。

しやうるり御せんは、いわきをむすはぬ御身なれは、はたのおひの一むすひ、かしまのかみのしのひにて、なひきそめさせ給ひける。みきはのこほり、うちとけて、られうのたもとを、かさねて、かみならは、むすふのかみ、ほとけならは、あひせんわう、きならは、れんりの|(18ウ)ゑた、とりならは、ひよくのとりよりも、なをもふかくそ、ちきらせたまひける。

御さうしは、こよひをは、ちよを一よ、もゝよを一よ、とたへても、なをなかれ、とそおほしける。あまのいわとを、たてこめて、この世はやみにもならはなれ、此まゝあれとそ、おほしめす。とかくふけぬる、こよひなれは、ほとなく、にはとり、こゑ〳〵に、わかれをつくるそ、あはれなる。きをんしやうしやにあらねとも、しよきやうむしやうの、かねのひゝき、いまをかきりと身にそしむ。たれともしらぬ人なれとも、つゆのまくらになれそめて、いまさらわかれのかなしさは、ちよよろつよを、なれたりとも、いかてかこれには、まさるへき。五かうのてんも、すきゆけは、人もや、ゆめを見さらん。やもめからすも、なきわたり、夜は、ほの〳〵とあけにけり。

御さうし、なごりのそてをしほりつゝ、いとま|(19オ)をこうてそ、御かへりある。しやうるり、このよしきこしめし、それに、とゝまりたまひて、やうてうふひて、わらはともに、ちやうもんさせ、ねうはうたちにも、ひわ、こと、ひかせ、たひの御つれ〳〵をも、なくさめ給へ、

御さうし、此よしきこしめし、それかしも、さこそそんし候へとも、たのみたる、あき人の、いそきたひたち候へは、さこそ、たつねさふらふらん。つゆのいのち、もしもなからへ候はゝ、うきよは、くるまのわのことく、めくりてきぬる事あらは、よそになしてもとひ給へ、とおほせありてそ、なき給ふ。

しやうるりこせんは、御さうしの、たもとを、ひ|かへつゝ、ひろゑんまてそ、いてたまふ。かゝるおもひし、うくひす、かすめるそらの、はなそのに、さえつりたれは、御さうし、とりあへすこそ、あそはしけれ。

わかれゆくおもひをとふる此やとの
花をおしみてなくかうくひす

しやうるり、このよしきこしめし、

君もゆき花もとまらぬ岩なれは
おしみてなくかうくひすのこゑ

御さうし、きこしめし、かさねて返事に、かくはかり、

いとゝしく花ちる里は物うきに
なにをなけくそ|にはのうくひす

とあそはして、ゆきもやらてそ、たゝれける。

はゝのちやうしやは、ゆふへ、ひめかもとへ、やさしきふゑのねの、みやこのとの、とそおほせける。

御さうしは、きこしめし、それかしも、さこそはおもひ候へとも、あき人の、いそくたひにて候へは、さこそは、たつね候らん。つゆのいのちの、もしもなからへ候はゝ、うきよは、くるまのわのことく、めくりてきぬる事あらは、よそになしてもとひ給へ、とおほせありてそ、なき給ふ。

しやうるり御せんは、御さうしの、られうのたもとを、ひかへつゝ、ひろゑんまて、いて給ふ。おりふし、うくひすの、はつにかすめる、はなそのに、さえつりけれは、御さうし、とりあへすこそ、あそはされける。

わかれゆくおもひをとふか此やとの|
はなをおしみてなくやうくひす

しやうるり、此よしきこしめし、

いとゝしく花ちるさとの物うきに
よをうくひすのさのみなくらん

とあそはして、ゆきもやらてそ、たゝれたる。

ちやうしや御せんは、ゆふべ、ひめかかたに、やさしきふゑのねの、

きこえつる。なにとやらん、ゆきて見はや、とおほしめし、十二ひとへを、ひきしやうすいて、ちやうしやのすみかを、たちいてゝ、ひめ君の御かたへそ、いらせ給ひける。いたわしやな、しやうるり御せんは、はゝのちやうしやを見たてまつりて、ときならぬ、もみちをちらしつゝ、ちやうたいに、ふかくそ、し(48ウ)のはれける。御さうしは、御らんして、ちやうしや御せんと、わか身のあひたに、山のいんを、むすひてかけ、ゑんよりしもへ、とんており、あふきのしやくを、とりなをし、おもひよらすそ、御しうとめに、けんさんしたり、とおほしめし、ついちの、はたいた、とひこえて、みえのほりをも、ゆらりととひこえ、心は、やはきにとゝまれとも、そのみは、かねうりきちしと、つれたち、あつまのおくへ、御くたりある。

あらいた(49オ)はしや、御さうしは、よにしたかへるならひとて、きちしかたちをは、みきにもち、けんしちうたいの、こうねんとうの、御はかせをは、ひたりのわきに、しのはせて、いまたならぬ、竹のふちを、ぬきもち給ひつゝ、四十二ひきのさうたに、うちましり給ひて、御くたりあるこそ、あはれなれ。

きこえつる、いつれの人やらん、ゆきて見はや、とおほしめし、十二ひとへを、ひきしやうすいて、ちやうしやのすみかを、うちいてゝ、ひめきみの御かたへそ、いらせたまひける。いたはしや、しやうるり御せんは、はゝのちやうしやを見たてまつりて、ときならぬ、かほにもみちをちらしつゝ、ちやうだひふかくぞ(20オ)しのはれける。御さうしは、御らんして、ちやうしや御せんと、わか身のあひたに、こやまのいんを、むすひてかけ、わかみには、こたかのいんを、むすひかけ、ゑんよりしたに、とんてをり、あふきのしやくを、とりなをし、おもひよらすも、御しうと、げんざん申さん。はついた、とひこえて、三ゑのほりを、ひらりととびこえて、こゝろは、やはきにとまれとも、その身は、かねうりきちじと、うちつれて、あつまのおくにそ、御くたりある。(20ウ)

（白　紙）(21オ)

（白　紙）(21ウ)

〔絵　第一図〕〈下半分〉

あらいたはしや、御さうしは、よにしたかへるならひとて、きちじがたちをば、みぎにはき、げんじおうだひの、こんねんとうの、御はかせをば、ひだりのわきに、しのはせ、いまたならはぬ、たけのぶちを、ぬきいれさせ給ひつゝ、四十二ひきの(22オ)

〔絵　第二図〕〈下半分〉

めいしよ〳〵は、とれ〳〵そ。うきもつらきも、とうたうみ、はまなのはしを、ゆくしほに、さゝれてのほる、あまを舟」こかれてものやおもふらん。さても、たひは物うきに、（49ウ）

こすゑにかよふ、風のこゑ、入江にひゝく、なみのおと、心もつくと、夕まくれ、いけたのしゆくにも、つき給ひ、やとをいてゝ、又、そこともしらぬ、ゆくすゑを、はるかになかめましませは、とをきすゑのゝ、花ともは、のこるゆきかと、

うたかはれ、ならはぬこひを、するかなる、うつの山への、うつゝなる、ゆめにもあふ山とをるにも、またこゆへしと、おもへ」とも、いのちなりけりと、なかむれは、心ほそさそ、まさりける。日かすつもれる、ほともなく、なをえて、をとにきこえたる、するかのかんはら、たこのうら、ふきあけのはまにこそ、御つきある。（50オ）

十一たん

さても、かの御さうしは、ふきあけにつき給ひて、そのゝち、一日はざうだに、うちまじはりて、御くたりあるこそ、あはれなれ。

めいしよ〳〵は、とれ〳〵ぞ。うきもつらきも、とをたうみ、はまなのはしの、ゆふしほに、さゝれてのほる、あまをふね、こがれて物や思ふらん。さても、たひの物うさに、まつの」（22ウ）

〔絵　第三図〕〈下半分〉

こすへに、かせかよふ、いり江にひゝく、なみのをと、こゝろをつくす、ゆふまくれ、いけたのしゆくにも、つき給ふ。いけだのやとを、たちいてゝ、そこともしらぬ、ゆくすゑを、はるかに、なかめたまへは、とをきこすゑを、なかむれは、花をゆきかと」（23オ）

〔絵　第四図〕〈下半分〉

うたかはれ、ならはぬこひを、するかなる、うつの山の、うつゝにも、ゆめにも人に、あふ事なき、つたのほそみち、わけすきて、さよのなか山とをるにも、又こゆべきとおもへとも、いのちなりけると、かなむれは、ほどなく、日かすつもれは、心ほそさそ、まさりける。なをゑて、をとにきこえたる、するかのかんばら、たこのうら、ふきあげにこそ、御つきあれ。」（23ウ）

十一段

かくて、御さうしは、ふきあげにつき給ひて、そのゝち、一日は、た

たひつかれ、二日は、かみやみ、三日は、きやへいに、うちふしたまひけるか、

いかにやくわしやとの、きこし」(50ウ)めせ。御身のきやあいは、たゝふうきにてさらになし。これは、大しのきひやうなり。うつりて、人のたすかる事かたし。いかにせん、とそかなしみける。

一日二日せしほとに、はや五日にも、なりしかは、きちしは、やとのていしゆを、ちかつけて、いかに、あるしのとの、わか身は、たれとおほしめす。わうしうにかくれなき、ひてひらとのの、御たいくわん、かねうりきちしのふたかとて、としに一とつゝ、みねんく、そなへて、みやこ」(51オ)へのほるものにて、一てうもとりはし、こめやか、やとにて候。かのこめやより、あつまへくたり候、くわしやを一人、ことつけ候。このほとの、たひのつかれにや、かせのこゝちしてさふらふ。よはなさけにて候へは、かいひやうしてたひ給へ。よきにいたはりたまふならは、みやうねんのほりには、御おんをほうし候はんとて、つめよきむまに、こかね十りやう、とりそへて、あるしのとのにたてまつる。いとま申て、さらはとて、くわ」(51ウ)しやとのも、きちしも、そてをしほりつゝ、いたはしや、御さうしを、そこともしらぬ、ふきあけに、たゝひとりうちすてたてまつり、あつまをさしてそ、くたりける。

さても、かの御さうしは、ふきあけに、たゝひとり、すてられておはびのつかれ、二日は、かみやみ、三日は、ぎやへひと、うちふし給ひける。きちじ、此よし見たてまつりて、申けるは、いかにくわじやとの、きこしめせ。きやへひは、たゝのふうきにては候はす。これは、たいじのがひびやうなり。うつりて、人のたすかる事かたし。いかにせん、とそかなしみける。

一日二日とせしほとに、はや四五日に、なりしかは、きちじとのは、やどのていしゆを、ちかつけて、いかに候、あるじとの、われらを、たれとかおほしめす。わうしうにかくれなき、ひてひらとのの、御だひくわんに、かねうりきちじのふたかとて、としに一どつゝ、御ねんぐ、そなへて、みやこへのほるものにて候。一でうもとりはし、こめやか、やとにて候なり。かのこめ」(24オ)やより、あつまへくたる、くわしやを一人、ことつて候。此ほとの、たひのつかれかや、かせのこゝちと候。世はなさけにて候へは、かんひやうしてたひ給へ。よきにいたはり給ふならは、みやうねんのくたりには、御をんおほうじ候はんとて、つめよきこまに、こかねを十りやう、とりいたし、あるじとのにたてまつる。いとま申て、くわしやとて、きちじも、そてをしほりつゝ、御さうしを、そこともしらぬ、ふきあげに、たゝ一人うちすてたてまつり、あつまをさしてそ、くたりけり。」(24ウ)

〔絵　第五図〕」(25オ)

します。そののち、此ところのくせとして、しやけんかきりもなかりける。かゝるきひやうをやむ人を、一よも、いゑにはかなふましとて、なさけなくも、十りやうのかねに、こまをは（52オ）うけとり、はるかのうしろのはまに、たかまつ、六ほんあるなかに、ほそき竹を、はしらとして、まつのは、とりおほひ、いつくに雨風、たまるへきとも、おほえす、ぬまのまこも、ひきはへて、おけと、ひしやくを、とりそへて、御さうしを、いたしたてまつるそ、あはれなる。

さるほとに、ふきあけのうら人ともに、みやこより、あつまへくたるくわしやか、きひやうをいたはり、うしろのはまに、いたされて候かしやうのこまふえ、ちりき、やうてう、四くはんの、ふき物、こかねつくりのたちと、かたなとを、もちたるか、あの、こくわしやかふんにして、身のまはりに、六万貫か物を、もちたるらん。のちは何ともあらはあれ。いさ、ゆきて、かのたちをとり、しはしも、たのしまん、とおもへは、廿いろの、大しやとけんし、かたなは、しようしやとけんし、ちかつく物を、のまんとおつかくる。これをみる物、きもをけし、おめきさけんて、にけけれは（53オ）そのゝち、事とふ人もなし。たま〳〵ことふ物とては、なきさのちとり、おきのかもめ、ふきあけのまさこ、をとつれわたる、かせよりほかに、をともせす。

（52ウ）

そのゝち、此ところのくせとして、じやけんかきりもなかりけり。かゝるきひやうをやむ人を、一ツいゑにはかなふましとて、なさけなくも、十りやうのかねに、むまをはうけとり、はるかのうしろのはまに、たかまつ、六ほんあるなかに、ほそきたけを、はしらとして、まつのはを、とりおほひ、いつくに雨風、とまるへしとも、おほえねとも、ぬまのまこもを、ひきはへて、おけに、ひしやくを、そへて、御さうしを、いたしたてまつるそ、あわれなる。

さるほとに、ふきあけのうら人とも、みやこより、あつまへくたる、くわしや、きひやういたはり、うしろのはまに、いたされてあるか、しやうと、こまふゑと、ひちりき、やうてう、四くわんの、ふき物、こかねつくりのたちと、かたなを、もちたるか、あの、くわしやか、身に、六まんくわん、まひたるらん。（25ウ）

〔絵　第六図〕（下半分）

のちになにともあらはあれ。いさ〳〵、かのたちをとりて、しはし、たのしまんとて、うしろのはまへ、ゆきてみれは、たちは、はたいろの、大じやとけんじ、かたなは、小じやとへんじ、つるつくものを、のまんとおつかくる。あれを見るもの、きもをけし、おめきさけんてにけけれは、そのゝちは、事とふ人もなかりけり。たま〳〵ことふものとては、なきさの（26オ）

〔絵　第七図〕（下半分）

いたはしや、御さうし、いまをかきりと、みえしかは、かたしけなくも、正八まんは、よにもあわれと、おほしめし、こきすみそめの、御ころもをめし、らうそうと、けんしたまひて、いかにや、くわしやとの、なにを、いたはりたまふそや。いつくよりいつくを、とをらせ給ふ」(53ウ)たひ人そ。かやうに申は、あつまより、みやこへのほる、きやくそうなり。もし、みやこに、しる人ましまさは、ことつてしたまへ。ねんころに、とゝけまいらせん、とそおほせける。いたはしや、御さうし、さもかすかなる、いきの下より、これは、みやこより、あつまへくたる、くわしやか、きひやうを、いたはり、するかのかんはら、たこのうら、ふきあけといふところにて、あらぬにて候か、いまをかきりと見えたりと、三かわのくに、やはき」(54オ)のしゆくの、しやうるり御せんのかたへ、くわしくとゝけて、たひ給へ、とそおほせける。

けんしのうちかみ、正八まんは、此よしきこしめし給ひて、いとま申て、さらはとて、すみそめを、しほりつゝ、ふきあけを、たちいてさせたまひて、へんしの間に、三川のくに、やはきのしゆくに、つき給ふ。

ちやうしやのかたに、たちより、ひろゑんに、こしをかけ、これは、ちとり、おきのかもめ、ふきあけのはまのまさこ、をとつれたり。かせよりほかは、おともせす。

いたはしや、御さうしのまくらかみに、たちよらせ給ひ、さもかうしやうに、おほせける。いかにやくわしやとの、なにを、いたはり給ふそや。いつくよりいつくゑ、とをらせ給ふ、たひ人そ、かやうに申すは、あつまより、みやこ一けんに、まかりのほる、きやくそうなり。もしも、みやこに、しる」(26ウ)

〔絵　第八図〕〈下半分〉

人ましまさは、事つてし給へ。ねんころに、とゝけてまいらせん、とそおほせける。いたはしや、御さうし、さもかすかなる、いきのしたより、これは、みやこより、あつまへくたる、せうくわんか、けひやうを、いたはり候。するかのかんはら、たごのうら、ふきあけに、あらぬさまにてゐてあるか、いまをかきりと見えたりと、三かはのくに、やはきのしゆくの、しやうるりのかたへ、とゝけてたべ、とそ申ける。

けんじのうちかみ、しやう八まんは、此よしきこしめし、たしかに、とゝけ候はん。よきにや」(27オ)やうしやうし給へ。いとま申て、さらはとて、すみそめの、御そてをしほりつゝ、ふきあけを、たちいで給ひ、へんしのあひたに、三かはのくに、やはきのしゆくに、つき給ふ。

ちやうしやの屋かたに、たちよりたまひて、ひろゑんに、こしきかを

あつまのかたより、みやこ一けんに、まかりのほるそうに、御ちやしよまう、とおほせ（54ウ）ありて、かへにむかひて、ひとりことをそ、おほせける。あちきなしとよ、なむさんほう、むかしか今にいたるまて、こひ程つらき物はなし。ゆへをいかにと、たつぬるに、あふてわかれの、こひやらん、あはてうらむる、こひやらん。みやこより、あつまへくたる、くわしやにてありけるか、いかなる人を、みそめてか、こひのやまふにふししつみつるか、かんはら、たこのうら、ふきあけといふところに、まつのこかけをかこい（55オ）つゝ、一日二日とせしほとにけふ三七日に成と、おほゆると、いきのしたより申せしか、はや、むなしくそなりつらん。なむ三ほう、とそおほせける。れいせん、このよしうちきいて、いかに御さう、きこしめせ。そのとのの、としはいくつはかりの、ふせいにて候やらん。御そう、きこしめし、ちいさく、ひんのかみ、すこしちゝみて、あくまて、色しろくさうらいつる。いしやうは、いかに候ひしそ、こかねつくりのたち、かたな、もたせ（55ウ）たまひて候かと、とひ給へは、御そう、おほせには、されは、大かた、百まんきの大しやうといふとも、見くるしからし、といひもあへす、かきけすやうにそ、うせ給ふ。

れいせん、此よしうけたまはり、いそき、しやうるりこせんの、すみかに入、此よし、かく申せは、しやうるりこせんは、むねうちさはき、いつそや、きちしか下人と、あひなれしとて、はゝのふけうをかけ　たれは、あつまのをくよりも、みやこ一けんに、のぼるそうにて候。御ちやのしよまふ、とあり、かへにむかひて、ひとりことをそ、おほせけり。あちきなしとよ、なむさんほう、むかしかいまにいたるまて、こひほとつらきものはなし。ゆへをいかにと、たつぬるに、あふてわかれの、こひやらん。あわせうらむる、こひやらむ。みやこより、あつまへくたる、くわしやなるか、いかなる人を、みそめてか、こひのやまふとふししつみ、する（27ウ）かのかんはら、たこのうらに、ゐつゝ、一日二日とせしほとに、けふ三七日になると、おほゆると、いきのしたより申せしか、はや、むなしくやなりつらん。なむ三ほう、とそおほせける。れんせいとのゝ、いてたまひ、としは、いくつはかりの人、ふぜいは、なにと見えて候やらん。ふぜいちいさく、びんのかみ、すこしちゝみて、あしまて、いろしろく候か。いしやうは、なにと候そ、こかねつくりのたちに、かたなを、もたせ給ひて候かと、とひ給へは、おほかた、たつね給ふありさま、すこしもたかはず。百まんきの大しやうといふとも、くらからじ、といふもあへす、かきけすやうに、うせ給ふ。

れんせい、このよし見たてまつり、いそき、しやうるりの、すみかにかへり、かくと申せは、むねうちさはき、いつそや、きちじかけにんと、あひなれしとて、はゝのふけうをかうふりて、二百四十人のねう

ふむりて、二百四十人の女はうたちをもそゑす、めのと一人そへて、ちやうしやのすみか(56オ)より、はるかのをくに、あらぬさまにて、をしこめられしも、かのおさなき人の、ゆへなるに、うきよのならひ、うらめしやと、なみたをなかし、なけかせ給ふ。

れいせん、このよし見たてまつり、ともに、なみたをなかし、申けるは、いかにやきみ、きこしめせ。こゝにて、なけかせ給はんより、かの、すかたをはかり也とも、御らんせは、おとにきこえし、するかのくに、かんはら、たこのうらとかやに、たつねてくたらせ給ふへし。もたへさせ給ふを、見た(56ウ)てまつるさへ、かなしく候。御くたり候はゝ、いつくまても、わらはも御とも、と申せは、しやうるり、なのめならす、よろこひ給ひて、さらは、思ひたゝんとて、いまたならはせたまはぬ、たひのそらに御すかたをやつして、くたりたまふ。

今、はしめの、たひなれは、御あしより、いつるちに、みちのくさはも、ちしほにそみ、なみたを、みちのしるへにて、たとらせ給ひけるほとに、月日にせきもりあらされは、やはきのしゆくと、ふきあけとの(57オ)そのみち、なんしのためには、五日ちと申を、九日にこそ、つき給ひける。

さるほとに、しやうるりこせんは、たこのうらに御つきありて、うらものをちかつけて、いかに申さん、うらのとの、みやこより、あつまへくたる、くわしやか、やまふにふしいたる、しろしめされて候か。

はうたちをも、そへられず、ちやう(28オ)しやのすみかより、はるかのおくを、しばのいほりをむすひつゝ、あらぬさまにて、おはしますか、此よしを、きこしめして、いとゝおもひそ、まさりける。

れんせい、此よしみたてまつりて、申ける。をとにきこへたる、するかのくに、かんばら、たごのうらとかやに、たつねてくたらせ給へ、と申けれは、

しやうるり御せんも、くたらせ給へ、と申けれは、

しやうるり御せんも、なのめならすに、よろこひたまひて、いまたならはぬ、たひのすかたに御身をやつし、くだりけるそ、あはれなる。いまをはしめの、たひなれは、御あしよりも、あゆるちに、みちのくさはも、ちしほにそみ、なみたを、みちのしるべにて、たとらせ給ひけるほとに、月日にせきもりすへされば、やはきのしゆくと、ふきあけの、そのあひた、おとこのためには、五日と申、そのみちを、九日にこそ、つき給ひけれ。

さるほとに、しやうるり御せんは、たこのうらに御つき(28ウ)ありて、うらのものをちかつけて、おほせけるは、いかに、うらのとの、みやこより、あつまへくたる、しやうくわんか、やまふを、わつらいてある

いつくのうらにて候そ。をしへてたへ、ととひ給ふ。こたへていわく、いさゝかしらぬ、申ける。

そののち、しやうるりこせんは、十二ひとへ、めしたる、御こそて(57ウ)を、一かさね、みちゆき人に、とらせ給ひて、かのゆくゑ、とひ給へは、ひめきみの御すかたを、つく〳〵と見たてまつりて、あらおそろしや。此うらへは、けしやうのものゝ、きたれるそとて、あしをはやめて、ゆきけれは、うら人申けるは、このさとのならひにて、ふじのだけより、としに一と、人をとるか、おとこか、女をとらんとては、みめよきおとこかくたり、女人か、おとこをとらんとては、みめよき女人か、くたりけるか、ことしは、なんし(58オ)をとらんとて、たゝいま、女か、くたりたるそとて、うらのものとも、こと〳〵、とうさいへ、にけかくれて、ひと一人もなかりけり。あさましやとも中〳〵に、いふへきやうもなし。さてもあるへき事ならねは、たかきみね、ふかきたに、うしろのはまに、くたりありけれは、その日もほとなく、くれにけり。

こゝやかしこに、たちより給へとも、御やと参らせする人もなし。そのよ、うしろのはまに、きよきまさこをかたし(58ウ)きて、ちとり、かもめともろともに、ねをのみあらそひ給ひける。このうらのならひにてふきくるあらし、はけしくて、なみと、まさこをふきたてゝ、たかきところは、ひきくなり、ひきゝところは、たかく成、さてこそ、ふきよし申は、いつくかやどにて候ぞ。それ、をしゑてたべ、とそおほせける。いさしらす、と申。

そのゝち、しやうるり御せんは、十二一重ゑを、めされたる、御こそてを、かさねて、みちゆき人に、とらせたまひて、かのゆくゑを、とひ給へは、ひめきみの御すかたを、つく〳〵と見たてまつりて、あらおそろしや、此はまへ、けしやうのものか、きたれるそと、あしをはやめて、ゆきけれは、ふきあけのうら人申けるは、此さとのならひにて、ふしのたけ、としに一と、人をとるか、おとこか、おんなをとらんとては、みめよきおとこかくたり、おんなか、おとこをとらんとては、みめよきおんなか、くだりけるが、ことくに、なんしをとらんとて、たゝいま、おんなか、きたれるそとて、うらのものども、こと〳〵く、とうさいに、にげかくれ、人一(29オ)にんもなかりけり。あさましやともなか〳〵に、いふべきやうも、なかりけり。さてしもあらぬ事なれば、たかきみね、ふかきたに、のこるところもなかりけり。うしろのはまに、おさがりあれは、その日もほとなく、くれにけり。

こゝやかしこに、たとり給へと、御やどまいらせける人もなし。その夜は、うしろのはまへに、きよきまさこをかたしきて、ちとり、かもめともろともに、ねをのみあらそひ給ひけり。此うらのならひにて、ふきくるあらし、はけしくて、なみに、まさこをふきたてゝ、たかきところは、たかくなる。さてこそ、ふきあけのうらとは申けれ。いた

あけとは申けれ。いたはしや、ひめきみ、れいせんとのと、たゝ二人、十二ひとへの、御つまを、よせくるなみに、ぬらしつゝ、なみたとともに、なきゐつゝ、あかさせ給ふそ、あはれなる。」(59オ)

十二たん

よもしんかうに、なりぬれは、けんしのうちかみ、正八まんは、よにもあはれと、おほしめし、十四五はかりの、とうしとけんし給ひつゝ、うしろのはまに、御いて有。しやうるりこせんの御ありさまを、御らんして、なみたをおさへて、のたまひけるは、いかにや、なんちかたつぬる、くわしやは、このはまのうしろなる、六ほんまつのもとにいたされてゐたりしか、はや、むなしくや成」(59ウ)つらん。むらからすさわきしか、きのふけふとは、いさしらすとて、ひめきみの、たもとをひかへて、をしへ給ひしか、かきけすやうに、うせ給ふ。

しやうるりこせんは、ゆめのこゝちして、うれしさ、かきりもましまさす。ふたりの人は、うしろのはまの、まつはらを、こゝやかしこと、たつね給へは、いたはしや、御さうし、あらきはまへの、しほかせに、つかのことくに、ふきあけたる、まさこのしたに、うつもれ給ふ。すはしや、ひめきみは、れんせいとのと、たゝ二人、十二ひとゑの、御つまを、よせくるなみに、ぬらしつゝ、なみたとともに、なきあかさせたまひけり。

十二段」(29ウ)

夜もしんかうに、ふけゆけは、けんじのうちかみ、しやう八まんは、よにもあわれと、おほしめし、十四五はかりの、どうじとけんし給ひつゝ、うしろのはまべに、御いてあり。しやうるりこせんの御ありさまを、御らんじて、なみたをおさへて、のたまひけるは、いかに、なんぢがたつぬる、くわしやは、此はまべのうしろ、六ほんおひたる、まつのもとに、いだされていたりしが、はや、むなしくやなりつらん。むらからすの、さわきしが、きのふけふは、いさしらす。いさゝせ給へ、ひめきみとて、しやうるり御せんの、御たもとをひかへて、をしへ給ひしか、かきけすやうにうせ給ふ。」(30オ)

〔絵　第九図〕〈下半分〉

しやうるり御せんは、ゆめさめて、いかなるかみの御つけぞと、うれしさ、かきりましまさす。夜もほの〳〵と、あけぬれは、二人たちいてゝ、うしろのはまの、まはりを、こゝやかし」(30ウ)

〔絵　第十図〕〈下半分〉

かたも、見え」(60オ)たまはす。

こゝに、まさこの中よりも、こかねつくりの御はかせの、いしつき、すこし見えたりける。しやうるりこせんは、これをたのみに、おほしめし、れんせいとのと、たゝふたり、かいてのやうなる御てにて、なく〳〵まさこを、ほり給ふ。まさこのなかよりも、をけと、ひしやくを、ほりいたす。

いよ〳〵、これにちからをえて、なを〳〵ほりて、み給へは、さもあさましき、すかたなる、御さうしを、ひきいたし給ひける。」(60ウ)うつくしかりける御すかた、しほめる花の、ことくにて、見るに、なみたも、とゝまらす。うつもれたるまさこを、きぬのつまにて、うちはらひ、ひさに、かきのせたてまつり、てんにあふき、ちにふして、かなしみ給ふ御ありさま、あはれといふも、をろかなり。

いかにさふらふ、みやこのとの、ふえたけにはあらねとも、一よのちきりに、なれそめし、しやうるり、これまて参りたり。心さしを、うけたま候はゝ、今一と、よみかへらせ給へ」(61オ)とて、むねにあて、りうていこかれ給ひとも、そのかい、さらになかりけり。

こと、たつねたまへは、いたはしや、御さうし、あらきはまべの、しほ風、つかのことくに、ふきあげたる、まさこのしたにそ、うつもれ給ふ。すかたかたち、見えたまはす。

こゝに、まさごのなかよりも、こかねつくりの御はかせの、いしづき、すこし見えたり。しやうるり、此よしなのめに、おほしめし、れんせい」(31オ)

〔絵　第十一図〕〈上部本文〉

とのと、たゝ二人、かやてのやうなる御てにて、なく〳〵まさごを、ほり給へは、いたはしや、まさごの中より、おけと、ひしやくを、ほりいたす。

いよ〳〵これにちからをへて、なを〳〵ほりて、見給へは」(31ウ)あさましき、すかたなり。御さうしを、とりいたし給ひける。いつくしかりける御すかた、しぼめる花の、ことくにて、見るに、なみたも、とゝまらず。うつもれたるまさこを、きぬのつまにて、うちはらひ、御ひさに、かきのせたてまつり、てんにあをき、ちにふし、かなしみたまふ御ありさま、あわれといふも、おろかなり。

いかにや、みやこのとの、一夜のちきりに、なれそめて、しやうるり、これまてまいりたり。こゝろさしを、うけ給ひ候はゝ、いま一たひ、よみかへられ給へとて、むねにあて、かほにあて、りうていこかれ給へとも、そのかい、さらになかりけり。

ひめきみは、あまりのことのかなしさに、しほみつにて、てうつ、うかいして、天にあふき、ねかはくは、にほんこく、六十六かこく、大小の御かみ、そのほかのしよしん、しよふつ、あいみんなうしう、たれ給ひて、たとひ、くわしや、ちやうこうなりとも、いま一たひ、へんしの間、このよへ、かへし給へと、かんたんをくたき、いのり給へは、まことに、しよしん、しよ」(61ウ)ふつの御はからひにや、しやうるりこせんの、なみた、御さうしの、くちのうちへなかれ入、ふらうふしの、くすりとなり、すこし、いきいてたまひけり。

しやうるりこせん、是にちからをえ、ところ〳〵へ、しゆくくはん申されける。まつ、いつのくに、そうたんけん、みしまの、さんたう大みやうしん、御あはれみをたれ給ふならは、やはきのちやうしや、わらはなり。しつちまんほう、あまたかすをつくして参らせ、まつ一はん、こん」(62オ)しのにしきの、御とちやう、六十六おらせ、八しやのかけおひ三百三十三すち、五しやくのかつら三百三十三、八つはなかたの、からのかゝみ三百三十おもて、十二のてはこにそへて、参らすへし。まはきのそや百や、そろへて、いかきいわせて参らすへし。うのはなおとしのよろい三十三りやう、四はうしろのかふと卅三、あけのいとにて、かみまきたてゝ、むまのけそろへて卅三ひき、ひかせて参らすへしと、ふかく」(62ウ)きせいを申されけれは、しよしんもあはれとおほしめし、いつくよりともしらす、十六人の山ふし、とをりあはれ給ひて、

ひめきみは、あまりのかなしさに、うしほにて、てうつをつかい、あをき、ねかはくは、につぽんこく、六十六かこくの、大小の御かみ、そのほかしよぢん、しよぶつ、あひみんなふでう、たれ」(32オ)給ひ、たとひ、このくわしや、ぢやうごうなりとも、いま一ど、へんしのあひたなりとも、この世に、かへし給へと、かんたんをくたき、いのり給へは、まことに、しよじん、しよぶつの御はからひにや、じやうるり御ぜんの、なかせさせ給ふなみた、御さうしの、くちのうちへなかれいり、ふらうふしの、くすりとなり、すこし、いきいてたまひけり。

しやうるり御せんは、これにたのみをかけ給ひて、ところ〳〵ゑ、しゆくくわん申されけり。いつのくにゝは、そうさんごんげん、三しまは、さんとう大みやうじん、御あわれみをたれたまへ。このとのを、いま一ど、よみかへらせ給ふものならば、やはきにもちたる、七つのたからを、一つゝ、しだい〳〵に、まいらすべし。さてまた、こんぢのにしきの、御とちやう六十六おらせ」(32ウ)八しやくのかけおひ三びやく三十三をりて、十二のてばこそへて、まいらすべし。いかきを、まばのそやももや、そろへて、ゐかきをいわせてまいらすべし。しろかねつくりのたち百ふり、そろゑて、とりいをたててまいらすべし。うの花おとしのよろい三ひやく三十三りやう、しほうしろのかぶと三十三はね、あけのいとにて、かみまきて候、むまのけそろへ三十三ひき、ひかせまいらすへしと、ふかくきせいを申されければ、しよじんもあ

いささらは、われ〳〵か、きやうりきのとく、あらはさんとて、さま〳〵にかちしたまひ、かきけすやうにうせ給ふ。

そのゝち、御さうしは、ほとなく、いきいてたまひけり。

しやうるりこせんは、なのめに、よろこひて、れいせんとのと、二人かなかに、をきたてまつり、ないつ、わらふつ、このほとの、心つくし」(63オ)のありさまを、かたり給へは、御さうしは、ゆめのさめたるこゝちして、さもやつれたる御そてを、しほらせ給ふこそ、あはれなる。さるほとに、御さうしをひきくして、はるかのおくに、しはのいほりの、それとなくけふりのたつを、しるへにて、たちよらせ給ひて、一よのやとをそかり給ふ。うちより、八十はかりの女はう、一人たちいてゝ、こはいかに、ひめこせん、いつくよりいつくへ、とをらせたまふそよ。かく申身つからも、はたちに」(63ウ)たらぬ、こを一人もちて候か、このほと、せけんにはやり候かせにさそはれて、けふ七日になりさふらふ。たひは、なにかくるしかるへき。いやしきしつかふせやにて候へとも、こなたへ入せ給へとて、一やのやとをたてまつる。しやうるり御せんは、てをあはせ、ありかたのことや、是はまさしくはゝこせんの、身つからを申させ給ひたる、やくしによらいのけしんかと、いわれとおほしめし、いつくともしらぬ、十六人のやまぶし、とをりあわせ給ひて、いさ〳〵われらが、ぎやうりきのきどく、あらはさんと、さま〳〵にかちして、かきけすやうにうせにけり。」(33オ)

〔絵　第十二図〕」(33ウ)

〔絵　第十三図〕」(34オ)

そのゝち、御さうしは、ほとなく、いきいたし給ひけり。

しやうるり御せんは、なのめならす、よろこひて、れんせひとのと、ふたりの中に、とりこめて、なひつ、わらふつ、此ほとの、こゝろつくしのありさまを、かたり給へは、御さうしは、ゆめのさめたるこゝちして、さもやつれたる御そてを、しほらせ給ふそ、あはれなる。さるほとに、ひめきみは、御さうしをひきくして、はるかのおくに、しばのいほりを、それとなくけふりたつたを、しるべにて、たちよらせ給ひ、一夜のやとをそかりたまふ。うちより、八しゆんはかりのにこう、一人たちいて、こはいかなるひめきみ、いづくよりいづくへ、とをらせ給ふそよ。かく申身つからも、はたちにあまる、こを一人、此ほとせけんにはやる、やまうを、わつらい、むじやうのかせに」(34ウ)

よ〳〵うれしくおもはれけり。ひめきみ、あまりのうれしさに、はたの|(64オ)まほりより、こかね十りやう、とりいたし、やとの女はうにそ、たひにける。女はう、なのめに、よろこひて、いよ〳〵かしつき申ける。

御さうしを、此やとにて、廿日はかりかんひやうし、よきにいたはり給ひける。ほとなく、もとの御さうかうに、ならせ給ひけるそ、うれしける。

さる程に、御さうしおほせけるやうは、さても、此度の御なさけ、たとへんかたも、さらになし。山ならは、しゆせんのいたゝきも、なをひきし、うみならは、さうかいも|(64ウ)なをあさし。きみにはなれ参らせ、へんしの間も、なからへへしとは、おもはねとも、かくてもさらに、かなふまし。きみ、是よりやはきへ御かへり候へ。くわしやは、これより、あつまのをくへ、くたりぬへし。

さる程に、御さうしは、しやうるりこせんの御心さし、あまりに、せつなうおほしめし、こゝにて、なのらはやとは、おもへとも、とやあらん、かくやあらんと、ちたひもゝたひ心に心を、うかゝい給ふ。ちうに心をひきかへて、是|(65オ)ひとへに、みれんしこくのわか身かな、もしよにもれきこえ、あすはなにともならは、なのらはやとおほしめし、さても〳〵きみ、きこしめせ、われをは、たれとおほしめす。御心さしの、ありかたさに、たゝ今なのり申なり。よしともに八人めなり。

さるほとに、御さうしおほせけるは、さても、此たひの御なさけ、たとえんかたも、さらになし。山ならば、しゆみせんのいたゝきも、なをひきく、うみならは、さうかいも、なをあさし。きみにはなれまいらせて、へんしのあひたも、なからうへしとは、おもはねと、かくてもさらに、かなふまし。きみは、これよりやはきえ御かへりあれ。くわしやは、これより、あつまのおくえくたるべし。

さるほとに、御さうしは、しやうるり御せんの心さし、あまりに、たひせつにおほしめし、こゝにて、なのらはやと、おもへとも、とやあらん、かくやあらんと、ちたびもゝたひ、こゝろをうかかひたまふか、ちうにこゝろをひきかへて、これは、ひとへに、みれんしこくのわか身かなと、もしよにもれきこへ、あすはなにとも、ならはなれ。なのらはやとおほしめし、さてもきみ、をは、いかなるものとか、おほしめす。御こゝろ|(35オ)さしの、ありかたさに、たゝいまなのり申なり。よ

ときははらには三なん、うしわかまると申なり。しかるところに、七さいのときより、くらまのてらにのほり、とうくわうはうにて、かくもんしか、此ほと、けんふく」(65ウ)つかまつり、けみやうをは、みなもとのけん九郎、しちみやうをは、よしつねとて、しやうねん十五にまかりなる。かねうりきちしをたのみ、おくへくたり候なり。

もしもなからへてさふらはゝ、みやうねんの、今のころ、かならすまかりのほり、御めにかゝり申へしとて、御なみた、せきあへさせたまはす、せめては、かたみに御らんし候へとて、こんていの、くわんをんきやうに、一しゆのうたをそあそはしそへて、たてま」(66オ)つる。

うつりかをめくりあふせのかたみには
君わするなよわれもわすれし

しやうるり、此よしきこしめし、御なみたのひまより、かくはかり、

あふ事もわかるゝ事もゆめのよに
かさねてつらきそてのうつりか

かやうにあそはして、こかねのかうかい、とりいたし、御さうしにたてまつる。しやうるりこせんは、是よりあとへのみちも、さらにおほえす、いかなるのゝすゑ、山のおくま」(66ウ)ても、御ともとこそ、したはれける。

御さうし、きこしめし、それかしも、こそ、そんし候へ共、それ、にほんは六十六かこくにて候。是みな、へいけのよにて候。せめては、しともには八なん、ときははらには三なん、うしわかと申ものにて候。七さいのとしよりも、くらまのてらにのほり、とうくわうはうにて、かくもんし、此ほと、げんぶくつかまつり、けみやうは、みなもとのげん九ら、じつみやうは、よしつねとて、しやうねん十五にまかりなるが、かねうりきちじをたのみて、おくゑくたり参る。

もしなからへて候はゝ、みやうねんの、けふ此ころ、かならすまかりのぼり、御めにかゝり候べしとて、御なみた、せきあへす、せめてのかたみに、これを御らんし候へよとて、こんでいの、くわんきやうに、一しゆのうたをあそばしそへて、しやうるり御ぜんにたてまつる。

うつりかをめくりあふせのかたみにて
きみもわするなわれもわすれし」(35ウ)

しやうるり、此よしきこしめし、

あふ事もわかるゝこともゆめのよに
かさねてつらきそてのうつりか

かやうにあそはして、こかねのかうがひを、とりいたし、御さうしにかす〳〵たてまつる。身つからも、いかなるのゝすへ、山のおくなりとも、御ともとこそ、したわれけれ。

御さうしは、きこしめし、なにかしも、さこそは、そんし候へとも↙

六かこくか、けんしのよにてもあらはこそ、ろく十六かこくの、さうもくまても、へいけにこそなひき候へ。われらかすみかは、ふかきみや、いはのほらにて候へとよ。

しやうるり、此よしきこしめし、きみのすみかてましまさは、れう、たつ、さう、とらふす、のへなり」(67オ)とも、花のみやこには、まさるへし。あくかれ給ふそ、あはれなる。

御さうし、きこしめし、われはこれより、おくにくたり、よしつねか、せんそんのらうとう、ひてひらをたのみ、八十万きの、そのせいを、たなひき、みやこへしやうらくつかまつり、おこるへいけを、ついたうし、にほんを、わかまゝとして、やはきのしゆく、六万貫のところを、きみに参らすへし。

御なこりは、たれもおなし事なれとも、あたこ、ひらのゝ、大てんく」(67ウ)小てんくを、ちかつけて、おほせけれは、

大てんく、うけたまはり、やすきほとの事と、いひもあへす、むちを一うつとおもへは、九日にくたるみちを、へんしか程にそ、やはきのしゆくにそ、つき給ふ。

かくて御さうしは、ふきあけを御たちありて、あし⇓まんぎの、そのせひを、たなびきて、みやこへしやうらくつかまつり、おこるへいけを、ついたうして、にほんを、わかまゝにして、やはきのしゆく、六まんくわんのところを、きみにまいらすべし。

御なこりは、おなし事なれともとて、あたこ、ひらのゝ、大てんぐに小てんぐを、ちかつけて、おほせけるは、いかにめん〳〵、きゝ給へ。此ふたりの人を、やはぎがしゆく」(36オ)ゑ、おくりとゝけてたひ給へ、とおほせけれは、大てんぐ、やすきあひたの御事と、いひもはてず、むちをひとつ、うつとおもへば、九日にくたりつるみちを、やはぎのしゆくゑ、へんしのうちにそ、つきたまふ。

かくて御さうし、ふきあげを御たちあつて、あし＊

↙それ、にほん六十六かこくにて候か、六十くにか、へひけの世にて、せめて、六くにか、げんじの世にてもあらばこそ、六十六かこくは、

さうもくまて、へひけの世にこそ、なびき候へ。われらがすみかは、ふかきたに、みや、いはのほら、人かけとをき、もりのしたこそ、つゆのやとりにて候へ。

しやうるり、此よしきこしめし、きみのすみかてましまさば、りう、たつ、さる、とらふすのべ、くしらのよりくる、しまなりとも、花のみやこにまさるべく候、とあくかれ給ふそ、あはれなる。

御さうしは、きこしめし、かくてはかなふ」まし。（36ウ）いさめはや、とおほしめし、われは、これより、おくに、よしつねかせんそのらうとう、ひでひらをたのみ、八十⇓

＊から山にさしかゝり、いつは、そうさうこんけん、みしまは、さんとう大みやうしん、こゝろしつかに、ふしおかみ、おほひそ、こひそ、まさりかわ、にけ松、おひまつ、さかり松、かたせかわをうちわたり、すみたかはをば、ゑんしよとて、あをきの松はらに、さしかゝり、花はさかねど、さくらがわ、身にはきねとも、ころもかわ、おほくのめいしよを、うちすきて、わうしやうにきこえたる、いわひのこほり、ひらいづみ、ひでひらかたちにそ、つきたまふ。」（37オ）

（白　紙）」（37ウ）

から山にさしかゝり、いつは、そうたうこんけん、みしまは、さんたう大明神、心しつかに、ふしおかみ、おゝひそ、こい、まりこ川、にけまつ、おひまつ、さかりまつ、かたをかい、うちわ」（68オ）たり、すみた川を、ゑんしよとて、あをきのまつはらにかゝり、はなはさかねと、さくら川、身にはきねとも、ころも川、おほくのめいしよを、うちすきて、わうしうにきこえたる、いはひのこほり、ひらいつみ、ひてひらかたちにそ、つき給ふ。」（68ウ）

古活字版系写本〔浄瑠璃〕二種について

はじめに

ここに影印で複製紹介する奈良絵本〔浄瑠璃〕（仮題）は、関川亨氏所蔵本であり、今回初めてその全容を紹介するものである。残念なことに、本書は零本であってその上巻に当る部分を欠く。しかしながら後に説くごとく、この書の価値はすこぶる高いものがあり、是非これを江湖に広く紹介したくお願いしたところ、幸いに関川氏の御快諾を得、その翻刻をも加え、ここに収載することになった。

なお、翻刻部に本書と同系の、より近接した本文を有する北海道大学附属図書館所蔵「ちやうるり」をも併せて掲出した。昭和五十二年収載許可を申請し、九月二十一日付で許可を頂いた時点ではこの書もまた未翻刻の書であったが、『室町時代物語大成』第七に昭和五十四年二月に紹介され、周知の書となった。この種の本文の上巻分内容を知る上でも、また本文対照の意味からも必要と考え、敢えて両書を掲出させていただく。各御所蔵者の御許可を頂きながら荏苒今日まで遅延したことを、深くお詫びをする次第である。

一　二写本の書誌

両書の書誌はつぎのごとくである。

〔浄瑠璃〕　関川亨氏蔵奈良絵本

写本、大形本一冊。（零本、上巻欠）。竪三二糎、横二三・七糎。

表紙、原装ヵ、薄茶色、上下に約二糎巾の水色の帯がある。

見返、白色。

題簽、なし。

紙質、鳥の子紙（表紙も共紙）。

本文、十二行。竪二五・七糎、横一九・二糎、一・五糎巾十二行の罫を骨筆で引く。

丁数、三十七丁半（但し、本書は袋綴であるが、中に絵の部分を半丁分切り取った箇所が数ケ所あり、その箇所をも一丁として数えている。切り取り部については、後に詳述する）。

画図、二十二オ・二十二ウ・二十三オ・二十三ウ（四図連続）。二十五オ。二十六オ・二十六ウ・二十七オ（連続図）。三十ウ・三十一オ・三十一ウ（連続図）。三十三ウ・三十四オ。計十三図。

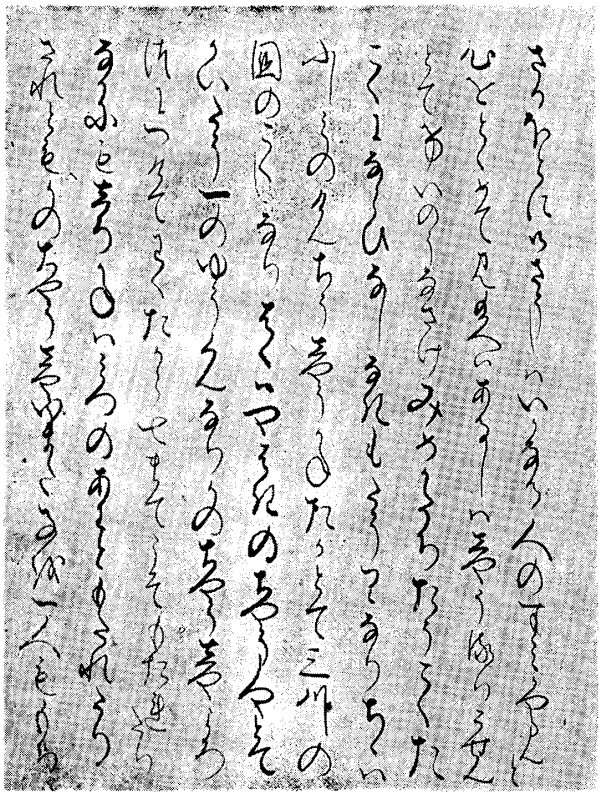
段数、六段……十二段。六段分。（本文中に各段の段数は記されているが、八段のみ上方に記す。記し忘れての所為であろう）。

印記、表紙右下に「野島／蔵書」の方形朱印がある。

備考、表紙の上下の水色帯と同じものが、二丁ウの本文上下、二十二丁オ・二十三丁ウの画図の上下などにもある。なお、これと同様の用紙を、ニューヨーク公立図書館スペンサーコレクション『いわやの草紙』二冊本の上巻初丁に見た。因みにその書にも、「野島／蔵書」の印記を見る。なお、天理図書館蔵奈良絵本『しやうるり御前物語』の表紙にも同印記がある。

本書の筆写年代は、桃山期から江戸ごく初期にかけての筆写と考えられ、寛永期を下ることはあるまい。七段冒頭の一丁半の手が一見異なって見えるが、筆癖は同一人物と思われる。十九丁ウから二十丁オ・二十丁ウを見れば、時間的間隔をおいて書いた結果と知り得るであろう。

本書には乱丁、落丁があるが、写真複製では乱丁部を正し、途中の落丁部には白紙を一丁分添えて原形に近い形になるよう留意した。したがって、複製の丁付は、その乱丁を正した後の私に付した丁付である。



北大本初丁

ちやうるり　北海道大学附属図書館蔵

写本、大形本一冊。竪二七・三糎、横二〇・一糎。

表紙、茶色地、雷紋つなぎに牡丹模様空押し（裏表紙は別の白紙）。

見返、白色。

題簽、中央に、朱色無地の紙に「ちやうるり」と記す。

紙質、やや厚手の楮紙（末部に一部裏打がなされている）。

本文、十行。

丁数、六十八丁。

画図、なし。

段数、二たん……十二たん。初段は、内題「ちやうるり」とあるだ

けで記されていない。

備考、巻末に「小野氏通女筆　さるほとに　回」と短冊形の極め札を貼る。本書の筆写年代については、近世初期とするほか目下のところ決め手をもたない。

二　関川本の画図をめぐって

本書は六段以降の、下巻分に相当する零本であるが、この書の前半部九段までには画図はなく、十段目より現われてくる。しかし、これは本来各段に挿まれていた画図を、本書の場合前半部のみ切り取った所為であって、そのことは袋綴の半葉部を随所に残し、その箇所が決って絵の存した箇所と推定されることからも推察される。それら切り取り箇所をも含めて考察するならば、本書の絵の配置は以下のとおりである。

一オ白紙の位置、半丁切り取り。ここに本来絵があったか。ただし、不審な点はその裏の九行分の空白であって、初め書き損じの用紙を表紙の中芯にでも使ったものかと考えたが、後の箇所（五ウ、二十七ウ）などでも同様の現象が見られ、かつまた、文章が数行分の脱落を経て、次につながっており、中芯などではないと思われる。そこで、そこに絵があったのを半丁切り取ったものか、或いは絵を後で入れようとして半丁分と次の一ウの九行分の空白をとっておいたものか、のいずれかと考えられる。後者の考え方の場合、その白紙部を何らかの理由で切り取ったということになる。

二オ白紙の位置、半丁切り取り。このところに一図があったことはまず確実といえる。そこには本文数行があった。それが欠けているからである。さらに言えば、その絵には二十二オからの連続図と同様、すやり霞同様の効果を狙ったものであろうが上下に水色の帯があった筈である。その装飾性がその裏の本文にまで及んだものと思われる。

五オ白紙の位置、半丁切り取り。ここも二オの箇所と同様、絵か白紙があった筈で、この場合ももし後者だとすると絵に半丁と六行分の空白を見込んでいたもようである。そうして、ここでは水色帯を上部だけにほどこそうとしていたことが、五ウの界線（細い界線だけが上にある）により推察される。一オの場合も、またここの場合でも言えることであるが、初め絵を表と裏の数行分に及ぼそうとし、結局表だけに描き、裏が空白のままになったということも考えられる。それは二十七ウのごとき例もあるからである。こうした奇妙な空間の取り方がなされた理由は、この種初期奈良絵本にみられる、絵巻の絵を草子にかなり忠実にうつそうとする意識のあらわれであろう。本書にみられる行列図の連続図、二十六オ・二十六ウ図の、表裏になっても連続図を描こうとする姿勢などにも、そのことが十分うかがえよう。

十八オ白紙の位置、半丁切り取り。原本乱丁があるが、正した上でみると、ここに絵が半丁分あり、それを切り取ったもので、本文はつながっているだけに、絵だけのものであったことを知る。

二十一オ白紙の位置と二十一ウ白紙の位置、半丁切り取りが共にあったと思われる。袋綴一丁の紙の折れ目が切れたとも考えられないことはないが、虫損部の様子などから切り取りと推定される。しかし、その間に一丁の絵があったとすると、その前後（オ・ウ）が白紙だったということになり面妖である。

二十二オ〜二十三ウ、二丁分連続の行列図。ここから絵が残っている。原図を描いた後、その上の空白部に本文を書している。上下に水色の帯をすやり霞的に用いていることは前述した。絵巻系画図でも、吉次・吉内・吉六三人の馬上姿と多くの荷駄人足の図を描き、大凡同趣の図柄である。

二十五オ、片面図。吉次が黄金十両を宿の亭主（左方）に渡し、介抱を頼む図。近世的風俗に全てが描かれている。

二十六オ・二十六ウ、下半分画図。太刀・刀が大蛇・小蛇と化して盗人を追い払う連続図であるが、表裏に分れて見開き図を形成しない。絵は単純であるがきわめて雅趣がある。

二十七オ、片面図。右の二十六ウ図と見開きの連続図となっているが、異場面。時間的経過があり、源氏氏神正八幡が客僧と現じ、御曹司の枕もとに立ち、伝言を聞く場面。二十七ウの初め五行分は、二十七オのごとく上半分に書し、六行目から普通に上下使って記しており、少しく空白部がある。ここに表からの連続図を描こうとしていたのかどうか、その意図は明らかではない。三十ウからの図の展開のように、異場面をも含みながら、図を連続させようとする意識がみてとれ、絵巻的効果をも冊子形の中で表わそうと努めているもののごとくである。

三十ウ。三十一オ・三十一ウと共に三異場面の連続図を形成する。この図は絵巻系諸本と古活字版系の諸本の本文通り、正八幡が十四五の童子と現じて浄瑠璃御前に御曹司のありかを示す場面。この図で注目すべきは、前にも触れておいた空白部の意味について、示唆されるところがあることである。すなわち、三十オで神が示現し、かき消すように失せたと文章が終り、その情景を示すこの図が描かれる。空間からいえば、最初の行から本文書写は可能である筈であるが、六行分の空白をおいてそのあと、浄瑠璃御前の夢醒めた話を書き始めている。つまり、この本文の書写者は、空白部に時間的経過などの気を感得せしめようとする配慮を行っているものと考えられ、余韻余情を絵と書の間に形象しようとする意図のあったことが推察される。本文書写者が絵の入るところを予想して空けておいたか、絵の描かれた後に書いたかという問題があるが、ここの例や三十一ウ図の松林の間の散らし

書きの例などからすれば前の場合は考えにくいように思われる。これより前の空白部の意味も、全てがそうとは言えないであろうが、その視点からも見るべきものがあるやも知れない。

三十一オ。三十ウ図と見開き図をなすが、異場面である。しかし、右図に時間的に連続し、その童子の教えで砂を掘り、太刀を見出し共によろこぶ場面。

三十一ウ。右図と同様、異場面ではあるが、右の経過と直ちに連続し、さらに掘り進んで桶と柄杓を見つけ、いよいよ力を得てなお掘りに掘る二人の動作が、背景の松林に映えて美しく描かれる。このようにこの本の作り手は、冊子形態の中でこれまた懸命に絵巻的効果を発揮すべく、工夫と努力を重ねていることを知り、まことに興味深いものがある。この展開の密度は本書独特のもので、絵巻系諸本や画図のある他本にも見ることの出来ない傾向である。

三十三ウ・三十四オ見開図。十六人の山伏による祈禱のところ。彼等神変の人達が、三人に比しとりわけ大きく描かれている点おもしろい。

三十四ウの次、一丁分落丁がある模様（補足白紙部）。このところ見開き図があったと思われる。それの形は、上段に本文が、下段に絵のある形態であった筈である。二百数十字分の本文の脱落がみえ、前のこの形態の箇所の例からみて、左右の頁にまたがって上部に本文のあったことを推量させる。この箇所は、他本や古活字版系にもある近くの尼公の庵室で御曹司を介抱する図柄の絵であったと思われるが、この部分の二葉が切り取られたものであろう。

三十七ウ白紙の位置、半丁切り取りがあるが絵の有無は不明。

関川本の画図は、同じ部分を他本（絵巻系・斑山文庫旧蔵本・古活字版）などと比較した場合、一番に図の数が多く、場面に即した細かい描写がなされている点に特色がある。各本それぞれに画図に入り組みがあり、各本間の直接関係をみるのは目下のところ困難である。絵巻系に拠ったとも簡単には言えない。

なお、関川本の三十ウ～三十一ウあたりの、繊細華麗の専門画家によることが明白な画風のものと、二十一ウ～二十三ウの粗雑な描線との間には隔たりが感じられる。樹木の緑青のあたりにも、後人の加筆の跡がうかがえ、他筆の混在または後人の改変等の可能性のあることを付記しておく。

三　古活字版系諸本の本文関係について

ここに掲げた二写本は、斑山文庫旧蔵絵巻ともども古活字版系に属する本文系統の書である。すなわち、従来より知られている古活字版

十行本三種と本文の系統は同じで、その古活字版より直接間接に転写されていった多くの写本を含めて、古活字版系本文を形成している。

この系統内における、これら諸本の関係についてみてみよう。その前に斑山文庫旧蔵絵巻についてふれておきたい。この書も従来知られていない一本であるからである。古活字版の本文でいえば、十段目途中、「こかうのてんもすきゆけは…」からはじまり、巻末も数行分を欠く零本で、画図を七図残す一巻の絵巻である。旧蔵者高野辰之氏はその識語で、「文ハ流布本ト大差ナキモノヽ如クナレド此ノ方古体ヲ存セリ…」と記されている。この書を初め見た時、僅かの本文であったため古活字版（高野氏の言う流布本）との関係を押さえ得なかったが、今日現在関川本・北大本とこの書と同種の古写本を知るに及んで、これら三種が古活字版系諸本のうち一連の古形を残す書であることが判明してきた。よって、この書も交え、関川本・北大本・斑山本・古活字版の四者の関係を扱ってみたい。古活字版に三種、その後のその本文を襲った多くの諸本があるが、これらの間では、本文異同はきわめて少く、古活字版と同種とみなしてよいからである。

この系四種の関係を結論づけるならば、それぞれが異種で、祖本より別に分岐したものと言わざるを得ない。四者それぞれが本文に入り組みをみせているからである。しかし、その間でもより近い本文を持つものがあり、大きくみて次の二つの組み合せに分けられる。北大本と斑山本、関川本と古活字版がそれである。その校異表を掲げてみてみよう。

北	ゆめのこゝちして、	ナ　シ	うれしさかきり
斑	ゆめの心ちして、	ナ　シ	うれしさかきり
関	ゆめ　さめて、いかなるかみの御つけぞと、		うれしさかきり
古	ゆめ　させて、いかなる神の御つけそと、		うれしさかきり
北	もましまさす、	ナ　シ	ふたりの人は・・
斑	もましまさす、	ナ　シ	ふたりの人は・・
関	・ましまさす、夜もほの〳〵とあけぬれは、二人・・・たち		
古	もましまさす、夜もほの〳〵とあけけれは、二人の人はたち		
北	・・・うしろ		
斑	・・・うしろ		
関	いてゝ、うしろ		
古	いてゝ、うしろ		

このように、二本ずつの組み合せで、互に対応している例が多い。したがって強いて分ければ、四者は二組の親縁関係の書として分けれるのであるが、しかし単純にはそうとばかり言えない面がある。次の例のように、北大本と関川本、斑山本と古活字版の類似した関係をも

見出すことが出来るからである。

北　参　りたり、　ナ　シ
斑　まいりたり、いかなるちやうくうにて、ましますとも、みつから
関　まいりたり、　ナ　シ
古　参　りたり、いかなるしやうこうにて、ましますとも、身つから

北　ナ　シ　心さし　を、うけたま候はゝ
斑　これまてまいりたる、こゝろさし　を、うけ給り候いて
関　ナ　シ　こゝろさし　を、うけ給ひ候はゝ
古　是　まてまいりたる、心さし　のほとを、うけ給　ひて

そうしてこれらの関係がからみ合って出る箇所を示せば次のとおりである。

北　御さうしに、・・・・　たてまつる、しやうるりこせんは、
斑　御さうしに、・・・・これをたてまつりて
関　御さうしに、かす〳〵　たてまつる、
古　御さうしに、数〳〵これをたてまつる、

北　是よりあとへのみちもさらにおほえす、・
斑　あまりのかなしさに、　あとへのみちもさらにおほえす、・
関　ナ　シ　身
古　あまりのかなしさに、　あとへのみちもさらにおほへす、み

北　・・・・　いかなる
斑　・・・・　いかなる
関　つからも、いかなる
古　つからも、いかなる

「かす〳〵」や「身つからも」といったあたりの有無に、最初の北大本と斑山本、関川本と古活字版の相互親縁関係がたどれるが、「あまりのかなしさに」の有無から、北大本と関川本、斑山本と古活字版の親縁関係も同様たどることができる。この箇所で、北大本にのみ見られる表現（圏点の箇所）二箇所や、関川本にのみ欠けている箇所なども見てとれよう。すなわち、各本にそれぞれ独自の表現を具有するものがあり、またその本のみ脱文の箇所も少なからずある。後の場合は誤写や意識的省略、依拠本の欠落といった種々の理由によるものであろう。

このうち独自の行文をもっとも多く持つ本文は、北大本である。この書はまた脱文誤写もすくなからずあるが、非常に重要な本文を、現存『浄瑠璃』中この本のみ有していて注目される。

浄瑠璃姫と御曹司が遂に結ばれ、後朝の別れの刻が来る。折柄鳴く鶯を見て別れの歌を互いに唱和する場面がある。それが諸本すこぶる

異同が多い。

山崎美成旧蔵写本と奈良絵本の場合は、

（浄瑠璃）あすまてといふにとまらぬ花のひと〈なれは〉
おしみてそなくうくひすのこゑ〈をしみかねてそなくはうくひす〉
（御曹司）いとゝさへはなちるさとのものうきに〈たに〉〈はさひしきに〉
おしみてなくかけさのうくひす〈なにをなくらん〉〈はる〉　〈　〉奈良絵本

とある、その唱和が、赤木甲絵巻と熱海本の場合、

（御曹司）いとゝしくはなちるさとのものうきに〈たに〉〈さひしきに〉
なにをなくらんけさのうくひす〈したふてなくそ〉
（浄瑠璃）あすまてといふにとまらぬはなゝれは〈とむるに〉
おしみかねつゝなくはうくひす〈とるをおしみてなくそ〉　〈　〉熱海本

というように詠者の順序が変っているが、これではただ前後しただけといえよう。ところが古活字版や前島本古活字版（関川本も）では、御曹司が別の歌を詠じ、右の諸本では御曹司の歌であるものが、浄瑠璃の返歌に転じてしまっている。

（御曹司）わかれゆくおもひをとふか此やとの
花をおしみてなくかうくひす〈は〉
（浄瑠璃）いとゝしくはなちるさとは物うきに〈とのものうさに〉
よをうくひすのさのみなくらん〈き〉　〈　〉前島本

こうした異同の生じた原因は、北大本をみるとその理由が判る。

（御曹司）わかれゆくおもひをとふる此やとの
花をおしみてなくかうくひす
（浄瑠璃）君もゆき花もとまらぬ岩なれは
おしみてなくかうくひすのこゑ
（御曹司）いとゝしく花ちる里は物うきに
なにをなけくそにはのうくひす

このように本来御曹司の歌から始まる三首型のものが、山崎本や奈良絵本のように最初の「わかれゆく」の歌を省いたり、関川本や古活字版、前島本のように真中の浄瑠璃の「君もゆき」の歌を省いたりした結果生じた異同であることが判る。後者の場合「いとゝしく」の歌を二人の唱和にするためには浄瑠璃の詠にせざるを得なかったものであろう。前者の場合浄瑠璃が先に詠じる形となり、それを御曹司先行型に変える本（赤木絵巻・熱海本）も生じた。「君もゆき花もとまらぬ岩なれは」という上句が「あすまてといふにとまらぬ花なれは」といった形に変じたものか、北大本も異同を生じているのか、その原形は明らかでないが、共に同根であることは下句に歴然とあらわれている。このごとく古活字版系の一本に『浄瑠璃』の原形をとどめている箇所もあるのである。

古活字版の本文の不備も、これら新出の三種の写本で補うことができる。例えば吹上の段で瀕死の御曹司を砂の中から掘り出した浄瑠璃

が祈誓をかけると十六人の山伏が出現する。そのところの本文が、

いさ〳〵われらか、きやうりきのきとく、あらはさんとて、さま〳〵のかちし給へは「　　」しやうるり御せん、なのめならすに、よろこひ給ひて、れんせい殿、ふたりの中にとりこめて、ないつ、わらひつ、此ほとの心つくしのありさまを、かたりたまへは、……

とある。「　」箇所の文章の続きが不自然であるが、三古写本では、「　」部に当るところに、かくのごとき文辞がある。

かちしたまひ、かきけすやうにうせ給ふ。そのゝち、御さうしは、ほとなく、いきいてたまひけり。（北大本）

これにて古活字版に脱文のあることが知られよう。こうした本文関係からも三写本の本文の古形が考えられるのであるが、関川本の書物としての古形を保つ点からも、古活字版系本文の原姿に近いものをこれら三写本に求めることができる。関川本は奈良絵本としての古風のもので、桃山期より江戸期の交のものと考えられ、寛永六年刊の嵯峨本伊勢物語図を襲用している古活字版と同期かそれ以前と目されるだけに、これらの祖本はさらに遡り、古活字版はその系統の一本を活字化したものと考えられる。近時の三写本の出現は古活字版の成立事情に大きい示唆を投げかけるものといえよう。

四　古活字版系本文の位置

現存の『浄瑠璃』諸本のそれぞれの関係については、『じやうるり十六段本』（大学堂刊）において詳述した。結局残存する多くの諸本全てが同根であり、各本それぞれが原本の前部または後部、或いは中間の章段等を一部或いは全部省略したり、文章を間引いていったり、もしくは錯簡のある本をそのまま転写したり、誤写したりする間に、多くの異同が生じたこと等々により、複雑多岐に分れていったものであることを述べた。このように、全て同根の書ではあるが、それでも系統づけや、それぞれの系の特色をたどり得る。

古活字版系の本文は、それら諸本間にあって如何なる特徴をもつものであろう。本系の書は、比較的古格を多く残すといった善い面と、他系以上に文章の混乱部を多く持つという悪い面と、二面を併せ持つ点に特色がある。

古格や善い本文を持つ点について先ずふれてみよう。

初段、浄瑠璃の申し子の条で、各本の校異を取ると、古活字版は山崎美成旧蔵写本ときわめて類似した文辞を持つことを知る。山崎写本は現存本中一番文章面では痩せているが、もっとも原姿に近い骨格を有する善本であり、古形を一番に残している。その書と一致点の多い

ところに、古活字版本文の古格の残されている跡を知る。その一例をあげれば、初段（古活字版の段数で以下示す）峯の薬師へ捧げ物を約束する条り、

こかねの御たうを、七けん四めむにたてさせ、こうのしもふり、つるのもとしろ、からすのぬれいろ、わしのはたうのこかれは、おしのおもひはをもつて、ふかせて、まいらすへし、（山崎本）

とある文辞は、古活字版系にのみ見える。ただし、奈良絵本系に、「しろかねのみたう、七たうたてゝ」とやや近似した文章があるが、大分に違いがある。古活字版系の中でも北大本がこれに一番近い。

すゝめのせうてう、かものまかりば、つるのもとしろ、こうのしもふりをもつて、七けん四めんのたうを、ふきたてゝ参らすへし

とあって、両者の深いつながりをみることができる。この他、薬師仏の化現のさまやその持物、金の杖、金の足駄がすりへるまで子種を探す条などにも、両者の類似点を多くみる。

二段、姫の門外に立つ御曹司の描写で、他本が古詩古歌を詠して立つと述べられている箇所で、山崎写本が古歌の部分を地の文のように変化させてとどめる他は、その詞句はとどめていない。これに対し、古活字版系は古詩（白楽天と劉禹錫の詩句）も、古歌も文中に示している。

二段目、四季の泉水の、南の情景描写に、他本にない独自の本文をこの系は持つ。「みなみのおもての、花そのに、まかき、すいかき、まはらにて、月見んための、いたひさし、花みんとての、やへひかき、すはまに、いけをほらせて（うつゝ）」とある。この文辞は他系にないが、赤木甲乙絵巻・大鳥絵巻等の画図の中に、忠実に示されており、かつ絵巻系に「すはまに池をほらせつゝ」の僅かの文辞だけが残り、この文章が本来備わっていたものであることを如実に示す。

八段目、精進問答で次のごとき記述がある。

(イ)……しやうしのところへ、ふしやうしのくわしやか、よりあひて、二世の物かたりを申さんは、なにかくるしかるへきそ。

(ロ)〔しやうるり、此よしきこしめし、わらはと申は、これ、なにとなく、いやしき、しはのいほりにてさふらへとも、三世のしよふつは、つねに、やうかうなり給ふ。わらはに、かたそり給ふなよ。ほとけに、おそれをなし、御返りあれ、とそおほせける〕

(ハ)御さうしは、きこしめし、いかにやきみ、仏もこひをめさるれはこそ、うろちよりむろちにかよふ……（北大本）

この(ロ)の〔　〕部は、古活字版系にのみ残り他系は欠ける。浄瑠璃が、我家に三世の諸仏の影向がある。仏を怖れて帰れというこの言葉があって初めて、(ハ)の御曹司の言葉が生きてくる。山崎写本は(イ)の条（同文ではないが同趣の文）から(ロ)を経ずに御曹司の言葉として、いきなり「むろちより、うろちにかよふ……」とつながる。熱海本は、中間的なつなぎの文辞を少し残しながら、これまた御曹司の言葉とし

て次のような表現を残す。

写　　ほとけもこひを、めさるれはこそ、

古　いかに君、

熱　むかしより、かみや仏にもこひちといふしはあるそかし、それ天

写　　むろちより

古　　うろちより

熱　ちくの、むろちより

この(ロ)の箇所などは、古活字版系のみに残る古格の部分なのである。そうして、十段目後朝の別れの歌の唱和の条り、三首型が北大本にのみ見られることも前述した。以上が、この系の本文のすぐれている点である。

しかしながら、この系の本文に大きい不備のあることも、見のがすことの出来ない特色である。二段目、四季の泉水揃えの条に、後段に本来位置すべき四季の障子が竄入している。本来西面の泉水描写の中に、「すみやくおきなか、としをへて……四せつの四季をそ、まねはれたる」と、四季の障子の冬の景が混入している。また、他本では泉水揃えに引き続いてある草子づくしが、古活字版系では七段目御曹司が忍び入って浄瑠璃の部屋にそれを見る形になっているが、これまた位置の混乱によるものである。御曹司が姫の寝所に辿りつき、靡くものの例えを引いて、重ねて懸想詞をかける箇所で、他本をもとに復原してゆくと、古活字版系の場合大きくこの部分が二つに分れ、一つは八段目冒頭に、一つは九段目末に、さらに九段目最終部の姫の心情表現の中に竄入している。「おにのたてたりしいしのとも、なさけにあくと、きく物を」がそれである。このほか、七段目及ばぬ恋をした例を御曹司が挙げる箇所で、西行の引事の前半が脱けており、さらにそれに続く多くの引事の部分（女三の宮・小野小町など）が、八段目志賀寺の上人の引事の後に竄入している。他にも、御ざうつりの箇所の省略がはなはだしく、十段目二人の別れの所で逢瀬の短かきを歎く文辞が九段目大和詞の直後にその一部（「しやうるり御せんは十四なり……ことはにはなをさかせける」）が、九段目末尾にまた一部（「よひはさかもり……たかひのさんけ〈にけんさん〉、めされけり」）が混入するなど、他本に比しこうした現象が極端に多く、無残に寸断されて散在しているのは不可思議である。

以上見た如く、古活字版系四種の本文問題にふれた。北大本にやや優位な部分の多いことをみた。関川本は先に述べたごとく乱丁・落丁があり、また十二段末本文にかなりの錯綜がみられる。十二段目のそれは丁の途中の乱れであるだけにこの書の依拠本との関係によって生じたものであろう。しかし、全般的には各本それほどの異同はない。

これらを併せ見ることで、この系の祖型を望見することができよう。かく三種の写本は、古活字版の本文の成立事情を示してくれるそれぞれ意義のある貴重の書である。古活字版系の書も実は『浄瑠璃』諸本の普通の一系であり、関川本や斑山本で判るようにこれも奈良絵本や絵巻形態をもって伝播されてきた系統の書であった。さすれば、従来のこの系統をもって操浄瑠璃の正本としての性格を強く見ようとする見方は改められねばならない。

それにしても『浄瑠璃』の流れは多岐多様であることを、あらためて再認識させられる。この一系の追及だけでも、直接の継承関係を見ることはできず、多くの転写本の存在の可能性を知るのである。それはとりも直さず、『浄瑠璃』の人気のほどと、その勢力の大いさ拡がりの広汎であることを端的に示すものである。

終りに、貴重の書の紹介を許された関川亨氏、北海道大学図書館、ならびに関川氏本閲覧に際して格別の御世話を頂いた西宮市立大谷美術館三浦照子氏の各位に深甚の謝意を申し上げる。旧斑山本はチャールズ・ダン氏の御配慮によって閲覧出来た。また、撮影には本学文学部技官大橋哲郎氏の、翻刻には新真理子氏の御協力を得た。以上の方々に厚く御礼申し上げる。なお、本稿は『熱海本　上瑠璃』（京都書院刊）の拙稿解説、及び近く刊行予定の『じやうるり十六段本』（大学堂刊）解説と三部作をなすものであり、互いに支えあうところがある。